

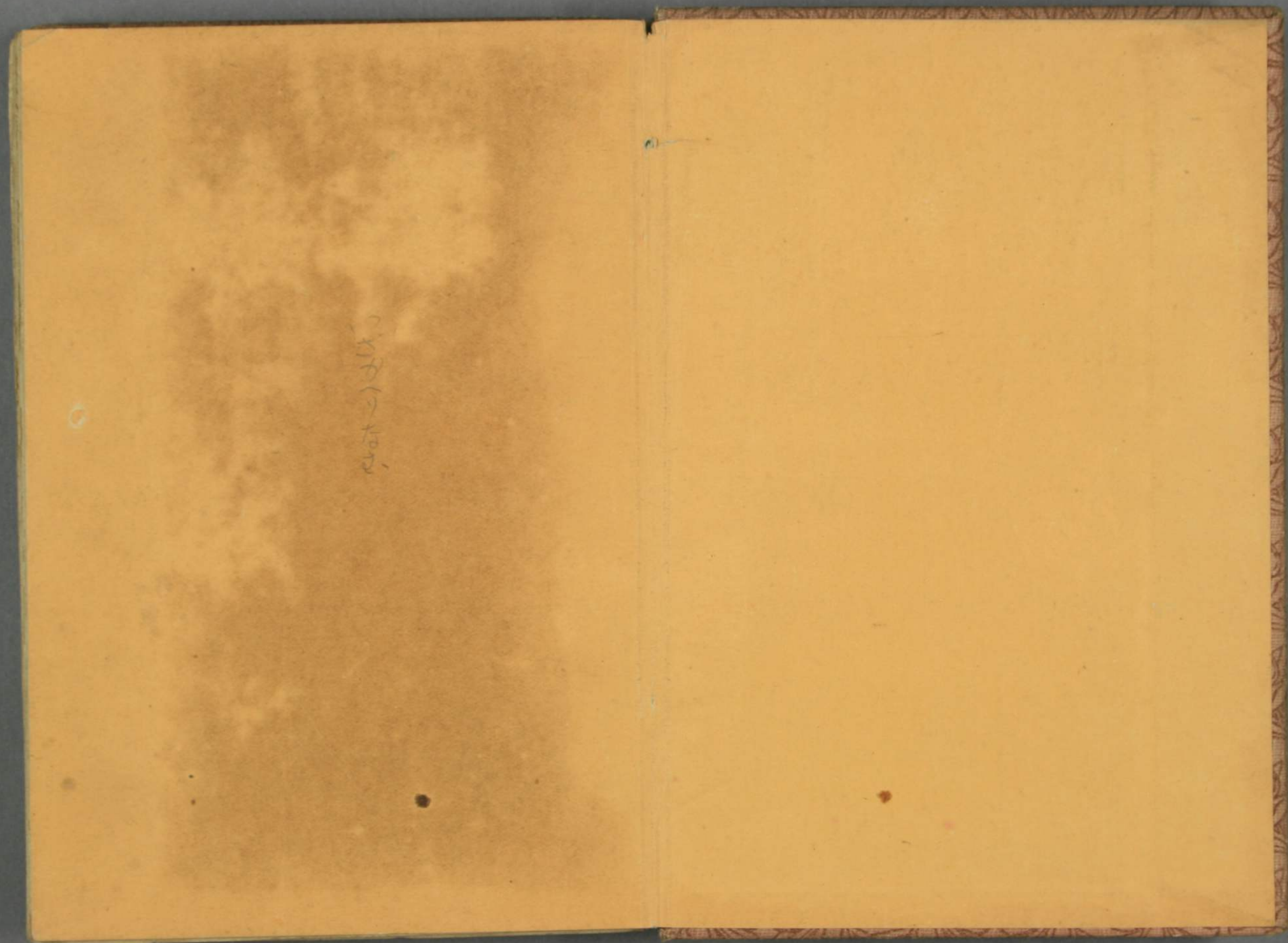
國

歸去來

國水田獨步

國





Handwritten text, possibly a signature or initials, located in the center of the left page.

來 去 歸



作步獨田木國

集作傑家名

編七第

内 容

歸 去 來	一
運 命 論 者	七九
酒 中 日 記	二九
戀を戀する人	一〇五
正 直 者	一三三

歸
去
來

母上には唯だ墓參のためとばかり、其餘は以心傳心のつもりで何事も言葉には出さなかつた。

「そんなら私も。」

と言はれたを打消して、

「一昨年もお歸りになつて又た。」

と答へた言葉は何となく角の立つたやうで、氣に爲つたが、それでも母上は自分の顔を見て微笑まれたばかりであつた。其夕暮には御自身で土産物などを買整へて直にも立たれるやうにして呉れた。たゞ一品、自分は母上に隠して自から買求め、行李の底に、大事に納つて置いた。匿す程の品物ではない、たゞ、

「それは誰に呉れるの？」

母上は問はれるであらう。

「小川の綾さんに。」

此答が自分の口から澀みなく出るだらうか、頗る覺束ない。

二

蒸熱い雲が空一面に垂れて、今にも大粒の雨が襲つて來さうな頃、自分は一人、新橋に來て少し時間が有るから其處らをぶらついて居た。肩を抑へる者がある。振り向いて見ると前田といふ何時も決活な男、同國の者で辯護士をして居る。

「何處へゆく。」

「ちよつと國へ歸つてくる。」

「一人でか。」

「さうだ。」

「そして今度は二人連で上京するといふ趣向かね。」

「馬鹿ア言つてる。」

「未だお目にかゝらんが宜しく言つてくれ玉へ、何れ御上京の節は拜顔の榮を賜はるだらうけれども。」

「馬鹿ア言つてる。」

「明後日の會には出席できないね。」

「手紙は出して置いたが、君からも諸君に宜しく言つて呉れ玉へ。」

「あゝ宜しく言ふよ。」

と妙に笑つて帽子を取つて、ステツキを振りながら行つて了つた。「彼奴また會で餘計な事を饒舌つて皆なで馬鹿な噂をするだらう。」と、自分は前田の後姿を見送りながら思つた。併し別に不快な感も發らなかつた。

間もなく瓦斯燈が點く、雨が降つて来る、横濱から汽車がつく、停車場内は混雑

を極めて来た。其間を自分は煙草を銜へたまゝ見るともなく人々の騒ぐのを見て居ると、群衆の蒸暑い中へ折り／＼飛沫を含んだ冷たい風が舞込んで来る、いゝ心持だ。自分は暫く何もかも忘れて居た。

三

汽車はさまでこまず、自分の臥べる餘地は十分あつた雨の降り込むのを恐れて、風上の窓を閉め切つて居たから何とも言へぬ熱さである。隅の西洋人は顔をしかめて居る。自分も堪へ兼ねて後の窓を少し明けて見たが、品川沖から吹きつける風で雨は遠慮なく舞込む、仕方なく又た閉めると、夕立だ、今に晴れる。」と言つた聲が彼方の方でした。

大森を過ぎると、雨は果して小やみになつた。人々はいそがしく窓を明け放つ、雨の名残が心地よく舞ひ込む、吐息について顔を見合はす、巻煙草に火を移ける者

もある、しかし誰一人話をする者はなかつた。

窓から頭を出して見ると、早や天際に雲ぎれがして、夏の夜の蒼い空が彼方此方に黒澄んで、涼しい星の光がきらめいて居る。田舎家の燈火があちこちに見える、それも星のやうである。田面一面に蛙が鳴いて稻の香をこめた小氣味よい風が吹きつける。

あゝ此香だ、此香だ、自分は思つた、「己は確に今わが古里に歸りつゝあるのである。」

「あゝ此香だ！ これだ。」自分は肺一ぱいに此氣を吸つた。

自分は四年前に一度故郷に歸つた、其と今度の歸國とは全く異つて居る、二十三歳の男が二十七歳になつて居る、これが第一非常な異である。彼時は學校を卒業したばかりで、其自慢がてらに歸つて、たゞもう子供のやうになつて一夏を海に山に河に遊びたい放題をして過ぎた。随分面白く遊んだ。何卒此度も面白く遊びたい、

併し最早二十七の分別男である、兎も角も東京で一個の職業を持つてゐる、未熟ながらも既に世間に出て一人前の位置を占めて居る男、まさか先度のやうな亂暴な眞似も出来まい。實は最早妻を持つても宜い歳である。
「さうだ。妻が有つても宜い歳だ、自分は其目的で歸るのだ。」
「旨くゆけば宜いが。」運命の神が呷く。

四

自分は空氣枕を出して横になり、はんけちを顔にあてゝ更に空想の世界に入つた。實はそのまゝ寢入つて了ひたい積りで。

自分が二十七歳ならば綾子は十九歳である、十五の小娘が十九になる、虚のやうな眞である。五人の姉妹の中で一番美しく成人するだらうと叔母も言はれたが、あの眼は誰に似たのだらう。姉妹とも皆な人柄のよい處は母に似たのだらう。父も好

人物だが、少し頑固で困る、一徹者を自慢にして居る丈け、正直は正直であるが。自分は頻りと綾子を想像の絹に描いて見たが明白りしない。大きな、睫毛の長い、周防灘のやうに穏やかな眼は微かに浮んで来るが、顔だちが霞につままれたやうで如何しても明白しない、其中我が叔母のやさしい丸顔が霞の中から現はれて、ここにこしながら、「峰雄々々、汽車のなかでぐすくしないので一足飛びに歸つてお出でなさい、私は待ち切つて居ます」と例の静な沈着いた聲で仰有る。自分は關ヶ原、琵琶湖、大阪、播磨灘、水島灘を遙か下界に見下して、雲の峯を幾箇も幾箇も蹴破つて飛びゆく。

物音に目がさめて、頭を上げると、汽車は停つて居る、國府津々々と呼ぶ聲が自分には眠さうに聞えた。

「未だ國府津か。」自分は欠伸もしないで其儘寢てしまつた。

五

其翌日、神戸で降りて少しばかりの用事を済まし、又た夜汽車に乗込んだ。今度は乗合の客に自分と同年輩の海軍士官が居て、何時しか雑談をはじめたが、さて結局がない。

ブランドデーも少しは手傳つて居たらうが、兎に角年少士官の氣焔はすさまじかつた。列國東洋艦隊の比較論も出る。黄海の役の手柄話も出る。其れかと思ふとミチツブメンからケピテンに成るまでに順當に行つても幾年はかゝる、況やアドミラルになるには何年かゝるか知れないといふ愚痴も出る。

「其くせ少尉で女房を持つて老耄れる準備をする先生があるから驚く。」
「それも氣樂さ！」と自分は相手の赤い顔、高い鼻、光る眼、まばらの口髯を見つめながら云つた。

「さうサ氣樂サ、併し氣樂がしたければ軍籍に身を置かないが宜い、船乗のくせに女房もないもんだハ、、、」

海軍士官特有といふ快活な高笑ひをして、時計を出して見て、

「最早十時半だ、少し寝ないと困るぞ。」獨言のやうに言つて、其まゝ横になり、自分の方を見ながら、

「しかし總領に生れた者は氣樂サ、君も其一人だらう、親には孝を盡し妻には忠を盡し玉へ。」とにこ〜笑ふ其顔が無邪氣で可愛かつた。見て居る内に其眼が次第に閉ぢて、巻煙草が手から落ちたと思ふと、「あゝ眠くなつた、失敬、寝るよ。」と仰向になり、直ぐやす〜と心地よけに未來のアドミラルは寢て了つた。

吹ひかけた煙草を手荒く投げて、自分は窓の外に顔を出した。ブランデーと議論と煙草とで少し逆上せた顔を夜風がひやり〜と吹きつける心地よさ。東の森の上が赤くなつて今にも月が出さうにして居る。大空には星が華燦きわたつて雲一つ無

い。あゝ穩やかな夏の夜！ 軌道近く並ぶ田舎家が折り〜飛ぶが如くに闇の中に消えて行く。汽車の車の單調な音、夜通し鳴く蛙の聲、それが自分の耳には交る〜聞える。自分は靜かに東の方を見て月の出を待つて居た。

二十七年の秋の初、廣島の大本營詰で派遣された時、其時も夜汽車で此處を通つたが、あの時の事を思へば今も心が躍る。今夜の心持と比べて見ると、あの時は高山に登りながら一足々と眼界が廣がるやうで一足々々氣が勇んでゆく、併し絶頂は噴火口かも知れない。今夜はそれと異つて、平原をゆる〜流れる大川に舟を泛べて、照りわたる月の夜を靜かに下つてゆくやうで、穩やかな楽しい小さな港が自分を待つて居るやうである。而も一昨年の秋と今夜とは何か意味深い約束が有つて相呼吸して居るやうに自分には思はれる。

汽車が突然山の麓を回つた爲め、月の出が見えなくなつた。自分は尙も窓に倚つたまゝ、思想に沈んで、見るともなしに黒い山影を見つめて居た。

楽しい追懐の念には必ず一種の哀が之を包む。しかし、それは花を包む霞のやうなもので、朧ろけなるだけ却つて情は深くなる。一昨年の事など思ふと、自分は何となく哀を催ほして来て、都にのこした母のことや、十年前に無くなつた父の事や、親しい友の事や、あれよりは是れと思ひつゞけて、懐かしい悲しい楽しい心の波に漂うて居た。そして此心持が更けゆく夏の夜の晴れわたつた静かな而も何となく哀れな今夜の様に能く適つて居るやうに思はれる。

身體も溶けゆくかと思ふと、眠けがさして来て堪へられなくなつた。此時、「君は未だ寝ないのか。」と士官が寢惚け聲で呼んだので我に返り、「イヤ眠くなつて来た。」と横になるや間もなく寢入つて了つた。

六

廣島には朝着いた、宇品からの汽船は薄暮に出る。最早何となく故郷に着いた氣

がした。甲板の上に集つて居る人々の多くが郷音を操つて居る。

船は恰度山中の湖水をゆくやうである。島々の裾には蒼煙が棚曳いて居る。大空高く晴れて西天の餘光水の如きあたりに宵の明星が大きく輝いて居る。其光の長く水に映れる方向に船の舳が向いて居る。動くともなく船は動く。近くともなく前の島が近づく。吹くともなしに潮風が船の進行につれて面を拂ふ。清涼の氣が海面に行きわたつて居る。處々に白帆が見える、さすがに風は吹いてるらしい。

柳井津に着いたのは夜の十時ころでもあつたか、港から二里に近い道を車で走つても家に着くのは夜中になる。深夜叔母を騒がすのも氣の毒と其夜は其處に一泊して、明日、朝早く我懐しき家路へと向つた。

田布呂木の峠を越えると、我家の後なる岳の松林が、微にそれと見分がつく。水場の入江に續いて遙に天際の一線を劃するは波靜なる周防灘、日に映じて白く立騰るは鹽濱の煙。豊年だな！ 自分は思つた。青々と續く田面の末遠く眺めて、

「今年はどうだな米の出来は。」
 「上出来でさア！」車夫は勢こんで駈けながら答へた。路傍の萱は朝露に光つて居る。

水場の入江に注ぐ八海川を渡つて右に堤をさかのほると間もなく田圃道の車も通らぬやうになる、其處から下りて車夫に行李を擔はせて歩むと、三方丘に圍まれ淋しい小さな谷が直ぐ前に現はれる、これが自分を育てた搖籠である。谷の奥の丘の麓に、石垣で築き上げた家敷の白壁が朝日をまともに受けて居る。それが自分の生れた家である。

門に着いて、石段を上りかけると、鶏が勇ましく鳴いた、家敷は森として居る。目に見えざる力ありて、自分を後に押しもどすやうに感じた。自分は直立つた、そして耳を傾けた。

七

叔母は不在であつた。下婢お光の話に依ると、昨日麻里布の小川に行つて一泊し、今日歸る筈であるとのこと。

麻里布の小川とは綾子の家である、我が吉岡家及び叔母の近藤家と此小川家は親戚でこそなけれ、古くから親族同様の交際をして居て、互に訪問すれば其夜は泊つて歸る位は常のことである。叔母は自分の爲めに小川を訪うたに違ひない。

自分は東京を立つ三日前に、叔母に向つて歸國の報知を出して、同時に小川の一室、海に突出してある離座敷を此夏の間借りて貰ふやうに依頼した。自分は神戸に一泊する筈が、用向が早く濟んだゆゑ、豫定よりか一日早く歸つたのである。

叔母は自分の歸宅を今夜か明朝と豫想して居るから、多分麻里布からは今日早く歸るだらうとは思ふが、一時も早く逢ひたく、直に村の若者を使に立て、迎ひにや

つた。元來自分の叔母といふのは自分の父の妹で此時四十になる寡婦である。三十三の時夫に死なれて、其後は一人の子を相手に何家へも再婚し玉はず、山林田畑、可なりの財産に頼つて安穩に生活して居たのが、自分の一家東京に移轉した後は、我家の不動産總て叔母の監督に任し、叔母は其家を疊んで我家に住んで居るのである。

叔母は色の白い丸顔の小づくりな人で、思慮深く温厚な女である。自分を可愛がること我子の如く、其樂みは我子の孝一を一日も最く東京に出して自分の監督の下に十分教育したいことである。自分は叔母を信ずる、非常に信ずる、そして小川綾子の事は兼ねて其れとなく叔母に知らして略自分の意をほのめかしてある、賢明なる叔母は多分之を覺つて居るに違ひない。

自分は叔母に一時も早く逢ひたい、其優しい顔が見たい。しかし叔母は昨夜小川に泊つたのである、歸つて來て如何な笑を湛へて自分を見るであらうか、如何な話をするであらうか、さて左様思ふと何となく我胸が穩かでない。ぢつとして其歸宅が待つて居られない。洋服を脱いで浴衣に着更へ、庭に飛出した。

八

井戸傍に行つて、山井の深い底から汲上げた水で身體を拭き頭を洗ひ、後で釣瓶から直に一口飲むと腸に染みわたる。井戸の家根から物置の家根へと葡萄棚がわたしてある、青葉をすかして朝日がきらめき、紫の房累累と珠玉を連ねたやう。家鶏の一族が鷹揚なる牡に導かれて藪から出て來た。藪や山ではしやん／＼蟬が勇ましく鳴き出した。日はぢり／＼照りはじめた。仰けば空は今日も高く晴れて蒼々として深碧の色を凝らして居る、ア、夏だ！夏らしき夏だ！自分は身うちに健康の充ちあふれるを覺えた。

昔戸の小門を出ると直ぐ丘に登るべき小徑が有る。丘には一抱以上の松許り樹つて居て、自分の家敷を覆ふやうにして高く空を衝いて群り聳えて居る、今朝柳井津からの路すがら田布呂木の坂より望んだのは此松林で有る。丘の頂まで數百歩許りの小さな山ながら、自分の爲めには小兒の時の樂しき紀念其大半はこの丘に在るのである。

自分は此丘で啄木鳥を捕へた。此丘で捉迷藏をした。朝早く起きて松茸の得ならぬ香を嗅ぎながら其處か此處かと探した事も幾度ぞ。夕暮には頂の西に蟠屈して居る一座の巖に登つて、兩足を垂れて腰をかけながら麻里布の浦に沈み行く夕日を見送つた事もある。學校友達を引連れ來て、戰爭の眞似をした事もある。或歳の秋の初、恐ろしき暴風吹きすさんで戸を破り垣を壊し葡萄棚を落すなど大荒に荒れた事がある。其時大概の風では倒れなかつた丘の松が、林の端に樹つて居た中の二三本、根から吹倒されて、暴風が過ぎ去つたあと、自分は總ての小兒の如くに、歡聲を放

つて外へ飛出して直に倒れた松を見出し、其一本が彎曲して橋のやうに横はつて居るのを見るや、下駄を脱捨て、恰度藝人が危き綱渡りでもするやうに恐るゝ此橋を渡りはじめた。この様を父上が見給ひ、「危いぞ〜」と叫ばれたが、其翌日父上は木挽に命じて此橋を落してしまはれた。あゝ懐かしい丘よ！斯る果敢なき小演劇も、我小兒の時に於て、總て寛大なる爾の額を舞臺としたのである。自分が都に居て様々の事に遇ひ色々の思に沈む、その忙しい間にも我深き魂、實に幾度か爾の上に飛びしぞ。

「お光！」自分は下婢を呼んだ。「山へ上るから叔母さんが歸つたら拍子木を撃つてお呉れ。」山家では拍子木を種々の相圖に用ゐて居る。

丘の頂は平たくなつて、松の根が蛇のやうに其處等一面、這つて居る。北及び西は小松ばかりゆる可なりの眺望が有る。自分は子供の時よく馬乗に乗つて遊んだお馴染の松の根に、先づ腰を下ろした、そして氣が初めて落ついた。

二日前には東京に居て足を爪立て「將來」をめぐけて駈足をして居たのが、今は故郷の丘に歸つて、松根にどつかと尻を下して居る。騒々しい現から静かな夢の世界に入つたと言はうか、將た怪しい、重くるしい夢が忽然として醒め、長閑かな、日の長い現の世界に歸つたと言はうか。

自分は其まゝ少時が間ほんやりして居た。突然「若旦那様！」と呼ぶ者がある。誰だらうと見廻すと小松の上に顔を出して居るのは自分と同年輩の宇之助と呼ぶ、村の若者である。

「何時お歸いんなさいました。」

「今朝歸つた。」

「長く御滞留で御座りますか。」

「この夏一ぱいは居るつもりだ。誰も變はないかね。」

「難有う御座ります。」

「徳三は達者かね。」宇之助を見れば自分は必ず徳三を想出す。二人は兄弟も同様の仲よし。

「徳三は此春から布哇へ行きました。」

「さうか。」自分は驚いた。

「菊藏も行ききました。」

「さうか。」

「私も行かうかと思つて居ります。」

「まア何れ晩にでも緩り遊びに来るが宜い。」

宇之助は去つて了つた。布哇出稼！これが我故郷の流行の一つとは兼て知つて居たが、斯くまで村の若者相率ゐてゾロ／＼と出て行く程には思はなかつた。中には布哇から直ぐ歸らないで亞米利加のはてまで流れ行き、其儘消えて了ふ者もある。それやこれやで出稼のために我故郷では色々の悲しい痛ましい話説が幾多も出來て

居るのである。「世界を家となす！」結構な話である。勇ましい文句である。併し其故郷に於て確實なる生活の中、限りなき平和を享有し得る運命を棄て、黄金の山でも發見するやうに、騒いで、浮立つて、天涯萬里に流浪するのが目出度い事であらうか。幸福であらうか。

「何が不足なんだ！ この長閑な、豊かな、冬寒からず夏暑からず、四時の風光に富み、天の祝福を十二分に享けて居る村落に生れながら何が不足なんだ！」自分は思つた。

併し、突然、「我も亦た其一人ではないか、布哇と東京と何の撰ぶ處ぞ」と思ふと、兼ねて自分の心の底深く潜み居て、折りくゞ現はれて自分を難まして居る「歸去來」の一念が火の如く燃え上つた。少時は叔母も綾子も忘れて了ひ、抑へ難きブライドの氣胸を衝き、昂然として、松の間を彼處此處と大步して居た。

拍子木が鳴つた、激しく、そして急に。自分は引落さるゝ様にして丘を下りた。

九

叔母は兼ねての優しさを以て自分を迎へた。

「私は今夜か明日の朝あたりお歸りかと思つて居ました。」

「イヤ其積りでしたが神戸の用が早く濟みましたから一日も早くと思つて急ぎました。」

夫より一通の挨拶が濟むと、

「すつかり成人になつておしまひだねエ、口髭まではやしてサ。」

叔母は茶をつぎながら、自分の顔を見て言つた。

「だつて最早二十七ですよ叔母さん。髭が可笑しければすつちまひませう。」

「そんな立派な髭を除らないでもいゝよ。」叔母は笑つた。

「笑へば今夜すつてしまひます。」

「そして色も黒くおなりだねエ。」

「オヤ、首も序に除つてしまひませう。」

叔母は如何ばかり可笑しき事と雖も、決して大聲で笑はない。たゞ莞爾と笑ふ、其笑顔は未だ四十とは思はれない、見た處、四年前と變らなかつた。頬の邊には血色が淡く射して圓い肉づいた顔は昔のまゝに白かつた。其優しい、人柄のよさゝうな眼元で、自分の顔を頻りと見ながら話された。

「小川でも皆な宜しくといふことでしたよ。」

「さうですか、皆様達者ですか。」

「皆な達者ですよ。そして峯雄さんに早く遇ひたいツて言つて居ました。」

「先達手紙で叔母に願つて置いた、離座敷の方はどうでせう。」

「それがねエ、生憎今寒がつて居てね、多分一週間もしたら明くだらうといふ事だがね。」

「オヤ左うですか。」自分は少し驚いた。

「なんでも朝鮮から客が來てるやうで、其人が離室に滞留して居るやうでした。」といふ叔母の顔は頗る眞面目で有つた。

「朝鮮からの客ツて何者でせう。」

何者で有らうが餘計なお世話ではないか。小川は朝鮮貿易を重なる業とし、朝鮮釜山には多くの知人、のみならず親族すらある家ではないか。殊に麻里布村の者は澤山釜山に移住して居る。朝鮮貿易をする者は小川の外、麻里布には猶ほ四五軒あつて、皆な五十噸、七十噸、乃至九十噸までの合子船を四五艘も持つて居るのである。「朝鮮」の語は麻里布で少しも外國らしく響かない、東京大阪といふよりも今少しく近しく思はれて居るのである。且つ同村の中に編入して有る馬島、麻里布の岸から數丁を隔つる一小島の住民の七分は已に釜山仁川等に住居して、今は空屋に留守居のみ住んで居る次第である。此等の事情よりして、小川に朝鮮からの客が來て

居るに何の不思議があらう。或は親戚かも知れない。然し、自分は唯だ理由なく、

「何者」といふ不平をこめた侮蔑の言葉を吐くに躊躇しなかつた。

「何者だか私には解らなかつたがね、大事の客らしかつたよ、随分ちやほや取持つて居るやうだつたから。」

「親戚でせう？」

「親戚では無いやうだよ、お常さんも別に詳しい事は話さなかつたが、どうも國の者ではないらしい様子だよ。取引先の旦那だらうと私は思ふが、併し夫も推量だから能くは解らない。」

「一人ですか。」

「番頭と二人らしい。イヤ一人は番頭だらうと私は思ふ。」

「其旦那といふのは幾歳位な奴です。」

「私は能く見ないから知らないが、昨夕磯を歩いてるのを遠くから見だが、若い男

らしい。」

叔母は何心なく話したのだらう、然し、自分は何か佳い心持がしない。忌々しいやうな、情ないやうな氣持がして、急に小川に行くのが嫌になつた。

「叔母さん私は小川の離座敷を借りるのは止ませう。」と口元まで出たが、流石に言出し得なかつた。

「幾日くらの滞在するのでせう。」解つて居る事を聞いた。

「だから一週間位だといふ事だが、又た明日にも歸るかも知れんやうな話をして居たよお常さんは。」

「小川でなくつても何なら浅田の部屋でも宜う御座いますかねエ。」

「だつて小川ではお前の來るのを皆な待つて居ますよ。離室が明くうち母屋でもよければ明日からでも來て下さいて大變よろこんでお前の來るのを樂にして居ましたよ。」

「やい。」

少しは胸が涼々したやう。然し、母屋は左なきだに多人数の家内で狭いことを知つて居るから、兎も角も朝鮮の客の去るを待つことにした。

先づ其はどうでも宜いとして、結局、叔母は綾子の事は何事をも語らなかつた、其名前すらも口に出さなかつた。何故だらう。

叔母既に然り、無論、自分の口から何で綾子の名が出されう。然し自分は甚だ物足りなく感じた。午後は叔母と共に土産物の分配方を定めて、親戚の三四軒、其他にも使者を立て、送届け、小川へも、五人の姉妹の一人は嫁して家に在らず、残りの四人に、夫れく、土産の印だけは送つた。一品、母にも隠して来た物は叔母にも見せず、手づから綾子に贈るつもりで行李の底に潜まして置いた。

其翌日、晝飯が済むと、山家の常として、叔母も下婢も雇男も、皆な涼しき處を撰んで晝寝をしてつた。山家の最も静かな時はこの時である。野にも山にも人影が見えない。

叔母は自分にも少し寝んだらよからうと、奥の涼しき小座敷に枕まで出して呉れたが、東京では晝寝の習慣がないせるか、寝て見る氣にならないので、懐に二三冊の書物を入れて、漂然と家を出た。浴衣一枚に兵子帯、大きな麥藁帽子にステッキ一本、清風は懐に入り放題である。

時は正に盛夏の日中、日は眞上よりぢりりと照りつける。併し自分には斯の夏らしい夏の、日盛りの最も暑い時、あてもなく野山を漫歩することが如何な佳い心持であらう。斯な時には自分は何時も夏の徳を讚美する。たゞ理由もなく身が軽くなつて、氣が確りして、何か心に深く決する處あるかの如く感じて横行濶歩するのが例である。夢神ひとたび紅塵の都より飛んで、西の空遠く雲の彼方に通へば、

胸を引緊らるゝやうな思がして、如何なる用事をも事情をも打捨て打破つて、飛んで歸りたく、心も空になるのは、實に此の横行濶歩の時を思出すからである。

其處で自分は先づ我近郊中の最も高き丘なる「高塔」と稱するに登つた。高いと言つても麓から十分もかゝらないで其頂に達することが出来る。満山たゞ姫子松ばかりで立寄る木蔭もないが、眺望は第一である。これを向へ越ゆれば更に小なる丘あり、其頂は老松數株、蛇のやうな根を組合はして茂り、麓には雑木の林が取巻いて居て、眺望もよく亦た休息するには最も適して居る。自分は「高塔」の頂に立つて暫く我故郷の全景を見渡し、遠く南の空、山ひらいて海面の見ゆるあたりには雲の峰兀として聳ふるを見、毎時ながら我村落の美なる、穏やかなる、靜かなる、そして豊穰なるを祝福して後、此小さな丘へと來た。

松の根に腰をかけ、懐から一冊を取り出して膝にのせ、さて大空を仰ぐと、空は鋼鐵を張詰めたるかと思はるゝまでに高遠一色、凝つて動かす、太陽は瞬もしないで

唯だ熟と下界を見つめて居るやう。たゞ人に迫る一道の活氣みちくして、うつらうつらと眠り且つ酔へる青葉の末よりは陽炎たちのほり、正に天地の精氣煥發して其極に至れりと覺えた。此時、乾坤聲なきに聲あり、耳をすませば直ぐ頭の上なる松の梢をわたる風の音は冬の夜の冴よりも更に幽遠の調を奏して居る。

書はラセラス傳である、自分は幾度もこの書を読んだ、然し依然として我愛讀書の一たる眞味は失せない。讀みくして幾干もなく、身の此谷に在るを忘れ、心はアビシニヤ「幸福の谷」を辿つて居る。あゝ人は幸福の谷に住みながらも、年若き血は更に幸なる原をとめて流れ出でんことを希ふものかと思ひつゞけ、何時しか波瀾なけれども却て春海一望、霞の如きジョンソンの筆は自分を捉へて容易に放たず、斯くて時の經つのを忘れて居た。

「さうだ！ 幸福の國は何處にある。」自分はふと頭を擧げて、眼を半ば閉ぢ夢想の翼を空曠に放つた。日はやゝ西に傾いたが、夏の日盛は實にこの時と言つても宜し

い。空には銀をのべたやうな白雲一片。悠々として動いて居る。草も木も野も山も悉く日の光に酔うて、精溶け髓まどろみ、周圍の林で小蟬が、懶けに單調に、聲を曳いて居る、それが恰度日の光の波動を無窮に傳へて居るかのやうに思はれ、長い長い夏の日が此まゝをやみなく永久に續く如く感じられた。

而も人力を以て壓ゆ可からざる、自然の不羈奔逸の氣、天より地より雲より山岳より縦横に交叉して、勃勃として自分に迫るを感じた。

「さうだ！ 眞の幸福の國は何處にある。自分は起つて、深き思に沈みながら其處らを彼方此方と歩きはじめた。恰度、昨日の朝、我家の丘で歩いたやうに大股で。

「眞の自由こそ眞の幸福ではないか。眞の自由は我が如き心に多少の準備ある者が田園の生活を營む事に依つて始めて得らるゝのではないか、我に恒産がある、即ち衣食の自由がある。我には讀書の嗜好がある、即ち心靈の慰藉がある。我には此自然がある、即ち心と體の牧場がある。

「凡て此等の者は天が自分に與へた賜物である。何を苦んで此賜を捨て、自から好んで都會の生活に此身を投ずるのだ。「事業のため」「義務を盡さんが爲め」「國利民福の爲め」「人類の爲め」、なるほど實に左うかも知れない。希くは以て自ら欺く勿れである。凡て此種の美名を以て爾を束縛する勿れである。

「自分は果して少しの束縛を感せずして、都會の生活を樂しんで居るか。決して然うでない。虚榮の奴隷に非んば、奢侈なる遊戯の使童である。只だ日一日と何者か眼前三尺の先に浮動する處の金色體を逐ひつゝ生活して居るのである。少しも落着いて、俯仰して、此天地の生を受用する暇がないではないか、其上ならず、此事に付いては彼人、彼事に付いては此人と、夫れ々々競走すべき人を有し、或は嫉妬し、或は羨み、或は冷笑し、或は崇拜す。見よ、すべて是れ奴隷の心情の狂態ではないか。

「愚なるかな。」と自分は思はず足を停めて衝立つた。此時ふと胸に浮んだのは綾子

である。

「さうだ！ 若し不幸にして綾子は我妻たらざるも、其でも宜しい。「戀」、「名譽」、なんだ！ 冷笑したくなる。此心は何者の奴隸たるをも許さない。たゞ自由なる、淳朴なる、剛健なる、不羈獨立なる生活！ それだ！ それだ！ 砂漠に住む獅子の生活こそ我願である。野蠻？ 野蠻なら何だ。我は野蠻を愛す。世に盡すべき義務とや、人は獨立不羈の生活、平和満足而して自由の生活を営むべき權利を有して居るのだ。自から欺いて倫理學とかいふ奴隸の信條を招牌とすべき義務はない！」

思ひつゞけるにつけ、自分は思はず莞爾として微笑せざるを得なかつた。

「眞の幸福は此谷にあるのだ！」

「眞の生活は此山林にあるのだ！」 自分は今度こそと決心して丘を下つた。然し直ぐ此まゝで東京に歸らないといふのではなく、兎も角、従前の通り都會に居て、思ふ放題に働いて自由に生活して、其で面白くないやうなら、何時でも直に足の塵を

拂つて此故郷に歸つて來る、其時は如何に此胸が清々するだらうと思つたばかりであつた。

「左う都合よく行けば宜いが。」運命の神が私語やく。

一一

家へ歸つて見ると、河村といふ親戚から二三日滞在の積りで遊びに來いとの手紙が來て居た。河村は箕山の麓なる曾根村に在つて、我家より一里半の行程である。叔母の勧めで直ぐ支度をして家を出た。

田舎家の事ゆゑ、別にこれといふ待遇もないが、今も猶ほ小學校々長を務めて居る此家の老主人は自分を昔ながらの子供扱にするだけ、自分も我儘を言つて勝手に遊ぶ事が出來て、二日間を面白く送つた。すつかり子供に成りすまして何も考へず、一日は老人のお供をして近處の沼に鮎釣に行つた。其日の夕暮の事であつた。釣つ

て来た鮎と我爲に水場の魚塘から上げさした鱸で晚餐が開かれ、其座敷は我故郷一郡の稻田林野を一眸の中に攢め得る好位置にあることゆゑ、村酒ながら美味く飲まれ、老夫婦と自分と三人、陶然として酔うた時、老婦人は自分の顔を笑ひながら眺めて、

「しかし貴方も最早貰つて可えぢやらう。」

「何をです。」

「嫁をサ。」

「最早可いでせうか。」

「可えとも。東京には別品が多いから撰取りぢやらう。」

「貰ふなら小子は故郷で貰ひたいと思つて居ます。」

「ハ、お多福ばかりで爲方があるまい。」

「さうで無いでせう。」

「さうかね、お氣に入つたのがあるかね。」

「有りさうですなエ。」と自分が答へたので、黙つて聞いて居た老先生と夫人は、顔を見合はして笑つた。

多分この兒も最早や隅には置けなくなつたと思つたらしい。

「誰だらう其幸福な娘は。」

「幾多も有りますよ。」と言つて今度は自分が笑つた。

「先づ其中で首尾よく及第したのが一番幸福者よ。」と老先生が口を入れた。

「さうとも、峰雄さんに貰れて東京に住むなら女の果報ぢやらう。」

「然し私は最早可い加減に田舎に引込まうと思つて居ます。」

「馬鹿をお言ひなされ。田舎の者は如何かして東京に出ようと思つて居るに、貴方のやうな技倆のあるものが、わざ／＼東京から此田舎に煤りに戻つて如何なるものか。第一東京の母親が承知なさらんわ、其ねエな馬鹿なことは。」老先生は眞面目で、

十五年前と同じ口調で教訓を垂れた。

「さうですかねエ。」と答へて自分は氣にも掛けなかつた。老先生も亦た我一時の出任せとばかり思つたか、教訓も其きりで止み、後は楽しい罪のない雑談に移つて、三人心地よく酔ひ、晝の鮎釣の疲勞で自分も早く眠つて了つた。其翌日、暑くならぬ中にと、朝早く我家に歸つた。

一一一

其晝時分、麻里布の小川から使者が来て、朝鮮の客は昨夜立つたから、直ぐにも來て宜しいとの事である。且つ使者の話に依ると猶ほ三四日滞在の積りが大阪に向つて急に立つことになつたらしい。使者に來た男は五郎と稱つて、元は貧家の孤兒であるのを小川で可憐さうに思ひ、引取つて世話をしたので極く幼少の時から小者として使はれ、今日では主人と同船して航海することもあり、年輩は自分より二三

若い年よりは老けた若者である。自分は以前から此男は能く知つて居た。

それでは夕暮前に行くからと使者を返した。返しては見たが流石に心は何となく穩かでない。無論自分は小川にゆけば歓迎せられるが例である。娘等は皆な自分と極めて親しい、自分のことを兄様と呼んで居る。然し自分は今度四年目で歸つたので、此以前十八であつた二番娘の露子は二十一、十五の小娘であつた綾子が十九の娘盛、其下の子供もそれ々々見違へるまでに變つて居るだらう。其處で以前は兄様と呼んであまへるやうに親しかつた此娘等は今度、どんな様子で自分を迎へるであらうか。迎へらるゝ本人は最早昔の唯の兄様でなく、思想から感情から餘程變つて居るのである。其上、この兄様は一個の大きな望を持つて居るのである。先方でも色々な感情で自分を待つて居るだらう。自分の心の穩かならぬも無理はない。兎に角從弟の孝一と二人で出掛けた。

燈の點く時分に小川に着いた。直ぐ離室に通されて行くと、軒端には岐阜提燈がつるしてあり、盃盤が運ばれて居て、主人は待きつて居た處であつた。

様子が既に變つて居る。此以前の歸郷の際は唯だ郷里の腕白息子の少し大きなつたのを迎へたといふ丈だが、今度は東京からの珍客を待遇するといふ風である。

嘗てこれまで自分に對して眞面目くさつた挨拶をしたことのない、快活な潤達な主人が、何事ぞ、極く丁寧に時儀をして、頗る眞面目な顔つきで鹿爪らしい文句を並べて、時候の挨拶から何から正則を踏んで出て來た。

順次に現はれたのが、自分は何時も叔母と呼んで居る女主人、露子、綾子、時子、梅子の五人、何れも眞面目な挨拶をして丁寧の時儀をしたま、黙つて控へて居る。兄様どころの話ではない、其中にも綾子は澄ましきつて居る。露子は第二の母とい

ふ格で末の梅子を傍に引つけて無意味な顔を正面に向けて居る。主人と自分が面白くない朝鮮貿易談をして居る。其も少しも身の入らない一通りの應答を他の連中は謹んで拜聴して居るのである。孝一こそ大迷惑で、平常も來ては腕白の限をするのが、今日は自分のお蔭でお客扱にせられ、自分の傍にちよきんと坐つて足をもぢもぢさして居る。

然し主人も斯んな窮屈な幕の主人役は元柄にないので、自分と孝一に入浴をすゝめ、其間に浴衣に着更へて自分を待つて居た。坐には主人の外に露子が居るばかり、其他は皆な母屋に引退つて、孝一まで彼方に連れられて了つた。露子はたゞ黙つて酌をするばかり。主人は酒につれて次第に其本色を發揮して來た。次第に其聲が高くなる。

小川家は先代からの船主で、今の此主人は竹藏と呼び、可也の合子船七艘を持つて居て、先づ此近在では金持の一人に數へられ、不足なく世を送つて居るのである。

若し一の不足を言へば男の兒のないことで、五人の子供が悉く女子。惣領は同郡の豪農に嫁し、次女の露子が家督を取ることになつて、其養子も略定つて居る。あとの三人が未知數なので、主人の苦の種は先づ此未知數の行末位なことに過ぎない。元氣で率直で、負けぬ氣で、若い時分は北前船を乗り廻したその道の剛者。北海の怒濤を叱咤する勇氣と我慢とを有ちながら、又た瀬戸内の春の波のやうな穏やかな優しい人柄である。如何いふものか自分には過當の希望を囑して呉れて、何時も自分のことを他に吹聴して居た。

其處で今有體に言ふが、近在の者は小川の主人は其娘の一人を吉岡の峰雄さんにくれる積りだと噂し、自分も亦た主人の様子で或は然うかも知れぬと感じて居たのである。若し其噂が事實で、而して自分の思惑が當つて居るとすれば、自分に嫁すべきは綾子の外にない。且つ綾子こそ自分の最も氣に入つた娘なので。

其處で、自分は今度はこれを決めて了ひたい積りで歸つたのである。無論その手

續は我が叔母に頼んで能く先方の様子を探つてもらひ、十分の望を見た處で、叔母の口から其となく話を出し、凡その約束だけ決めた上で東京の母に電報を打ち、我家で式を擧げる計畫を立て、居た。そして自分は暫く此離室に滞在して、面白く海に遊びながら綾子當人の様子と心持とを略確める積りであつた。無論自分の口から主人に向つてそんな話の糸口をも示すべき筈でない。併し、ないくは主人が酒に酔つたまぎれにでも、それに似た謎語ぐらゐは掛けてもらひたかつた。處が主人は酔ふに連れて、朝鮮貿易に關する氣焔ばかり吐いて、互の身の上話など少しも爲さない、爲さうにもない。

「相變らず元氣ですネエ。」と自分は己むを得ず楫を少し横に取つた。

「イヤ左う言うて貰ふと嬉しいけれど最早駄目だ。この節は自分で何處ともない衰へたのが知れますわい。」急に弱いことを言ひだした。

「そんな事を！ 其身體を御覽なさい。」

「イヤ全くですよ。身體は以前十分に鍊えた奴ぢやから見た處では、貴方の身體よ
りか頑固かも知れんが、最早心が弱つて居る、船ならキールが朽ちかゝつて來たの
ぢやから、とても長くは役に立ちませんワイ、それから見ると貴方なんと羨ましい。
これからうんと働かうといふぢやから。」

「どうして、僕なんか駄目ですよ。」

「そねえな事がありますもんか。貴方なんと十分學問はしてお出でるし、人間は智
慧者ぢやし、出世するなアこれからぢや。」

「僕は餘り出世したくもありません。無益なことまで有つたが、酒のせるか、つい口
が滑つた。」

「何故のう、そねえな事がありますもんか。」と眼に角を立て、叱るやうに言つた。

「出世した處で高が知れて居ます、それよりか早く故郷に歸つて來て、山の世話か
田の世話でもして長閑に暮らしたはうが善くはありませんか。」

「馬鹿アお言んされな。今から其ねえな坊主臭い事を言うて可えもんか。老人のや
うなことをお言んさる！」

「さうですかねエ、併し澤山若い者が田舎に住んでるぢや有りませんか。」

「それは其れ、これは此れ、學問が無いなら東京で出世しようと思つても出來ん、
貴方のは其れが出来る、話が違ひます。」

「少しばかりの學問に迷つて、東京で颯競のやうな暮しをしないで、別に食ふに
は困らないし、此方で氣を長く暮したはうが人間の幸福ではありませんか。」

主人は黙つて了つた。唯だふーんと言つて、杯の中を熱と見つめて居る。沖から
は涼しい潮風がそよ／＼と吹きこみ、軒の提燈は軽く動いて居る。

「第一、東京に居ては斯んな風に落着いて夜が更けようがお關ひなく、潮風に吹か
れながら悠然酒を飲んで心からの話をする事など、とても出來ませんよ。」

主人は尙もふーんと考へたぎり應へない。夜は寂然として居る。磯を嘗めるやう

な波の私語が直ぐ家の下でするばかり、外面は星冴えて薄明く海が光つて見える。自分も何となく感に堪へない心地になつた。主人は急に頭をあけて、

「實に左うかも知れんテ。私なんども何ほう船で乗り廻して、港々で仕たい事をし
て騒いでも、矢張り此阿多々ノ鼻へ錨を投げこんだ時の心持には比べられんから
の。」

「故郷は一番穩かな港ですよ。」

「併し貴方も今少しは波にもまれて来たはうが可からう、今少しは！」

いかで此優しき言葉に逆らふことが出来よう！

「さうです、僕も直ぐ東京から歸ると言ふんぢやアないんです、まア今言つたやう
な心持で居るといふだけで、面白くない時は直ぐ歸つて來るといふんです。」

「さうともく、其時は直ぐ歸つてお出でるが可え、波のない港がちやんと待つと
るから。」

自分は染みぐくと此言葉がうれしかつた。主人は猶も言葉を次いで、

「眞のことをいふと峰雄さんは人間が出来すぎとる。」

「どこがです。」

「今の若い者は少し學問でもすると、直ぐ天下でも取るやうな望を起して騒ぎ廻は
る。峰雄さんのは其と反對で學問が有つても出世するのが厭ぢやといふんぢやから、
大分話が違つてる、併し私は感心ぢや。」

「感心なこと有りませんが、矢張性分でせう。」

「イヤ其ればかりぢやアない、矢張學問の力ぢやらう。私は唯だ貴方が其心持で東
京に居て働くなら必定出世するぢやらうと思ふ。」

「さうですかねエ。」と自分は此話を切上げた。朝鮮の客のことを聞いて見たく思つ
たが遂に機會が無くして此夜は已んだ。酒が濟んで後、雑談に時を移し、主人は母
屋に歸り、自分の寢に就いたのは十二時過ぎであつたらうか。綾子は一度顔を出し

たぎり、其後は聲も聞えなかつた。

一四

二三日滞在して居る中に、娘等の自分に對する遠慮は殆ど一掃されて了つた。自分には以前の兄様に立還つた。我座敷は集會所の如くなつて、姉の露子までが日に二三度も川事の際を見ては來て遊ぶやうになり、綾子は半日も我傍に居て自分が孝一や時子梅子を相手にアラビヤナイトの話をして聞かすのを傍聴することがある。然し、自分の目には、如何も綾子の様子が變であつた。離室の縁に腰をかけたぎり、沖の方を茫然眺めて、何か物思に沈んでることがある。

四日目の午後であつた。金手の磯へ遊びに行かうといふ動議が孝一から出て、遂に露子を始め四人の娘と孝一と自分、五郎が櫓の漕手となり、小川の大傳馬に乘込んで出掛けた。

金手の磯といふは麻里布の子女の遊場で、海中に浮ぶ一坐の岩礁である。満潮の際には僅に其岩頭を波の上に現はすだけであるが、潮が退くと數十間四方の磯になつて其岩陰に種々の魚貝が潜んで居る、其を捕へるは子女の何よりの樂であつた。春先の潮干には幾十人と數へ難き子供が集まる。自分も小川の人々と從來既に幾度となく此磯に遊んだ。魚叉で目下二尺もある黒鯛を此岩陰で突いた事もあり、章魚を捕へたこともある。海は極めて浅く、磯の周圍で游泳するも危険は更でない。何より佳いのは景色で、沖を見渡せば杳に祝島其黒き影を水に涵し、其手前に牛島あり、西南は周防灘と燧灘とが分るゝ處で、其水は遠く四國九州の海峽に連り、天色殊に明かなる日は鎮西の連山、其孫山すら見ゆるばかり鮮やかに現はれて祝島の後景を畫き、更に陸地の方を顧れば水場の入江を扼する阿多多の鼻は數丁の先に突出して、これに對する小川の離室は其築上げた石垣を海に涵し、手を舉げて招けば磯と離室とが相圖が出來さう。馬島の其西端は磯より數十間の間近に其翠松の枝を翳し、

阿多多に連なる箕山の裏は草煙の如く霞みて牧場の様を寫して居る。總の眺めが鮮やかで静かである。一度此磯に春の半日を遊んだ少年は、他日世の波に洗はれて遠く天涯千里の地に流浪するとも、夢一たび此磯に飛ぶ時、必ずや歸心矢の如きを感じるだらうと思ふ。

我等の船磯に着くと、孝一は最先に下りた。磯には既に一組、吾等の先に來て居たものがある。皆な麻里布のもので矢張女子が多い。若い男も雜つて居た。此組は我船が着くや歡呼して迎へた。

石は滑る、併し海濱に育つた丈け、露子をはじめ皆な巧に石から石へと傳つて歩む。風は沖から可なり強く吹く、人々の着て居る浴衣は旗の如く翻へる。然し岩陰の水は淵の如く湛へて漣すら立たず、玉のやうに澄んで、底の藻は生けるが如く其巖々を靜に動かして居る。小さな縞の有る雜魚、小首を傾けて熟と藻の先にとまつて居たのが人影に驚いて急に岩の薄暗い奥に逃げ込む。呼吸を凝らし鼻が水に着く

やうにして、岩の下を覗くと、大きな黒鯛の鰭が鷹揚に水を弄んで居る。魚叉を取直して大概の狙をつけ力をこめて投着ける。岩をかすつた音を聞いただけで、魚は何處にか影をかくして了ふ。男子は先づこの種の慰に現を抜かして居ると、女子は水の全く干た岩の下を覗き或は小石を轉ばしなどして螺の類をあさる。無数の岩が落々として其處一面に重なつて居るのだから、多人數の人も散在すれば殆ど誰が何處に居るのか知れない。孝一の如き腕白小僧は岩から岩へと飛びあるいたり、磯の周圍を泳いだりして居る。

自分も魚叉を持つて岩陰々々をあさつて見たが餘り思はしくないので、一の大巖、満潮の際も其頭を現はすべき高さの岩へ這上つて、沖の方を向き、潮風を正面に受けながら衝立つて居た。ふと下を見ると、大きな麥藁帽で肩先まで隠れ、足下には貝を入るべき籠を置いた女、小さな岩に腰かけたまゝで沖を眺め、吹きつける風で帽の脩が折り々上の方へまくれて居た。綾子らしい。

「綾子さん！」自分は岩の上から聲をかけた。綾子は此方を振り向いたが、自分を見て莞爾笑つた。自分は岩を下りて綾子の傍へ行つた。

綾子の腰をかけて居る岩は水の際にあるので、二三尺さきまでは小さな波が寄せては返して居る。この時、日はやゝ西に傾き、水を射て銀を流したやうに燦爛と光り、其反射が綾子の顔を隈なく照らして暑さうなれど、綾子は氣にも留めぬらしい、其白い顔の眼元を淡紅く染めて居る。

「綾さん何をして居るの、其處で。」

「何にも取れませんから、休んで居ります。」と綾子は自分を見上げながら、「峰雄さんはい？」

「僕も何にも捕れない、最早歸りませうか。」

「未だ早う御座いますよ。」

自分は綾子の横の岩に腰かけて、斜横に向合つた。唯だ二人、斯う向合つて話す

のは今度小川に来て初めてである。

「峰雄さんは何時東京へお歸りになりますの。」綾子は低い聲で、覗きこむやうにして聞いた、其調子が何となく沈んで居る。

「何時ツて、未だ決めないが、未だ二週間、事に依つたら三週間は此方で遊ぶ積りですよ。」

「さう、」と綾子は言つて、更に「昨年は何故にお歸りんなさりませんでしたの。」

「休暇が一週間しか取れなかつたから、東京の近處へ遊びに行つて了ひました。今年も當前は一週間の休暇だけれども、故郷の方に少し用事があり、墓參かたく歸るからと言つて無理に四週間の休暇を貰つたのです。」

「去年は皆なが待ちきつて居りました。」

「今年待たなかつたのですか。」

「最早こんな田舎にはどうせお歸りなさることはないと思つて居りました。」

「處が矢張り歸つて來ましたよ。何處歸つて見ても故郷は同じ事だが、つまり故郷ほど佳い處はありませんねえ。」

「さうでお座りますか。私は何だか東京へ行つて見度うて。」

「行けば可いちやア有りませんか、今度私の歸るとき一緒に行きませんか、姉さんと三人で。」

綾子は軽く嘆息をついて、

「さうなると私はどんなにか嬉しう御座りますが、最早それも出來んやうになりました。」

自分は眼を腫つた。

「何故です、何故最早出來ないんです。」と忙しく聞いた。胸には言ふべからざる不安の感が充ちて、思はず自分の聲は振へた。

「たゞ左う思はれますの。」

其時、ぬつと我等の傍に衝立つたのが五郎である。綾子は直ぐ顔を背けて了つた。

そして何時しかその顔は蒼ざめて居た。五郎は黙つて自分と綾子と見比べて居たが、其血相は全で變つて居る。日に焼けて澁紙色をした顔は言ふべからざる凄味を帯び、其險惡な毒々しい眼をぎよろ／＼として居たが、

「最早歸りませう。」と荒々しく言放つた。而して急いで船に乗り、大聲を揚げて、
「歸るぞ／＼、悪圖々々する者は置いてくぞ！」と怒鳴つた。綾子は怒を帯びた眼で、きつと五郎の方を見たが、齒を喰ひしはつた儘、黙つて船に乗つた。

一五

自分は疑惑の淵に沈んだ。綾子は何故最早東京へ行くことが出來ないか。何故五郎はあんな舉動をしたか、何故綾子は怒つたか。

自分は綾子の柔和な氣質、能く事に耐え忍ぶ力、如何なる場合にも怒の色を顔に

現はすことなき温順な心を能く知つて居る。それが今日は殆ど女子にあるまじく思はるゝほどの怒を含んだ眼で五郎を睨んだ。

自分は能く五郎を知つて居る。渠は天性正直な男である。併し小川に養はれ乍らも、親なく兄弟なく家なく、又た親戚すらもなき身の上を自ら悲み、其結果として極めて片意地な頑固な性質の男に成つて居る。自分は氣に向かぬ時は三四日も仕事をしない。或場合には女主人を平氣で語り、或は主人の娘を叱り飛ばすことがある。其爲め既に幾度となく小川の家を放逐された。然し如何に追ふとも犬は其主人の家に歸り来る如く、渠は何時の間にか歸つて来て、知らぬ顔で仕事を爲し、知らぬ顔で臺所に上り込んで飯を食ひ、そして夜は何時もの如く物置の二階に寝て了ふ。これが渠の常用手段で小川でも其上渠を追出すことは爲し得ない。小川の娘は皆な渠と共に成育ち、渠の守で育つた。

自分も渠とは寧ろ仲のよいはうで、横着な渠も自分には多少の尊敬を表し、自分

が小川に滞在中は能く自分の用をして呉れた。自分は渠の怒り易きを知つては居れど、未だ曾て今日のやうな險惡の相を現はした渠を見たことがない。今日のやうに無禮な舉動を自分に示したことはない。自分は渠の人を人とも思はぬ横着を知つては居れど、今日ほど渠の傲慢な態度を見たことがない。

すべてが疑問である。綾子は磯より歸つたまゝ離室に顔を出さない。自分は入浴のとき、母屋へ行つて其となく様子を見たが別に變りはない。露子に向ひ「綾さんは」と聞いたたら、露子は何氣なく、「二階で裁縫をして居ります」と答へた。

何で酒が美味からう。自分は夕飯をそこゝに濟まして磯へ飛出した。夕暮の海ほの暗く、馬島の谷は晚煙を罩めて居る。自分の胸は益々搔き亂れるばかり、呼吸も塞がりさうな重い鉛のやうな憂愁が我心を壓へて居る。若しやと思ふ一種の恐怖に襲はれる事も度々で有つたが其時は嘲る如く之を追拂つた。

彼是一時間も波打際を往きつ復りつして居たが、離室の縁から「兄様々々」と呼

ぶ聲がした。子供等が自分の譚を待つて居るのである。離室に歸つて見ると、露子も綾子も居ない、時子と梅子と孝一だけである。自分は子供に失望させるが氣の毒で、苦痛を忍びつゝ強て昨夜の續を語り聞かした。話すうち主人が入つて來たが、九時を打つて子供等の散じた後、主人は自分と二口三口の雑談して、他に何か言ひさうにして居たが、自分の様子の自から平常と變れるを見て、そこく歸つて了つた。自分は直ぐ磯へ出た。

一六

自分の頭は熱し居れども、身うちには怪しき寒慄を覺えた。自分の今まで計畫して居た樂しき生活法が一時に破壊するのではないかと思ふ毎に、自分は思はず足をとどめて、波打際に凝立した。小川の主人が何か言ひたけにして居たのは何だらう、自分は更に一の疑惑の種を作つた。

今日、金手の磯へ行つた時乗つた大傳馬が、もやひを陸の杭へ取つて水際から五尺ばかりの處に浮んで居る。自分はふと乗つて見る氣になつてもやひを手繰り傳馬を寄せて飛び乗つた。これは濱邊に住む人のよく行る事で、夏の夕暮など斯くして船の艦に腰を掛けて居ると涼しさも一入であるので。

自分が飛乗ると傳馬は又たするく沖に出たが、もやひが有るので直ぐ止まつた。暗い沖から潮風が軽く吹いて居たが、錨を投げて綱をゆるめてあるので船はふらふらながらも、磯に横はるやうなことはない。自分は艦に腰をかけたまゝ、熟として物思に沈んで居た。大空は能く晴れて銀河は冴えて居る。麻里布の浦を擁する山は黒く屏風のやうに峙ち、水場の入江に碇泊する帆前船、合子船、和船などの舷燈は遠く闇の中に光つて星のやうである。海に望んだ家々の燈火は金蛇のうねうねと水に映じ、何處ともなく三絃の音すら聞える。

磯づたひに、だみ聲を振立て、船歌を歌ひながら來るものがある。其聲は五郎で

あつた。渠は次第に傳馬の方へ近づいて来たが、もやひの處まで来て、これに足か
けしものか、前へのめりさうにして衝立ち、自分の方を透かし見て、

「誰か。」と怒鳴つた。

「乃公だ！」

「誰か。」と再び怒鳴りながら、ざぶくと水を踏んで船に近き、ひらりと飛乗つた。
裸體同様の装で自分の傍に来て、自分の顔を覗込んだ。酒の臭がふんと鼻を撲つた。

「吉岡の若旦那か、フン。」

「乃公だが如何した。」

「フン！」

「何がフンだ。」

「貴方は今日金手で綾嬢さんと何を話した。」

「何を話さうが餘計なお世話だ、汝の知つた事か！」

「フン！ 何を話したか言うて見せうか。」

「餘計なお世話だ！ 汝こそ今日何であんな無禮をしたウム、コラ！」

「フン、何が無禮ぢやらう、私が何を爲たらう。」

「自分の胸に聞いて見ろ！ 無禮な奴だ。綾さんは汝の何だ、主人ぢやアないか。」

「何を胸に聞くのぢやらう。」と五郎は人を嘲る靜かな口調と人に傲る落着いた態度
で船端に腰をかけた。

「馬鹿野郎！」自分はむしやくしやして唯だ渠を罵つた。

「後方へ行け！ 馬鹿野郎！」

「さうよ、貴方は智慧者ぢや。何でも御存知ぢやらう、綾嬢さんは近いうち朝鮮へ
行くのも。」

「何だ、何を言ふんだ！」自分は殆ど夢中で叫んだ。

「フン御存知ぢやらう、此間まで離室に逗留して居つた客の處へ綾嬢さんが嫁くこ

とに極つたのを、御存知ぢやらう。」

「何を言ふんだ！ それが如何した、乃公が知つてたら如何した、馬鹿！」自分は躍起となつて罵つた。

「十日もしたら彼客が大阪から戻つて来るぢやらう、其時よく解る、私が馬鹿か貴方が智恵者か、フン！」飽くまで沈着いて言つた。

「コラ彼方へゆけ！ 行かないか。」自分は猛然と衝立つて、片手にステッキを握りしめた。

「どら歸つて寝るかナ。」と嘲るやうに言つて、渠は船を下り、舷に寄りながら又た此方に向いて、

「綾嬢さんは私の何だと聞きましたの。」

「黙れ！ 彼方へゆけ！」と自分は渠を見下して叫んだ。

「フン！ 言ひませうか、私の情婦で御座ります！」

「何だ！」自分はステッキを電の如く閃かして五郎の肩先を打つた。

「打つたな。」渠は苦痛と憤怒とを壓しつけた聲で唸つて、二足三足後に退さりながら自分を睨んだ。

「フン！」とさも毒々しく嘲つて、大股に水を蹴りながら、忽ち闇の中に消えて了つた。

自分はステッキを投げ捨てたと思ふと頭がぐらくして来て、倒れさうなを踏しめ、夢路を辿る如くして離室へ歸つた。

一七

局面は一變した。

自分は其翌日早朝、急に用事が出来たと稱して孝一は残し、一人車を急がして我家に歸つた。叔母には何も話さず、唯だ舊友を訪ひたくなつたとの口實を作つて、

直ぐ旅装を整へ、田布施の停車場から汽車に投じて西へ向つて馳せた。切符は徳山までのを買つたが、實は徳山へ下りて何を爲るのか、誰を訪問するのか、其より何處へ行く積りか、其等ことは少しも考へなかつた。唯だ一時も早く地を變へたく思つたのである。

何たる相違であらう！ 僅か十日前には色々の樂さを前に控へ、種々の空想を描いて汽車の窓に倚つたのが、今は恥、怒、惑、限りなき悲痛を懷いて、たゞ茫然と車中のベンチに此身を投ひんとは！

自分は強ひて何事をも思はざるやう力めた。初めは窓外の景色をも眺めず、新聞をも見ず、唯だ眼を閉ぢて居たが、悲哀は時として味ふに足るべきも、恥辱と憤恨に至つては、我心これに觸るゝ毎に殆ど全身の血が逆流するを覺え、到底これに抗ふことは我力及ばず、これに觸れざるやう力める外、仕方のないのを感じたから、或停車場では新聞を買ひ、或停車場ではブラットホームに下りて一分間の散歩をす

ら探つた。

徳山より馬關、馬關に二三日滞在して此處の裁判所に務める友人と飲み、馬關より山口に引返し、此處に一週間ばかり滞在し、我舊友を一々訪問し、又た舊友を集めて遊び、それより更に萩に出で、萩より山口に還り、斯の如くして彼是二週間以上の月日を唯だ飲酒と雑談と園藝との間に送つた。

何を得たか、何を也得ない。唯だ睡眠の不足と飲食の過度より生ずる荒々しき感情野卑なる慾情だけを贏け得た。あゝ此の如くして自分は遂に如何なるだらう！

萩から山口へと引返した日の夕暮であつた。自分は餘り頭の痛いので一日の疲勞をも厭はず一人、龜山の麓なる幅廣き道を散歩した。夕園のほの暗い中を歩いて中學校の校舎の前まで來た。恰度夏期休業で門は閉ぢられ、寄宿舎の窓より燈火もれず、さしもの廣き校舎の内外が寂然として居た。十餘年前、自分も亦た此校舎に居たのである！ 自分は暫時く龜山の黒き影を眺めて居たが、此時、言ふべからざる

悲哀胸を衝いて湧き、柵に寄りかたまり、聲を飲んで哭した。
 其翌朝直ぐ山口を立つた。自分は心に堅く決する處あり、一寸故郷に歸つて叔母に逢ひ、直に東京に向つて出立する積であつた。未練にも綾子に渡すべき機はなかつた秘密の土産、それは何であるか言はない、其を行李の底に入れて携へて來たが、山口を立つ前の夜、寸々に破つて了つた。

一八

運命は何時まで我を弄せんとするぞ！

綾子は死んで、而も悲惨なる最後を遂げた。叔母の泣きながら物語る事實は真相を得て居ない。叔母の話に依れば、

我が小川を立つた日より五日目、彼の朝鮮よりの客大阪より歸つて、直ぐ結納の取交しが済んで結婚の事は極り、其より三日経つて客は愈釜山に歸るべく、そして

小川の主人は綾子を連れて客と共に朝鮮に渡り、目出度き式を彼地にて盛に擧げる筈に定まつた。其出立の前日、これが當分故郷への名残と、小川の主人が主張して、一家擧つて、船も二艘を用意し、酒肴を積んで金手の磯へと遊びに出た。無論、彼客も其一人であつた。

處が午後三時になつて空はよく晴れて居たが急に風が起つて、見る／＼沖は白くなつた。併し海に慣れて居る者ばかり、且つ此邊の海が荒れた處で高の知れたものゆゑ、關はず遊んで居た。併し海が浅いだけ波は益々高く、金手の磯は忽ち白波の勢烈しく圍む處となつた。そこで愈歸る事になり、船を磯の陰に廻はした。此處も船の動揺は強いが、深い丈けに直に岩の下に着け得るので、先づ子供より順々に乗らしめ、船に在つて其手を執る役を五郎がした。船は舳を岩に打着けながら上下にあほるので中々乗り悪い。綾子の番になつた。五郎が其手を取つたと思ふと、如何なる機か、五郎の足が滑つて、二人は眞倒様に落ちた。小川の主人は驚いて直ぐ飛

び込んだが、間に合はない。二人の死體は別々に引上げられた。

以上の如くである。そして五郎は游泳の達人ゆゑ、若し酔つて居なかつたら二人とも無論助かつただらうといふ推測であつた。

總てこれらの事は事實の真相を得てない、と自分は思つた。叔母は語り終つて、思ひ出したやうに、自分に宛てた綾子の手紙を渡した。手紙の文言は、

「突然の御出立につき御心のほど相わかり其夜は悲しく泣き明し候私の口よりは何事も申上げ兼候何にも姉より御聞取り被下度候遠からず朝鮮へ參る身には今一度お目にかゝり度く願へどそれもかなはず候随分御身を御大切に御出世のほど蔭ながら祈上候なほ幾末永く御忘被下まじく候」

この手紙を読み了ると共に、一の恐ろしき疑が自分に起つた。事に依ると自分は五郎に欺かれたかも知れない。

「叔母さん此手紙は何時來ました。」

「お前が立つた日の翌日、朝早く使が持つて來てお前が歸つたら渡してと言うて行きました。」

自分は直ぐ小川へ行つた。

主人の語る處は叔母の話と同じである。主人も亦た事の真相を知らない。併し自分と雖更に意味深い事實が潜んで居ることを知つて居るばかりで、其が如何なることかは殆ど解らない。疑より疑へと心は迷ふばかりである。自分は露子に綾子の墓へ案内して呉れろと頼んだ。露子は其と悟つて、直ぐ自分を促して小川を出た。

墓は小高い丘の上なる、小川家累代の墓地に在る。丘を周つて砂川があつて其に石橋が架り、これを渡ると左右は人の背を没するほどの薄生ひしける小徑あり、爪先あがりこれに登ると間もなく墓地に出る。墓地からは東に向つて近郊を見わたすことが出来る。

自分と露子は此墓地に達するまで殆ど一言も交はさなかつた。露子は木標のみ立

てる新墓に向つて禮拜し、坐を自分に譲つた。自分は殆ど正面に墓に對し得なかつた。

「峰雄さん此處へお掛けになりませ。」と露子は松の根なる石の塵を拂つた。

「一體まア如何したのです、僕には少しも解りません。」と自分は先づ口を開いた。

「妹の手紙を御覽になりましたか。」

「見ました。」

「それで私も斯んな事にならうとは夢にも思はなかつたので。貴方が急に我宅をお立になつた日、晝過ぎに近藤の叔母さんの處から、貴方は山口の方へ遊びにお出になつたといふ知らせが來ました、それを妹が聞いて直ぐ二階へ上がったまゝ下りて來ませんから、如何したかと私が上つて見ると泣いて居ました。」

「泣いて！」と自分は思はず眼を腫つた。露子は最早眼に涙を一ぱい含んで居た。

「私は其時五郎が金手の磯で貴方と妹とに大變無禮を爲たことを聞きました。」

「さうです。僕も彼の晩五郎に會つて、何故五郎があんな無禮をしたか其理由が大概解りました。」

「きつと左様で御座りませう、妹もさう申して居りました。きつと五郎が何か餘計なことを貴方に話したらうツて、口惜しさうに泣いて居りました。」

「綾さんと五郎と何か關係でも有つたのですか。」と自分は思切つて問うた。

「貴方はさうお思ひなれますか。」露子は涙の眼を腫つて、きつと自分を見た。

「唯だ五郎が妙なことを言つたからです。」

「それは餘まり妹が可哀さうで御座ります。」と露子の唇は戰慄へて涙は頬を流れた。「この前貴方がお歸りになつた時は、妹はまだ十五で御座りましたが、如何いふものか月日の立つにつれて貴方をお慕ひ申して、一昨年夏も昨年夏も、貴方のお歸りを待ちきつて居りました。私はそれを能く知つて居りましたが、妹も私の知つて居ることを知つて、私には何でも話して居りました。貴方が時々私共に手紙をお

よこしなざる度に、妹が一番喜んで三度も四度も繰返して讀んでは丁寧^{ていねい}に自分の用^{もち}筆^{ふで}筒^{つつ}に納^{いれ}うて置^おきました。處^{ところ}が彼の五郎^{ごろう}で御座^{ござ}ります。」

露子^{つゆこ}は少し言^いひ淀^{よど}んだ。自分^{じぶん}は熟^{じゆつ}と唇^{くちびる}を嚙^かんだ。

「彼^{かれ}が去年^{きょねん}の暮^{くれ}あたりから煩^{うる}さく妹^{いも}に着^つき纏^{まと}つて、これには妹^{いも}もほとく困^{こま}りましたが、御存知^{ごぞんぢ}のやうな氣質^{きしつ}で御座^{ござ}りますから、父母^{ふぼ}にも申^まさず、唯^{ただ}私のみに打明^{うちあ}けて、或時^{あるとき}は二人^{ふたり}で相談^{さうだん}し、直^すぐ父母^{ふぼ}に話^{はな}して、彼^{かれ}を追出^{おひだ}して了^{しま}はうかとした事^{こと}も御座^{ござ}りました。處^{ところ}が彼奴^{かれいつ}は馬鹿^{ばか}の向^{むか}ふ見^みずと片意^{かたいぢ}地^ぢな奴^{やつ}で御座^{ござ}りますから、又^{また}た後^{あと}で如何^{いかに}な仇^{あだ}をするかも知^しれず、五郎^{ごろう}も時々妹^{いも}に向^{むか}つて、若^もし何處^{どこ}かに嫁^{よめ}くやうなら必^{きつ}定^{てい}邪魔^{じやま}をしてやると左様^{さやう}言^いつて嚇^{おそ}しますから、二人^{ふたり}も彼^{かれ}には成^なるべく關^{かま}はぬ様^{やう}にして、妹^{いも}も一人^{ひとり}で五郎^{ごろう}に遇^あはないやうに逃^にけて居^をりました。」

「さうでしたか！」自分^{じぶん}には殆^{ほとんど}と總^{すべ}ての事情^{じじやう}が讀^よめた。と思^{おも}ふと慚^{ざん}恨^{こん}の念^{ねん}が胸^{むね}を衝^ついて起^おつた。

「それで少しはお解^{わか}りで御座^{ござ}りませうが、妹^{いも}は全^{まる}て蛇^{へび}に見^み込まれたと同じ^{おな}で、私^{わたくし}も眞實^{ほんじつ}に可哀^{かあい}さうでなりませなんだ。處^{ところ}が父^{ちち}が此^{この}春^{はる}朝鮮^{ちやうせん}に參^まりました時^{とき}、日野屋^{ひのや}といふ大問屋^{おほいもんや}へ妹^{いも}を嫁^{よめ}ることに略約^{りやくやく}束^{そく}したらしう御座^{ござ}ります、私^{わたくし}共^{ども}も眞實^{ほんじつ}此頃^{このころ}までは何^{なん}にも知^しりませなんだ。さうすると、先達^{せんだつ}日野屋^{ひのや}の若旦那^{わかだんな}が番頭^{ばんとう}を連^つれて突然^{とつぜん}やつて來^きて、其時^{そのとき}初めて父^{ちち}は約束^{やくそく}のことを妹^{いも}や私^{わたくし}に話^{はな}しました。妹^{いも}は此話^{このはなし}を聞^きいた時^{とき}、唯^{ただ}黙^{だま}つて居^をりました。私^{わたくし}は妹^{いも}が如何^{いかに}する積^{つも}りだらうと其晚^{そのばん}聞^きいて見^みましたら、父^{ちち}が一度^{いちど}約束^{やくそく}して、先方^{せんぱう}が又^{また}た彼^{かれ}アやつて來^きた以上^{いじやう}は嫁^{よめ}く、と申^ましました。」

「そしてお前は峰雄^{みねお}さんの方は如何^{いかに}するの。」と聞^ききましたら、
「姉^{あね}さん、其^{その}は最早^{もつと}言^いうて下さるな、私^{わたくし}は絶^{あきら}念^めめました。私^{わたくし}だけ幾多^{いくた}ら思^{おも}うても、こればかりは如何^{いかに}もしかたが御座^{ござ}りません、恰度^{ちやうど}五郎^{ごろう}が私^{わたくし}を思^{おも}ふのと同じ^{おな}事^{こと}で御座^{ござ}ります。それだから何時^{いつ}まで五郎^{ごろう}に狙^{ねら}はれて苦^{くる}むよりは、死^しんだ積^{つも}りで何處^{どこ}へでも嫁^{よめ}きます。」と申^ましました。私^{わたくし}は泣^なきました。妹^{いも}は耐^{こら}へ性^{しやう}が能^よう御座^{ござ}りますから、蒼^{あを}

い顔をして熟と忪えて居ましたが、用筆筒から貴方の手紙を出しまして、

「姉さん之れを貴方の方へ納つて置いて、」と私に渡しながら、

「姉さん私ほど不幸なものが有りませうか。」と言つて、其處へ突伏して泣きだしました。

自分は最早聞くに堪へなかつた。拭うても拭うても涙は溢れ出る。

「解りました！ 僕が全く思ひ違へをして居ました。五郎が僕を欺したのです。五郎が故意と綾さんを殺したのです。」

「さうで御座ります！ 五郎が殺したので御座ります、それを誰も知らんで怪我に落ちたのと思つて居ります。」

露子は泣入つた。自分は、

「お露さん！」

「ハイ。」

「綾さんは僕の心を知つて居ましたらうか。」

「今度我宅へお出でになつて、妹は初めて知りました。それで私は、未だ結納が済まんのだから今の間、父へ話して如何にか爲て貰へと申しましたら、其れでは父の立瀬がなくなり、氣の毒だから、黙つて行く、自分は全然あきらめたと申しました。」

これ犠牲である。自分は最早此上を聞くことが出来なかつた。小川には又た明日出直すと言つて、露子に墓地で別れた。

夏は半以上を過ぎ、秋は既に來た！ さなきだに自分には、夏の將に逝かんとし秋氣漸く動く頃が最も哀愁の深きを催すなるに、更に此悲、悔、恨を懷いて、斜陽かすかに野末に残る寂しき野路を一人辿つた。眼に滿つる丘、林、野、川、先頃まで我を愛し我を慰め我が爲めに微笑した者が、今は冷然として自分を迎へるやうである。

其翌日、小川を訪うた。今度の打撃は全く主人の心魂を挫いて了つた。あゝ憐れなる老水夫！ 渠は最早先きの元氣はない。

「僕は明後日あたり東京へ立たうと思ひます。最早當分故郷には歸りません！」

「何故の、まア今少し遊んでお行きなされな。」

憐れむべし、主人は何も知らない。知らないが可いだらう。自分はその夜、我家に歸り、強ひて眠らうとしたが、連日の疲勞にも關らず寢就かれない。叔母の止めるのも聽かないで、近郊を目的もなく歩いた。悲哀の甘きは、泣くべし、歌ふべし、其苦きに至つては、唯だ冷やかなる涙の力なく頬をつたふばかりである。

不羈、獨立、自由！ 人は此地上に於て其十分を享有すべき約束を持つて居ない。

「戦闘！ さうだ戦闘こそ人の運命だ。たゞ夫れ戦闘それ自身が人の運命だ。行かう、明日立たう、明日！」

運命論者

秋の半ば過ぎ、冬近くなると何れの海濱を問はず、大方は淋れて来る。鎌倉も其通りで、自分のやうに年中住んで居る者の外は、濱へ出て見ても、里の子、浦の子、地曳網の男、或は濱づたひに行通ふ行商を見るばかり、都人士らしい者の姿を見るは稀なのである。

或日自分は何時のやうに滑川の邊まで散歩して、さて砂山に登ると、思の外、北風が身に染むので直ぐ麓に下りて其處ら日あたりの可い所、身體を伸して樂に書の讀めさうな所と四邊を見廻したが、思ふやうなところがないので、彼方彼方と探し歩いた。すると一個所、面白い場所を発見した。

砂山が急に崩けて草の根で僅にこれを支へ、其下が唾のやうになつて居る。其根方に坐つて兩足を投げ出すと、背は後の砂山に靠れ、右の臂は傍らの小高いところに懸り、恰度ソファに倚つたやうで、眞に心持の佳い場所である。

自分は持つて来た小説を懐から出して心長閑に讀んで居ると、日は暖かに照り空は高く晴れ此處よりは海も見えず、人聲も聞えず、汀に轉がる波音の穩かに重々しく聞える外は四圍寂然として居るので、何時しか心を全然書籍に取られて了つた。

然るにふと物音の爲たやうであるから何心なく頭を上げると、自分から四五間離れた處に人が立つて居たのである。何時此處へ来て、何處から現はれたのか少も氣がつかなくつたので、恰も地の底から湧出たかのやうに思はれ、自分は驚いて能く見ると年輩は三十ばかり、面長の鼻の高い男、背はすらりとした瘦形、衣装といひ品といひ、一見して別荘に来て居る人か、それとも、旅宿を取つて滞留して居る紳士と知れた。

彼は其處につつ立つて自分の方を凝と見て居る其眼つきを見て自分は更に驚き、且つ怪んだ。敵を見る怒の眼か、それにしては力薄し。人を疑ふ猜忌の眼か、それ

にしては光鈍し。たゞ何心なく他を眺る眼にしては甚だ凄味を帯ぶ。

妙な奴だと自分も見返して居ること暫し、彼は忽ち眼を砂の上に轉じて、一歩一歩、靜かに歩きだした。されども此窪地の外に出ようとは仕ないで、たゞ其處らをブラブラ歩いて居る、そして時々凄い眼で自分の方を見る。一たいの様子が尋常でないもので、自分は心持が悪くなり、場所を變へる積で其處を起ち、砂山の上まで来て、後を顧ると、如何だらう怪しの男は早くも自分の坐つて居た場處に身體を投けて居た！ そして自分を見送つて居る筈が、さうでなく立てた膝の上に腕組をして突伏して顔を腕の間に埋めて居た。

餘りの不思議さに自分は様子を見てやる氣になつて、兎ある小蔭に枯草を敷いて這ひつくばひ、書を見ながら、折々頭を擧げて彼の男を覗つて居た。

彼はやゝ暫く顔を上げなかつた。けれども十分とは自分を待たさなかつた、彼の起ちあがるや病人の如く、何となく力なけであつたが、起つたと思ふと其儘くるり

と後向になつて、砂山の岨に面と向き、右の手で其麓を掘りはじめた。

取り出した物は大きな罎、彼は袂からハンケチを出して罎の砂を拂ひ、更に小さな洋盃様のものを出して、罎の栓を抜くや、一盃一盃、三四盃續けさまに飲んだが、罎を靜かに下に置き、手に杯を持つたまゝ、昂然と頭をあけて大空を眺めて居た。

そして又一杯飲んだ。そして端なく眼を自分の方へ轉じたと思ふと、洋杯を手にしたまゝ自分の方へ大股で歩いて來る、其歩武の氣力ある様は以前の様子と全然違つて居た。

自分は驚いて逃げ出さうかと思つた。然し直ぐ思ひ返して其まゝ横になつて居ると、彼は間もなく自分の傍まで來て、怪けな笑味を浮べながら、

「貴方は僕が今何を爲たか見て居たでせう？」
と言つた聲は少し嘎れて居た。

「見て居ました」と自分は判然答へた。

「貴方は他人の秘密を覗がうて可いと思ひますか」と彼は益々怪けな笑味を深くする。

「可いとは思ひません」

「それなら何故僕の秘密を覗ひました」

「僕は此處で書籍を読むの自由を持つて居ます」

「それは別問題です」と彼は一寸眼を自分の書籍の上に注いだ。

「別問題ではありません。貴方が何を爲ようと僕が何を爲ようと、それが他人に害を及ぼさぬ限りはお互の自由です。若し貴方に秘密があるなら自から先づ秘密に爲たら可いでせう」

彼は急にそはくして左の手で頭の毛を捲るやうに搔きながら、

「さうです、さうです。けれども彼れが僕の爲し得るかぎりの秘密なんです」と言つて暫らく言葉を途切らし、氣を塞めて居たが、

「僕が貴方を責めたのは悪う御座いました、けれども何卒今御覽になつたことを秘密に仕て下さいませんかお願いですが」

「お頼とあれば秘密にします。別に僕の關したことはありませんから」

「難有う御座います。それで僕も安心しました。イヤ眞に失禮しました匆卒貴方を詰めました……」と彼は人を壓しつけようとする最初の氣勢とは打つて變り、如何にも力なげに詫びたのを見て、自分も氣の毒になり、

「何もさう謝るには及びません、僕も實は貴方が先刻僕の前に佇立つて僕ばかり見て居た時の風が何となく怪かつたから、それで此處へ來て貴方の爲ることを覗がうて居たのです。矢張貴方を覗がつたのです。けれども彼の事が貴方の秘密とあれば、堅く僕は其秘密を守りますから御安心なさい」

彼は黙つて自分の顔を見て居たが、

「貴方は心定守つて下さる方です」と聲をふるはし、

「如何でせう、一つ僕の杯を受けて下さいませんか」

「酒ですか、酒なら僕は飲まないほうが可いのです」

「飲まないほうが！ 飲まないほうが！ 無論さうです。もう飲まないで済むことなら僕とても飲まないほうが可いのです。けれども僕は飲むのです。それが僕の秘密なんです。如何でせう、僕と貴方と斯やつて話をするのも何かの運命です、怪い運命ですから、不思議な縁ですから一つ僕の秘密の杯を受けて下さいませんか、え、如何でせう、受けて下さいませんか」といふ言葉の節々、其聲音、其眼元、其顔色は實に大なる秘密、痛い秘密を包んで居るやうに思はれた。

「よろしう御座います、それでは一つ戴きませう。」と自分の答ふるや直ぐ彼は先に立つて元の場處へと引返すので、自分も其後に従つた。

二

「これは上等のブランデーです。自分で上等も無いもんですが、先日上京した時、銀座の龜屋へ行つて最上のを呉れると内證で三本買って来て此處へ匿して置いたので、一本は最早たいらけて空罐は滑川に投げ込みました。それが二本目です。未だ一本この砂の中に埋めてあります、無くなれば又た買つて來ます」

自分は彼の差した杯を受け、少しづつ啜りながら彼の言ふ處を聞いて居たが、聞くに連れて自分は彼を怪しむ念の益々高まるを禁じ得なかつた。けれども決して彼の秘密に立入らうとは思はなかつた。

「それで先刻僕が此處へ來て見ると、意外にも貴方が既に此場處を占領して居たのです、驚きましたね、怪しからん人もあるものだ。僕の酒庫を犯し、僕の酒宴の筵を奪ひながら平氣で書籍を讀んで居るなんてと、僕はそれで貴方を見つめながら此處を去らなかつたのです」と彼は微笑して言つた。其眼元には心の底に潜んで居る彼の優しい、正直な人柄の光さへ髣髴いて、自分には更に其が慘しげに見えた。其處

で自分も笑を含み、

「さうでせう、それでなければあんな眼つきで僕を御覽になる譯は御座いません。さも恨めしさうでした」

「イヤ恨めしくは御座いません、情けなかつたのです。オヤ／＼乃公は隠して置いた酒さへも何時か他人の尻の下に敷かれて了ふのか、と自分の運命を詛つたのです。詛ふと言へば凄く聞えますが、實は僕にはそんな凄いた見も亦た氣力もありません。運命が僕を詛うて居るので——貴方は運命といふことを信じますか？ え、運命といふこと。如何です、も一つ」と彼は鑿を上げたので、

「オヤ僕は最早戴きますまい」と杯を彼に返し「僕は運命論者ではありません。彼は手酌で飲み、酒氣を吐いて、

「それでは偶然論者ですか」

「原因結果の理法を信するばかりです」

「けれども其原因は人間の力より發し、そして其結果が人間の頭上に落ち來るばかりでなく、人間の力以上に原因したる結果を人間が受ける場合が澤山ある。その時、貴方は運命といふ人間の力以上の者を感じませんか？」

「感じます、けれども其は自然の力です。そして自然界は原因結果の理法以外には働かないものと僕は信じて居ますから、運命といふ如き神秘らしい名目を其力に加へることは出来ません」

「さうですか、さうですか、解りました。それでは貴方は宇宙に神秘なしと言ふお考なのです、要之、貴方には此宇宙に寄する此人生の意義が、極く平易明瞭なので、貴方の頭は二々が四で、一切が間に合ふのです。貴方の宇宙は立體でなく平面です。無窮無限といふ事實も貴方には何等、感興と畏懼と沈思とを喚び起す當面の大なる事實ではなく、數の連續を以てインフイニティー(無限)を式で示さうとする數學者のお仲間でせう」と言つて苦しきさうな嘆息を洩らし、冷かな、嘲るやうな語

氣で、

「けれども、實は其方が幸福なのです。僕の言葉で言へば貴方は運命に祝福されて居る方、貴方の言葉で言へば僕は不幸な結果を身に受けて居る男です」

「それでは此で失禮します」と自分は起上がった、すると彼は狼狽て自分を引止めます。「ま、ま、貴方怒つたのですか。若し僕の言つた事がお氣に觸つたら御勘辨を願ひます。つい其の自分で勝手に苦しんで勝手に色々なことを、馬鹿な譯にも立たん事を考へて居るものですから、つい見境もなく饒舌るのです。否、誰にも斯んなことを言つた事はないのです。けれども何だか貴方には言つて見たう感じましたから遠慮もなく勝手な熱を吹いたので、貴方には笑はれるかも知れませんが、僕にはやはり怪しの運命が僕と貴方を引着けたやうに感ぜられるのです。不幸な男と思つて、もすこしお話し下さいませんか、もすこし……」

「けれども別にお話しするやうなことも僕には有りませんが……」

「さう言はないで何卒もすこし此處に居て下さいな、もすこし……。噫！如何して斯う僕は無理ばかり言ふのでせう！ 酔つたのでせうか。運命です、運命です、可う御座います。貴様にお話がないなら僕が話します。僕が話すから聞いて下さい、せめて聽いて下さい、僕の不幸な運命を！」

此苦痛の叫を聞いて何人か心を動かさざらん。自分は其儘止つて、

「聞きませうとも。僕が聽いてお差支へがなければ何事でも承りませう」

「聽いて下さいますか。それならお話しませう。けれども僕は運命の怪しき力に感うて居る者ですから、其積で聽いて下さい。若し原因結果の理法と貴方が言ふならそれでも可う御座います。たゞ其原因結果の發展が餘りに人意の外に出て居て、其爲に一人の若い男が無限の苦惱に沈んで居る事實を貴方が知りましたなら、それを僕が怪しき運命の力と思ふのを無理の無いとだけは承知下さるだらうと思ひます。で貴方に聞きますが此處に一人の男があつて、其男が何心なく途を歩いて居ると、

何處からとも知れず一の石が飛んで来て其男の頭に命中り、即死する、そのために其男の妻子は餓に沈み、其爲めに母と子は争ひ、其爲に親子は血を流す程の慘劇を演ずるといふ事實が此世に有り得ることゝ貴方は信ずるでせうか」

「實際有ることか無いことかは知りませんが、有り得ることゝは信じます、それは」

「さうでせう、それなら貴方は人の意表に出た原因のために、ふとした原因のために、非常なる悲惨がやゝもすれば、人の頭上に落ちてくるといふ事實を認むるので、僕の身の上の如き、全く其なので、殆んど信ず可からざる怪しい運命が僕を弄んで居るのです。僕は運命と言ひます。僕にはさう外には信じられんですから」と言つて彼は吻と嘆息を吐き、

「けれども貴方聽いて呉れますか」

「聽きますとも！ 何卒かお話なさい」

「それなら先づ手近な酒のことから話しませう。貴方は定めし不思議なことゝ思つて居るでせうが、實は世間に有りふれたことで、苦惱を忘れたさの魔酔劑に用ゐて居るのです。砂の中に隠して置くのは隠して飲まなければならぬ宅の事情があるからなので、その上、此場所は如何にも静かで且つ快調で、如何な毒々しい運命の魔も身を隠して人を覗がう暗い蔭のないのが僕の氣に入つたからです。此處へ身を横たへて酒精の力に身を託し高い大空を仰いで居る間は、僕の心が幾何か自由を得る時です。その中には此激烈な酒精が左なきだに弱り果てた僕の心臓を次第に破つて、遂には首尾よく僕も自滅するだらうと思つて居ます」

「そんなら貴方は、自殺を願うて居るのですか」と自分は驚いて問うた。

「自殺ぢやアない、自滅です。運命は僕の自殺すら許さないので。貴方、運命の鬼が最も巧に使ふ道具の一は「惑」ですよ。「惑」は悲を苦に變へます。苦惱を更に自乗させます。自殺は決心です。始終惑のために苦しんで居る者に、如何して此

決心が起りませう。だから「惑」といふ鈍い、重々しい苦惱から脱れるには矢張り自滅といふ遅鈍な方法しか策がないのです」

と染々言ふ彼の顔には明に絶望の影が動いて居た。

「如何いふ理由があるのか知りませんが、僕は他人の自殺を知つて之を傍観する譯には行きません。自滅といふも自殺に違ひないのですから」と自分が言ふや、

「けれども自殺は人々の自由でせう」と彼は笑味を含んで言つた。

「さうかも知れませんが、然し之を止め得るならば、止めるのが又人々の自由なり義務です」

「可う御座います。僕も決して自滅したくは有りません。若し貴方が僕の物語を悉皆聽いて、其上で僕を救ふの策を立て、下さるのなら僕は此上もない幸福です」

斯う聞いては自分も黙つて居られない。

「可しい！ 何卒か悉皆聽かして貰ひませう。今度は僕の方からお願します」

三

「僕は高橋信造といふ姓名ですが、高橋の姓は養家のを冒したので、僕の元の姓は大塚といふのです。」

大塚信造と言つた時のことから話しますが、父は大塚剛藏と言つて御存知でも御座いますか、東京控訴院の判事としては一才世間にも名の知れた男で、剛藏の名の示す如く、剛直一邊の人物、随分僕を教育する上には苦心したやうでした。けれども如何いふものか僕は小兒の時分から學問が嫌ひで、たゞ物陰に一人引込んで、何を考へるともなく茫然して居ることが何より好きでした。十二歳の時分と覺えて居ます、頃は春の末といふことは庭の櫻が殆ど散り盡して、色褪せた花瓣の未だ梢に残つて居たのが、若葉の隙からホロ／＼と一片二片落つる様を今も判然と想ひだすことが出来るので知れます。僕は土藏の石段に腰かけて例の如く茫然と庭の面を眺

めて居ますと、夕日が斜に庭の木の間に射し込んで、さなきだに静かな庭が、一層肅然として、凝然として、眺めて居ると少年心にも哀いやうな楽しいやうな、所謂春愁でせう、そんな心地になりました。

人の心の不思議を知つて居るものは、兒童の胸にも春の静な夕を感じることに、實際有り得ることを否まぬだらうと思ひます。

兎も角も僕はさういふ少年でした。父の剛藏はこのことを大變苦にして、僕のことを坊主臭い子だと數々小言を言ひ、僧侶なら寺へ與つて了ふなど怒鳴つたこともあり、それに引かへ僕の弟の秀輔は腕白小僧で、僕より二ツ年齢が下でしたが骨格も父に肖て逞しく、氣象もまるで僕とは異つて居たのです。

父が僕を叱る時、母と弟とは何時も笑つて傍で見居たものです。母といふはお豊といひ、言葉の少ない、柔和らしく見えて確固した氣象の女でしたが、僕を叱つたこともなく、さりとして甘やかす程に可愛がりもせず、言はゞ寄らず觸らずにして

居たやうです。

それで僕の氣象が生來今言つたやうなのであるか、或はさうでなく、僕が小兒の時、早く不自然な境に置いて、我知らず孤獨な生活を送つた故かも知れないのです。

成程父は僕のことを苦しめました。けれども其心配はたゞ普通の親が其子の上を憂ふるのとは異つて居たのです、それで父が「折角男に生れたのなら男らしくなれ、女のやうな男は育て甲斐がない」と愚痴めいた小言を言ふ、其言葉の中にも僕の怪しい運命の穂先が見えて居たのですが、少年の僕には未だ氣が着きませんでした。

言ふことを忘れて居ましたが、其頃は父が岡山地方裁判所長の役で、大塚の一家は岡山の市中に住んで居たので、一家が東京に移つたのは未だ餘程後のことです。

或日のことでした、僕が平時のやうに庭へ出て松の根に腰をかけ茫然して居ると、何時の間にか父が傍に来て、

「お前は何を考へて居るのだ、持つて生れた氣象なら致方もないが、乃公はお前のやうな氣象は大嫌だ。最少し確固しろ」と真面目の顔で言ひますから、僕は顔も上げ得ないで黙つて居ました。すると父は僕の傍に腰を下して、

「オイ信造」と言つて急に聲を潜め「お前は誰かに何か聞きは爲なかつたか」

僕には何のことか全然解らないから、驚いて父の顔を仰ぎましたが、不思議にも我知らず涙含みました。それを見て父の顔色は俄に變り、益々聲を潜めて、

「慙すには及ばんぞ、聞いたら聞いたと言ふが可え。そんなら乃父には考案があるから。サア慙さずに言ふが可え。何か聞いたらう？」

此時の父の様子は餘程狼狽して居るやうでした。それで聲さへ平時と變り、僕は可怕くなりました。泣き出すと、父は益々狼狽へ、

「サア言へ？ 聞いたら聞いたと言へ！ 慙すかお前は」と僕の顔を睨みつけましたから、僕も益々可怕なり、

「御免なさい、御免なさい」とたゞ謝罪りました。

「謝罪れと言ふんぢやない。若し何かお前が妙なことを聞て、それで茫然考へて居るのぢやないかと思ふから、それで訊くのだ。何にも聞かんのなら其で可え。サア正直に言へ！」と、今度は眞實に怒つて言ひますから、僕は何のことか解らず、ただ非常な悪いことでも仕たのかと、おろろく聲で、

「御免なさい。御免なさい」

「馬鹿！ 大馬鹿者！ 誰が謝罪れと言つた。十二にもなつて男の癖に直ぐ泣く」怒鳴られたので僕は喫驚して泣きながら父の顔を見て居ると、父も暫くは黙つて熱と僕の顔を見て居ましたが、急に涙含んで、

「泣かんでも可え、最早乃父も問はんから、サア奥へ歸るが可え」と優しく言つた其言葉は少いが、慈愛に満ちて居たのです。

其後でした、父が僕のことを餘り言はなくなつたのは。けれども又其後でした、僕

の心の底に一片の雲影の沈んだのは。運命の怪しき鬼が其爪を僕の心に打込んだのは實に此時です。

僕は父の言葉が氣になつて堪りませんでした。これも普通の子供なら間もなく忘れて了つたゞらうと思ひますが、僕は忘れる處か、間がな隙がな、何故父は彼のやうな事を問うたのか、父が斯くまでに狼狽した處を見ると、餘程の大事であらうと、少年心に色々と考へて、そして其大事は僕の身の上に關することだと信ずるやうになりました。

何故でせう。僕は今でも不思議に思つて居るのです。何故父の問うたことが僕の身の上のことゝ自分で信ずるに至つたでせう。

暗黒に住みなれたものは、能く暗黒に物を見ると同じ事で、不自然なる境に置かれた少年は何時しか其暗き不自然の底に潜んで居る黒點を認めることが出来たのだらうと思ひます。

けれども僕の其黒點の真相を捉へ得たのはずつと後のことです。僕は氣にかゝりながらも、これを父に問ひ返すことは出来ず、又母には猶更ら出来ず、小さな心を痛めながらも月日を送つて居ました。そして十五の歳に中學校の寄宿舎に入れられました。其前に一つお話しして置く事があるので。

大塚の隣屋敷に廣い桑畑があつて其横に板葺の小さな家がある、それに老人夫婦と其ころ十六七になる娘が住んで居ました。以前は立派な士族で、桑園は則ち其屋敷跡ださうです。此老人が僕の仲善でしたが、或日僕に圍碁の遊戯を教へて呉れました。二三日経て夜食の時、このことを父母に話しました處、何處も遊戯のことは餘り氣にしない父が眼に角を立て、叱り、母すら驚いた眼を張つて僕の顔を見つめました。そして父母が顔を見合した時の様子の尋常でなかつたので、僕は甚だ妙に感じました。

何故僕が圍碁を敵としなければならぬか、それも後に解りましたが、其が解つた

時こそ、僕が全く運命の鬼に壓倒せられ、僕が今の苦惱を嘗め盡す初で御座いました。

四

僕の十六の時、父は東京に轉任したので大塚一家は父と共に移轉しましたが、僕だけは岡山中學校の寄宿舎に残されました。

僕は其後三年間の生活を想ふと、僕の此世に於ける眞の生活は唯だ彼の學校時代だけであつたのを知ります。

學生は皆な僕に親切でした。僕は心の自由を恢復し、悪運の手より脱れ、身の上の疑惑を懐くこと次第に薄くなり、沈鬱の氣象までが何時しか雪の融ける如く消えて、快活な青年の氣を帯びて來ました。

然るに十八の秋、突然東京の父から手紙が來て僕に上京を命じたのです。穩な

僕の心は急に擾亂され、僕は殆んど父の眞意を知るに苦しみ、返書を出して、せめて今年卒業の日まで此儘に仕て置いて貰はうかと思ひましたが、思ひ返して直ぐ上京しました。麴町の宅に着くや、父は一室に僕を喚んで、「早速だがお前と能く相談したいことが有るのだ。お前これから法律を學ぶ氣はないかね」

思ひもかけぬ言葉です。僕は驚いて父の顔を見つめたきり容易に口を開くことが出来ない。

「實は手紙で詳しく言つてやらうかとも思つたが、廻りくどいから喚んだのだ。お前も卒業までと思つたらうし、又大學までとも志して居たらうけれど、人は一日も早く獨立の生活を營む方が可えことはお前も知つて居るだらう。それでお前から直ぐ私立の法律學校に入るのぢや。三年で卒業する。辯護士の試験を受ける。そして曉は私と懇意な辯護士の事務所世話してやるから、其所で四五年も實地の勉強をするのぢや。其内に獨立して事務所を開けば、それこそ立派なもの、お前も

三十にならん内、堂々たる紳士となることが出来る。如何ぢやな、其方が近道ぢやぞ」といふ父の言葉を聽いて居る僕の心の全く顛倒したのも無理はないでせう。これ實に他人の言葉です。他人の親切です。居候の書生に主人の先生が示す恩愛です。

大塚剛藏は何時しか其自然に返つて居たのです。知らずく其自然を暴露すに至つたのです。僕を外に置くこと三年。其實子なる秀輔のみを傍に愛撫すること三年、人間が其天真に歸るべき門、墳墓に近くこと三年、此三年の月日は彼をして自然に返らしたのです。けれども彼は未だ其自然を自認することが出来ず、何處までも自分を以前の父の如く、僕を以前の子の如く見ようとして居るのです。

其處で僕は最早進んで僕の希望を述るどころではありません。たゞこれ命これ從ふだけのことを手短かに答へて父の部屋を出てしまひました。

父ばかりでなく母の様子も一變して居たのです。日の經つに從がうて僕は僕の身の上にて一大秘密のあることを益々信するやうになり、父母の舉動に氣をつければつけるほど疑惑の増すばかりなのです。

一度は僕も自分の癖みだらうかと思ひましたが、生憎と想起すは十二の時、庭で父から問ひつめられた事で、彼を想ひ、これを思へば、最早自分の身の秘密を疑ふことは出来ないのです。

懊惱の中に神田の法律學校に通つて三月を経ちましたらうか。僕は今日こそ父に向ひ、斷然此方から言ひ出して秘密の有無を訊さうと決心し、學校から日の暮方に歸つて夜食を濟ますや、父の居間にゆきました。父はランプの下で手紙を認めて居ましたが、僕を見て、「何ぞ用か」と問ひ、やはり筆を執つて居ます。僕は父の脇の火鉢の傍に坐つて、暫く黙つて居ましたが、此時降りかけて居た空が愈々時雨で來たと見え、甬を打つ霰の音がバラ／＼聞えました。父は筆を擱いて徐ら此方に向き、「何ぞ用でもあるか」と優しく問ひました。

「少し訊ねたいことが有りますので」と纒かに口を切るや、父は早くも様子を見て取つたが、

「何ぢや」と嚴かに膝を進めました。

「父様、私は眞實に父様の兒なのでせうか」と兼て思ひ定めて置いた通り、單刀直入に問ひました。

「何ぢや」と父の一言、其眼光の鋭さ！ けれども直ぐ父は顔を柔けて、

「何故お前はそんなことを私に聞くのぢや、何か私共がお前に親らしくないことでもして、それでさういふのか」

「さういふ譯では御座いませんが、私には昔から如何いふ者か此疑があるもので、始終胸を痛めて居るので御座います、知らして益のない秘密だから父上も黙つてお出でになるのでせうけれど、私は是非それが知りたいので御座います」と僕は靜に、決然と言ひ放ちました。

父は暫時腕組をして考へて居ましたが、徐ろに顔を上げて、

「お前が疑ぐつて居ることも私は知つて居たのぢや、私の方から言つた方がと思つたことも此頃ある。それで最早お前から聞かれて見ると猶ほ言つて了ふが可えから言ふことに仕よう」とそれから父は長々と物語りました。

けれども父の知らして呉れた事實はこれだけなのです。周防山口の地方裁判所に父が奉職して居た時分、馬場金之助といふ碁客が居て、父と非常に懇親を結び、常に兄弟の如く往來して居たさうです。その馬場といふ人物は一種非凡な處があつて、碁以外に父は其人物を尊敬して居たといふことです。その一子が則ち僕であつたのです。

父は其頃三十八、母は三十四で最早子は出來ないものと諦めて居ると、馬場が病で歿し、其妻も間もなく夫の後を追うて此の世を去り、残つたのは二歳になる男の子、これ幸と父が引取つて自分の子として養つたので、父からいふと半分は孤兒

を救ふ義侠でしたらう。

僕の生の父母は未だ年が若く、父は三十二、母は二十五であつたさうです。けれども母の籍が未だ馬場の籍に入らん内に僕が生れ、其爲でせう、僕の出産届が未だ仕てなかつたので、大塚の父は僕を引取るや直に自分の子として届けたのださうです。

以上の事を話して大塚の父のいふには、

「其後私は間もなく山口を去つたから、お前を私の實子でないと知るものは多くないのぢや。私達夫婦は飽くまで實子の積でこれまで育て、來たのぢや。この先も同じことだからお前も決して僻み根生を起さず、何處までも私達を父母と思つて老先を見届けて呉れ。秀輔は實子ぢやがお前のことは決して知らさんから、お前も眞實の兄となつて生涯彼れの力ともなつて呉れ」と、老の眼に涙を見るより先に僕は最早泣いて居たのです。

其處で養父と僕とは此等の秘密を飽くまで人に洩さぬ約束をし、又た僕が此先何かの用事で山口にゆくとも、たゞ餘所ながら父母の墓に詣で、決して公けにはせぬといふことを僕は養父に約しました。

其後の月日は以前よりも却つて穩かに過ぎたのです。養父も秘密を明けて却つて安心した様子、僕も養父母の高恩を思ふにつけて、心を傾けて敬愛するやうになり、勉學をも勵むやうになりました。

そして一日も早く獨立の生活を営み得るやうになり、自分は大塚の家から別れ、義弟の秀輔に家督を譲りたいものと深く心に決する處があつたのです。

三年の月日は忽ち逝き、僕は首尾よく學校を卒業しましたが、猶ほ養父の言葉に従ひ、一年間更に勉強して、さて辯護士の試験を受けました處、意外の上首尾。養父も大よろこびで早速其友なる井上博士の法律事務所へ周旋して呉れました。若兎も角も一人前の辯護士となつて日々京橋區なる事務所に通うて居ましたが、若

し彼のまゝで今日になつたら、養父も其目的通りに僕を始末し、僕も平穩な月日を送つて益々前途の幸福を樂んで居たでせう。

けれども、僕は如何しても悪運の兒であつたのです。殆ど何人も想像することの出来ない陥穽が僕の前に出來て居て、悪運の鬼は慘酷にも僕を突き落しました。

五

井上博士は横濱にも一ヶ所事務所を持って居ましたが、僕は二十五の春、此事務所に詰めることとなり、名は井上の部下であつても其實は僕が獨立でやるのと同じことでした。年齢の割合には早い立身と云つても可いだらうと思ひます。

處が横濱に高橋といふ雜貨商があつて、随分盛大にやつて居ましたが、其主人は女で名は梅、所夫は二三年前に亡なつて一人娘の里子といふを相手に、先づ贅澤な暮らしを仕て居たのです。

訴訟用から僕は此家に入出入することとなり、僕と里子は戀仲になりました。手短かに言ひますが、半年経たぬうちに二人は離れることの出來ないほど逆せ上げたのです。

そして其結果は井上博士が媒酌となり、遂に僕は大家の家を隠居し高橋の養子となりました。

僕の口から言ふも變ですが、里子は美人といふほどでなくとも随分人目を引く程の容色で、丸顔の愛嬌のある女です。そして遠慮なくいひますが全く僕を愛して呉れます。けれども此愛は却つて今では僕を苦しめる一大要素になつて居るので、若し里子が斯くまでに僕を愛し、僕が又た斯うまで里子を愛しないならば、僕はこれほどまでに苦しみは仕ないのです。

養母の梅は今五十歳ですが、見た處、四十位にしか見え、小柄の女で美人の相を備へ、なか／＼立派な婦人です。そして情の烈しい正直な人柄といへば、智慧の

方はやゝ薄いといふことは直ぐ解るでせう。快活で能く笑ひ能く語りますが、如何かすると恐しい程沈鬱な顔をして、半日何人とも口を交へないことがあります。僕は養子とならぬ以前から此人柄に氣をつけて居ましたが、里子と結婚して高橋の家に寢起することゝなりて間もなく、妙なことを發見したのです。

それは夜の九時頃になると、養母は其居間に籠つて了ひ、不動明王を一心不亂に拜むことで、口に何ごとか念じつゝ床の間にかけた火炎の像の前に禮拜して十時となり十一時となり、時には夜半過に及ぶのです。晝間の中、沈鬱いで居た晩は殊にこれが激しいやうでした。

僕も初めは黙つて居ましたが、餘り妙なので或日このことを里子に訊ねると、里子は手を振つて聲を潜め、「黙つて居らつしやいよ。あれは二年前から初めたので、あのことを母に話すと母は大變機嫌を悪くしますから、成るべく知らん顔をして居たはうが可いんですよ。御覽なさい全然狂氣でせう」と別に氣にもかけぬ様なので、

僕も強ては問ひもしなかつたのです。

けれども其後一月もして或日、僕は事務所から歸り、夜食を終へて雑談して居ると、養母は突然、

「怨靈といふものは何年経つても消えないものだらうか？」と問ひました。すると里子は平氣で、

「怨靈なんて有るもんぢやアないわ」と一言で打消さうとすると、母は向になつて、「生意氣を言ひなさんな。お前見たことはあるまい。だからそんなことを言ふのだ」「そんなら母上は見て？」

「見ましたとも」

「オヤさう、如何な顔をして居て？ 私も見たいものだ」と里子は何處までも冷かしてかゝつた。すると母は凄いほど顔色を變へて、

「お前怨靈が見たいの、怨靈が見たいの。眞實に生意氣なことをいふよ此人は！」

と言ひ放ち、つツと起て自分の部屋に引込んで了つた。僕は思はず、

「母上如何か仕て居なさるよ、氣を附けんと……」

里子は不安心な顔をして、

「私眞實に氣味が悪いわ。母上は必定何か妙なことを思つて居るのですよ」

「ちつと神経を痛めて居なさるやうだね」と僕も言ひましたが、さて翌日になると別に變つたことはないのです。變つて居るのは唯々何時もの通り夜になると不動様を拜むことだけで、僕等もこれは最早見慣れて居るから強ひて氣にもかゝりませんでした。

處が今年の五月です。僕は平常よりか二時間も早く事務所を退いて家へ歸りますと、其日は曇つて居たので家の中は薄暗い中にも母の室は殊に暗いのです。母に少し用事があつたので別に案内もせず襖を開けて中に入ると母は火鉢の傍にほつねんと坐つて居ましたが、僕の顔を見るや、

「ア、ア、アツ、アツ！」と叫んで突つたかと思ふと、又尻餅を春いて熟と僕を見た時の顔色！僕は母が氣絶したのかと喫驚して傍に馳寄りました。

「如何しました、如何しました」と叫んだ僕の聲を聞いて母は僅に坐り直し、

「お前だつたか、私は、私は……」と胸を撫すつて居ましたが、其間も不思議さうに僕の顔を見て居たのです。僕は驚いて、

「母上如何なさいました」と聞くと、

「お前が出抜に入つて來たので、私は誰かと思つた。お、喫驚した」と直ぐ床を敷かして休んで了ひました。

此事の有つた後は母の神経に益々異常を起し、不動明王を拜むばかりでなく、僕などは名も知らぬ神符を幾枚となく何處からか貰つて來て、自分の居間の所々に貼つけたものです。そして更に妙なのは、これまで自分だけで勝手に信じて居たのが、僕を見て驚いた後は、僕に向つても不動を信じろといふので、僕が何故信じなければ

ばならぬかと聞くと、

「たゞ黙つて信じてお呉れ。それでないと私が心細い」

「母上の氣が安まるのなら信仰も仕ませうが、それなら私よりもお里の方が可いでせう」

「お里では不可ません。彼には關係のないことだから」

「それでは私には關係があるのですか」

「まアそんなことを言はないで信仰してお呉れ、後生だから」といふ母の言葉を里子も傍て聞いて居ましたが、呆れて、

「妙ねえ母上、不動様が如何して母上と信造さんとは關係があつて私には無いのでせう」

「だから私が頼むのぢアありませんか、理由が言はれる位なら頼みはしません」
だつて無理だわ、信造さんに不動様を信仰しろなんて、今時の人にそんなことを

言つたつて……」

「そんなら頼みません！」と母は怒つて了つたので、僕は言葉を柔げ、

「イヤ私だつて不動様を信じないとは限りません。だから母上まア其理由を話して下さいな如何なことが知りませんが、親子の間だから少しも明されない様なことは無いでせう」と求めました。それは母の言ふ處に由て迷信を壓へ神經を静める方法もあらうかと思つたからです。すると母は暫く考へて居ましたが、吐息をして聲を潜め、

「これ限りの話だよ、誰にも知してはなりませんよ。私が未だ若い時分、お里の父上に縁づかない前に或男に言ひ寄られて執着追ひ廻されたのだよ。け共私は如何しても其男の心に従はなかつたの。さうすると其男が病氣になつて死ぬ間際に大變私を怨んで色々なことを言つたさうです。それで私も可い心持は仕なかつたが、此處へ縁づいてから別に氣にもせずに暮して居ました。ところが所夫が死くなつてから

といふものは、其男の怨靈が如何かすると現れて、可怖い顔をして私を睨み、今にも私を取殺さうとするのです。それで私が不動様を一心に念ずると其怨靈がだんだん消えて無くなります。それに」と、母は一増聲を潜め「この頃は其怨靈が信造に取つついたらしいよ」

「まア嫌な！」里子は眉を顰めました。

「だつてね、如何かすると信造の顔が私には怨靈そつくりに見えるのよ」

それで僕に不動様を信じろと勧めるのです。けれども僕にはそんな真似は出来ないから、里子と共に色々と怨靈などいふものゝ有るべきでないことを説いたけれども無益でした。母は堅く信じて疑はないので、僕等も持餘し、此の鎌倉へでも来て居て精神を静めたらと、無理に勧めて遂に此處の別荘に入れたのは今年の五月のことです。

六

高橋信造は此處まで話して来て忽ち頭をあけ、西に傾く日影を愁然と見送つて苦惱に堪へぬ様であつたが、手早く杯をあけて一杯飲み干し、

「この先を詳しく話す勇氣は僕にありません。事實を露骨に手短かに話しますから、其以上は貴方の推察を願ふだけです。」

高橋梅、即ち僕の養母は僕の眞實の母、生の母であつたのです。妻の里子は父を異にした僕の妹であつたのです。如何です、是が奇しい運命でなくて何としませう。斯の如きをも原因結果の理法といへばそれまでです。けれども、かゝる理法の下に知らずくゝ此身を置かれた僕から言へば、此天地間にかゝる慘酷なる理法すら行はるゝを怨みます。

先づ如何して此等の事實が僕に知れたか、其手續を簡單に言へば、母が鎌倉に來

てから一月後、僕は訴訟用で長崎にゆくこととなり、其途中山口、廣島などへ立寄る心組で居ましたから、見舞かたぐ、鎌倉へ来て母に此事を話しますと、母は眼の色を變へて、山口などへ寄るなと言ひます。けれども僕の心には生の父母の墓に参る積がありますから、母には可い加減に言つて置いて、遂に山口に寄つたのです。兼て大塚の父から聞いて居たから寺は直ぐ分りました。けれども僕は馬場金之助の墓のみ見出して、死んだと聞いた母の墓を見ないので、不審に思つて老僧に遇ひ右の事を訊ねました。尤も唯だ所縁のものとのみ、僕の身の上は打明けないのです。

すると老僧は馬場金之助の妻お信の墓のあるべき筈はない。彼の女は金之助の病中に、碁の弟子で、町の豪商某の弟と怪しい仲になり、金之助の病氣は其爲更に重くなつたのを氣の毒とも思はず、遂に乳飲兒を置去りにして駆落して了つたのだと話しました。

老僧は猶も父が病中母を罵つたこと、死際に大塚剛藏に其一子を託したことまで語りました。

其お信が高橋梅であるといふことは、誰も知らないのです。僕も證據は持つて居ません。けれども老僧がお信のことを語る中に早くも僕は今の養母が即ちそれであることを確信したのです。

僕は山口で直ぐ死んで了はうかと思ひました。彼の時、實に彼の時、僕が思ひ切つて自殺して了つたら、寧ろ僕は幸であつたのです。

けれども僕は歸つて來ました。一は何とかして確な證據を得たため、一は里子に引寄せられたのです。里子は兎も角も妹ですから、僕の結婚の不倫であることは言ふまでもないが、僕は妹として里子を考へることは如何しても出來ないのです。

人の心ほど不思議なものはありません。不倫といふ言葉は愛といふ事實には勝て

ないので。僕と里子の愛が却つて僕を苦しめると先程言つたのは此事です。僕は里子を擁して泣きました、幾度も泣きました。僕も亦た母と同じく物狂しくなりました。憐れなるは里子です。總ての事が里子には怪しき謎で、彼はたゞ惑ひに惑ふばかり、遂には母と同じく怨靈を信するやうになり、今も横濱の宅で母と共に不動明王に祈念を凝して居るのです。里子は怨靈の本體を知らず、たゞ母も僕も此怨靈に苦しめられて居るものと信じ、祈念の誠を以て母と所夫を救はうとして居るのです。

僕は成るべく母を見ないやうにして居ます。母も僕に遇ふことを好みません。母の眼には成程僕が怨靈の顔と同じく見えるでせうよ。僕は怨靈の兒ですもの！僕には母を母として愛さなければならん筈です。然し僕は母が僕の父を頻死の際に捨て、僕を頻死の父の病床に捨て、密夫と走つたことを思ふと、言ふべからざる怨恨の情が起るのです。僕の耳には亡父の怒罵の聲が聞えるのです。僕の眼に

は疲れ果てた身體を起して、何も知らない無心の子を擁き、男泣きに泣き給うた様が見えるのです。そして此聲を聞き此様を見る僕には實に怨靈の氣が乗移るので

す。
夕暮の空ほの暗い時に、柱に靠れて居た僕が突然、眼を張り呼吸を凝して天の一方を睨む様を見た者は母でなくとも逃げ出すでせう。母ならば氣絶するでせう。

けれども僕は里子のことを思ふと、恨も怒も消えて、たゞ限りなき悲哀に沈み、この悲哀の底には愛と絶望が戦うて居るのです。

處が此九月でした。僕は餘りの苦惱に平生殆ど酒杯を手にせぬ僕が、里子の止めるのも聴かず飲めるだけ飲み、居間の中央に大の字になつて居ると、何と思つたか、母が突然鎌倉から歸つて来て里子だけを其居間に呼びつけました。そして僕は酔つて居ながらも直ぐ其理由の尋常でないことを悟つたのです。
一時間ばかり経つと里子は眼を泣き膨らして僕の居間に歸つて來ましたから、

「如何したのだ」と聞くと里子は僕の傍に突伏して泣きだしました。

「母上が僕を離婚すると云つたのだらう」と僕は思はず怒鳴りました。すると里子は狼狽して、

「だからね、母が何と言つても所夫決して氣にしないで下さいな。氣狂だと思つて投擲つて置いて下さいな、ね、後生ですから」と泣聲を振はして言ひますから、「さういふことなら投擲つて置く譯に行かない」と僕はいきなり母の居間に突入しました。里子は止める間もなかつたので僕に續いて部屋に入つたのです。僕は母の前に坐るや、

「貴女は私を離婚すると里子に言つたさうですが、其理由を聞きませう。離婚するなら仕ても私は平氣です。或は寧ろ私の望む處で御座います。けれども理由を被仰い。是非其の理由を聞きませう」と酔に任せて詰寄りました。すると母は僕の劍幕の餘り鋭いので驚喫して僕の顔を見て居るばかり。一言も發しません。

「サア理由を聞きませう。怨靈が私に乘移つて居るから氣味が悪いといふのでせう。それは氣味が悪いでせうよ。私は怨靈の兒ですもの」と言ひ放ちました、見る／＼母の顔色は變り、物をも言はず部室の外へ駆け出て了ひました。

僕は其まゝ母の居間に寢て了つたのです。眼が覺めるや酒の酔も醒め、頭の上には里子が心配さうに僕の顔を見て坐つて居ました。母は直ぐ鎌倉に引返したのでした。

其後僕と母とは會はないのです。僕は母に交つて此方に来て、母は今、横濱の宅に居ますが、里子は兩方を交る／＼介抱して、二人の不幸をば一人で正直に解釋し、ただ／＼怨靈の業とのみ信じて、二人の胸の中の眞の苦惱を全然知らないのです。僕は酒を飲むことを里子からも醫師からも禁じられて居ます。けれども如何でせう。此のやうな目に遇つて居る僕がブランドイの隠飲みをやるのは果して無理でせうか。

今や僕の力は全く悪運の鬼に挫がれて了ひました。自殺の力もなく、自滅を待つほどの意氣地のないものと成り果て、居るのです。

如何でせう、以上ザツと話しました僕の今日までの生涯の経過を考へて見て、僕の心持になつて貰ひたいものです。これが唯だ原因結果の理法に過ぎないと數學の式に對するやうな冷かな心持で居られるものでせうか。生の母は父の仇です、最愛の妻は兄妹です。これが冷かなる事實です。そして僕の運命です。

若し此運命から僕を救ひ得る人があるなら、僕は謹んで教を奉じます。其人は僕の救主です」

七

自分は一言を交へないで以上の物語を聞いた。聞き終つて暫くは一言も發し得なかつた。成程悲惨なる境遇に陥つた人であるとツクム、氣の毒に思つたのである。

けれども止むなくんばと、

「斷然離婚なさつたら如何です」

「それは新らしき事實を作るばかりです。既に在る事實は其爲めに消えません」

「けれども其は止を得ないでせう」

「だから運命です。離婚した處で生の母が父の仇である事實は消えません。離婚した處で妹を妻として愛する僕の愛は變りません。人の力を以て過去の事實を消すことの出来ない限り、人は到底運命の力より脱るゝことは出来ないでせう」

自分は握手して、默禮して、此不幸なる青年紳士と別れた。日は既に落ちて餘光華やかに夕の雲を染め、願れば我運命論者は淋しき砂山の頂に立つて沖を遙に眺めて居た。

其後自分は此男に遇はないのである。

酒
中
日
記

五月三日(明治三十年)

「あの男は如何なつたか知ら」との噂、よく有ることで、四五人集まつて以前の話が出る、消えて去くなつた者の身の上に、ツイ話に移るものである。

この大河今藏、恐らく今時分やはり同じやうに噂せられて居るかも知れない。「時に大河は如何したらう」升屋の老人口をきる。

「最早死んだかも知れない」と誰かゞ氣の無い返事を爲る。「全くあの男ほど氣の毒な人はないよ」と老人は例の哀れつほい聲。

氣の毒がつて下さる段は難有い。然し幸か不幸か、大河といふ男今以て生きて居る、而も頗る達者、此先何十年此世に呼吸の音を續けますことやら。憚りながら未だ三十二で御座る。

まさか此小ほけな島、馬島といふ島、人口百二十三の一人となつて、二十人あるなしの子供を相手に、やはり例の教員、然し今度は私塾なり、アイウエオを教へて居るといふ事は御存知あるまい。無いのが當然で、斯く申す自分すら、自分の身が流れ流れて思ひもかけぬ此島で斯んな暮を爲るとは夢にも思はなかつたこと。

噂をすれば影とやらで、ひよつくり自分が現はれたなら、升屋の老人吃驚りして開いた口がふさがらぬかも知れない。「いつたい君は如何したといふんだ」と漸とこのことで聲を出す。それから話して一時間も経つと又喫驚、今度は腹の中で「いつたい此男は如何したのだらう、五年見ない間に全然氣象まで變つて了つた」

驚き給ふな原因がある。第一、日記といふ者書いたことのない自分が斯うやつて、こまめに筆を走らして、如何でもよい自分のやうな男の身の上に有つたことや、有ることを、今日からポツ／＼書いて見ようといふ氣になつたのからして、自分は五年前の大河では御座らぬ。

あゝ今は氣樂である。此島や島人はすつかり自分の氣に入つて了つた。瀬戸内にこんな島があつて、自分のやうな男を、兎も角も香氣に過さして呉れるかと思ふと、正にこれ夢物語の一章一節と言ひたくなる。

酒を飲んで書くと、少々手がふるへて困る。然し酒を飲まないで書くと心がふるへるかも知れない。「あゝ氣の弱い男！」何處に自分が變つて居る、やはりこれが自分の本音だらう。

可愛い可愛いお露が遊びに来たから、今日はこれで筆を投げる。

五月四日

自分が升屋の老人から百圓受取つて机の抽斗に納つたのは忘れもせぬ十月二十五日、事の初が此の日で、其後自分は此日に逢ふごとに頸を縮めて眼をつぶる。なるべく此日の事を思ひ出さないやうにして居たが、今では平氣なもの。一件がありくと眼の先に浮んで来る。

あの頃の自分は眞面自なもので、酒は飲めても飲まぬやうに、謹嚴正直、いやはや四角張つた男であつた。

老人連、全然惚れ込んでしまつた。一にも大河、二にも大河。公立八雲小學校の事は大河でなければ竹箒一本買ふことも決定るわけにゆかぬ次第。校長になつてから二年目の升屋の老人、遂に女房の世話まで焼いて、お政を自分の妻にした。子が出來た。お政も子供も病身、健康なは自分ばかり。それでも一家無事平和に、これぞといふ面白いこともない代り、又これぞといふ心配もなく日を送つて居た。處が日清戦争、連戦連勝、軍隊萬歳、軍人でなければ夜も日も明けぬお目出度いことゝなつて、そして自分の母と妹とが墮落した。

母と妹とは自分達夫婦と同棲するのが窮屈で、赤坂區新町に下宿屋を開業。それも表向ではなく、例の素人下宿。いやに氣位を高くして、家が広いから、それにどうせ遊んで居る身體、若いものを世話してやるだけのこと、もつとも性の知れぬお

方は御免蒙るとの觸込み。

自體拙者は氣に入らないので、頻りと止めて見たが、もと／＼強情我慢な母親、妹は我儘者、母に甘やかされて育てられ、三絃まで仕込まれて自墮落者に首尾よく成りおほせた女。お前たちの厄介にさへならなければ可からうとの挨拶で、頭から自分の注意は取あけない。

これぞといふ間違もなく半年経ち、日清戦争となつて、兵隊が下宿する。初は一人の下士。これが導火線、類を以て集り、終には酒、歌、軍歌、日本帝國萬々歳、そして母と妹との墮落。

「國家の干城たる軍人」が悪いのか、母と妹とが悪いのか、今更いふべき問題でもないが、たゞ一の動かすべからざる事實あり曰く、娘を持ちし親々は、それが華族でも、富豪でも、官吏でも、商人でも、皆な悉く軍人を聲に持ちたいといふ熱望を以て居たのである。

娘は娘で軍人を情夫に持つことは、寧ろ誇るべきことである、とまで思つて居たらしい。

軍人は軍人で、殊に下士以下は人の娘は勿論、後家は勿論、或は人の妻をすら翫弄して、それが當然の權利であり、國民の義務であるとまで濟まして居たらしい。

三圓借せ、五圓借せ、母はそろ／＼自分を攻め初めた。自分は出来るだけ其の望に應じて、苦しい中を何とか工夫して出してやつた。

月給十五圓。それで親子三人が食つてゆくののである。なんで餘裕があらう。小學校の教員はすべからく燒鹽か何かで三度のめしを食ひ、以て教場に於ては國家の干城たる軍人を崇拜すべく七歳より十三四歳までの兒童に教訓せよと時代は命令して居るのである。

唯々として自分は此命令を奉じて居た。

然し母と妹との節操を軍人閣下に献上し、更らに又、此十五圓の中から五圓三圓

と割いて、母と妹とが淫酒の料に捧げなければならぬかを思ひ、流石お人好の自分も頗る當惑したのである。

酒が醒めかけて来た！今日はこゝで止める。

五月六日

昨日は若い者が三四人押かけて来て、夜の十二時過ぎまで飲み、だみ聲を張上げて歌つたので疲れて了ひ、何時寝たのか知らぬ間に夜が明けて今日。それで昨日の日記がお休み。

さても氣樂な教員。酒を飲まうが歌はうが、お露を可愛がつて抱いて寝ようが、それで先生の資格なしとやかましく言ふ者は此島に一人もない。

特別に自分を尊敬も爲ない代りに、魚あれば魚、野菜あれば野菜、誰が持つて来たとも知れず臺所に投りこんである。一升徳利をぶらさけて先生、憚りながら地酒では御座らぬ、お露の酌で飲んで見さつせと縁先へ置いて去く老人もある。

あゝ氣樂だ、自由だ。母もいらぬ、妹もいらぬ、妻子もいらぬ。慾もなければ得もない。それで居てお露が無暗に可愛いのは不思議ぢやないか。

何が不思議。可愛いから可愛いので、お露とならば何時でも死ぬる。

十日前のこと、自分は縁先に出て月を眺め、臙に霞んで湖水のやうな海を見おろしながら、お露の酌で飲んで居ると、ふと死んだ妻子のこと、東京の母や妹のことを思ひだし、又此身の流轉を思つて、我知らず涙を落とすと、お露は見て居たが、その鈴のやうな眼に涙を一ぱい含ませた。その以前自分はお露に涙を見せたことなく、お露も亦た自分に涙を見せたことはないのである。さても可愛い此娘、此大河なる團栗眼の猿のやうな顔をして居る男にも何處か異な處が有るかして、朝夕慕ひ寄り、乙女心の限りを盡して親切にして呉れる不便さ。

自然生の三吉が文句ぢやないが、今となりては、外に望は何にもない、光榮ある歴史もなければ國家の干城たる軍人も居ない此島。此島に生れて此島に死し、死し

ては彼の、そら今風が鳴つて居る山陰の靜かな墓場に眠る人々の仲間入りして、此島の土となりたばかり。

お露を妻に持つて島の者にならつせ、お前さん一人、遊んで居ても島の者が一生養なつて上げまさ、と六兵衛が言つて呉れた時、嬉しいやら情けないやらで泣きたかつた。

そして見ると、自分の周囲には何處かに悲惨の影が取巻いて居て、人の憐愍を自然に惹くのかも知れない。自分の性質には何處かに人なつこいところがあつて、自と人の親愛を受けるのかも知れない。

何れにせよ、自分の性質には思ひ切つて人に逆らうことの出来る、ピンとした處はないので、心では思つても行に出すことの出来ない場合が幾多もある。

あゝ哀れ氣の毒千萬なる男よ！母の爲め妹のために可々ないと思つた下宿の件も遂には止め終せなかつたも當然。母と妹の淺ましい墮落を知りつゝも思ひ切つて言

ひだし得ず、言ひだしても争さうことの出来なかつたも當然。苦しい中を算段して、いや／＼ながらも母と妹とに淫酒の料をさ／＼けたもこれ亦當然。

二十四日の晩であつた。母から手紙が来て、明二十五日の午後まかり出るから金五圓至急に調達せよと申込んで来た時、自分は思はず吐息をついて長火鉢の前に坐つたまゝ拱手をして首を垂れた。

「如何なさいました？」と病身の妻は驚いて問うた。

「これを御覽」と自分は手紙を妻に渡した。妻は見て居たが、これも黙つて吐息しただまゝ手紙を下に置く。

「何故こんな無理ばかり言つて来るだらう」

「さうですわね……」

「最早一文なしだらう？」

「一圓ばかり有ります」

「有つたつて其を渡したら宅で困つて了ふ。可いよ、明日母上が來たら私がきつばりお謝絶するから。さうくは私達だつて困らアね。それも今日母上や妹の露命をつなぐ爲めとか何とか別に立派な費ひ途でも有るのなら、借金してだつて、衣類を質草に爲たつて五圓や三圓位なら私の力にでも出來して上げるけれど、兵隊に貢ぐのやら譯もわからない金だもの。可いよ、明日こそ私が思ひきり言ふから、それで聽かないなら如何にでも勝手になさいと言つてやるから」

「言ふのはお止しなさいよ」

「何故や、言ふよ、明日こそ言ふよ」

「だつてね母上のことだから又大きな聲をして必定お怒鳴になるから、近處に聞えても外聞が悪いし、それにね、貴方が思ひ切つたことを被仰ると直ぐ私が恨まれますから。それでなくても私が氣に喰はんから一所に居たくても爲方なしに別居して嫌な下宿屋までして居るんだつて言ひふらしておいでになるんですから」とお政は

最早泣き聲になつて居る。

「然し實際明日母上が見えたつて渡す金が無いぢやアないか」

「私が明日のお晝までに如何にか致します」

「如何にかつて、お前に出來る位なら私にだつて何とか爲りさうなものだが、實際始末にいけないのぢやないか」

「今度だけ私にまかして下さい、何とか致しますから。」と言はれて自分は強いて争はず、めいり込んだ氣を引きたて、改築事務を少しばかり執つて床に就いた。

五月七日

一寢入したかと思ふと、フト眼が覺めた。眼が覺めたのではなく可怕い力が闇の底から手を伸して揺り起したのである。

其頃學校改築のことで自分は其委員長。自分の外に六名の委員が居ても多くは有名無實で、本氣で世話を焼くものは自分の外に升屋の老人ばかり。豫算から寄附金

のことまで自分が先に立つて苦勞する。敷地の買上、其代價の交渉、受負師との掛引、割當てた寄附金の取立、現金の始末まで自分に爲せられるので、自然と算盤が机の上に置れ通し。持前の性分、間に合はして置くことが出来ず、朝から寢るまで心配の絶えない處へ、母と妹とが墮落の件。殊に又ぞろ母からの無理な申込で頭を痛めた故か、其夜は寢ぐるしく、怪しい夢ばかり見て我ながら眠つて居るのか、覺めて居るのか判然ぬ位であつた。

何か物音が爲たと思ふと眼が覺めた。さては盜賊と半ば身體を起してきよろくと四邊を見廻したが、森として其様子もない。夢であつたか現であつたか、頭が錯亂して居るので判然しない。

言ふに言はれぬ恐怖さが身内に漲ぎつて如何しても其儘眠ることが出来ないの、思ひ切つて起上がった。

次の八疊の間の間の襖は故意と一枚開けてあるが、豆洋燈の火は其入口までも達

かず、中は眞闇。自分の寢て居る六疊の間すら煤けた天井の影暗く被ひ、靄霧でもかゝつたやうに思はれた。

妻のお政はすや／＼と寢入り、其傍に二歳になる助が其顔を小枕に押着けて愛らしい手を母の腮の下に遠慮なく突込んで居る。お政の顔色の悪さ。さなきだに蒼ざめて血色悪しき顔に夜目には死人かと怪しまれるばかり。剩へ髪は亂れて頬にかゝり、頬の肉やゝ落ちて、身體の健かならぬと心に苦勞多きとを示して居る。自分は音を立てぬやうに其枕元を歩いて、長火鉢の上なる豆洋燈を取上げた。

暫時聽耳を聳て何を聞くともなく突立つて居たのは、猶は八疊の間を見分する必要が有るかと思がつて居るので。しかし確に簞笥を開ける音がした。障子をすすると開ける音を聞いて、夢か現か兎も角と八疊の間に忍足で入つて見たが、別に異變はない。縁側から、臺所に出て眞闇の中をそつと覗くと、臭氣のある冷たい空氣が氣味悪く顔を掠めた。敷居に立つて豆洋燈を高くかゝけて眞暗の隅々を熟と見て

居たが、竈の横にかくれて黒い風呂敷包が半分出て居るのに目が着いた。不審に思ひ、中を開けて見ると現はれたのが一筋の女帯。

驚くまいことか、これお政が外出の唯た一本の帯、升屋の老人が特に祝つて呉れた品である。何故これが此所に隠してあるのだらう。

自分の寢靜まるのを待つて、お政はひそかに簞笥から此帯を引出し、明朝早くこれを質屋に持込んで母への金を作る積と思ひ當つた時、自分は我知らず涙が頬を流れるのを拭き得なかつた。

自分は其まゝ帯を風呂敷に包んで元の所に置き、寢間に還つて長火鉢の前に坐り烟草を吹かしながら物思に沈んだ。自分は果して彼の母の實子だらうかといふやうな怪しい慘ましい考が起つて来る。現に自分の氣性と母及び妹の氣象とは全然異つて居る。然し父には十年に別れたのであるから、父の氣象に自分が似て生れたといふことも自分には解らない。かすかに覺えて居る所では父は柔和い方で、荒々

しく母や自分などを叱つたことはなかつた。母に叱られて柱に縛りつけられたのを父が解いて呉れたことを覺えて居る。其時母が父にも怒を移して慳貪に口をきいたことをも思ひ出し、父のこと母のこと、それから其へと思を聯ね、果は親子の愛、兄弟の愛、夫婦の愛などいふことにまで考へ込んで、これまでに知らない深い人情の秘密に觸れたやうな氣にもなつた。

お政は痛ましく助は可愛く、父上は戀しく、懐かしく、母と妹は悪くもあり、痛ましくもあり、子供の時など思ひ起しては戀しくもあり、突然寄附金の事を思ひだしては心配で堪らず、運動場に敷く小砂利のことまで考へだし、頭はぐらくして氣は遠くなり、それで居て神経は何處かに焦々した氣味がある……

嗚呼！ 故何彼の時自分は酒を飲まなかつたらう。今は舌打して飲む酒、飲めば酔ひ、酔へば楽しい此酒を何故飲まなかつたらう。

五月八日

明くれば十月二十五日自分に取つて大厄日。

自分は朝起きて、日曜日のことゆる朝食も急がず、小兒を抱いて庭に出で、其處らをぶら／＼散歩しながら考へた、帯の事を自分から言ひ出して止めようかと。

然し止めて見た處で別に金の工面の出来るでもなし、さりとて斷然母に謝絶することは妻の斷つて止める處でもあるし。つまり自分は知らぬ顔をして居て妻の爲すがままに任すことに思ひ定めた。

朝食を終ると直ぐ机に向つて改築事務を執つて居ると、升屋の老人、生垣の外から聲をかけた。

「お早う御座い」と言ひつゝ、縁先に廻つて「朝つばらから御勉強だね」

「折角の日曜も此頃はつぶれで御座います」

「ハ、ハ、ツ何に今に遊ばれるよ、學校でも立派に出来あがつた處で、しんみりと戦ひたいものだ、私は今からそれを樂みに爲て居る」

座に着いて老人は烟管を取出した。此老人と自分、外に村の者、町の者、出張所の代診、派出所の巡查など五六名の者は策碁の仲間で、殊に自分と升屋とは暇さへあれば氣永な勝負を争つて樂んで居たのが、改築の騒から此方、外の者は兎も角、自分は殆ど何より嗜好、唯一の道樂である碁すら打ち得なかつたのである。

「來月一ぱいは打てさうもありません」

「その代り冬休といふ奴が直ぐ前に控へて居ますからな。左右に火鉢、旨い茶を飲みながら打つ樂は又別だ」といひつゝ、老人は懷中から新聞を一枚出して、急に眞顔になり、

「ちよつと是を御覽」

披けて二面の電報欄を指した。見ると或地方で小學校新築落成式を挙げし當日、廊下の欄が倒れて四五十人の兒童庭に顛落し重傷者二名、輕傷者三十名との椿事の報道である。

「大變です。どうしたと言ふんでせう？」

「だから私が言はんことぢやあない。其通りだ、安普請をすると其通りだ。原などは餘り經費がかゝり過ぎるなんて理窟を并べたが、斯いふ議例が上つて見ると文句はあるまい。全體大切な兒童を何百人と集せるのだもの、丈夫な上にも丈夫に建るのが當然だ。今日一つ原に會つて此新聞を見せてやらなければならん」

「無闇な事も出来すまいが、今度の設計なら決して高い豫算ぢや御座いませんよ、何しろあの建坪ですもの、八千圓なら安い位なものです」

「いや其安價のが私や氣に喰はんのだが、先づ御互の議論が通つて彼の豫算で行くのだから、さう安つほい直ぐ欄の倒れるやうな險呑なものは出来上らんと思ふかね」と言つて氣を更へ、「其處で寄附金ぢやが未だ大きな口が二三残つては居ないかね？」

「未だ三口ほど残つて居ます」

「それぢやア私がこれから廻つて見よう」

「さうですか、それでは大井様を願ひます。今日渡すから人をよこして呉れろと云つて来ましたから」

「百圓だつたね？」と老人は念を推した。

「さうです」

其處で、老人は程遠からぬ華族大井家の方へ廻るとて出行きたるに引きちがへてお政は外から歸つて來た。老人と自分が話して居る間に質屋に行つて來たのである。

「金は出来たらうか」と自分は何處までも知らぬ顔で聞いた。妻は、

「出来ました」と言ひつゝ、小兒を背から下して膝に乗せた。

「如何して出來たのだ」と自分は問はざるを得なかつた。

「如何してども可いぢやアありませんか、私が……」と言ひかけて淋しげな笑を洩した。

「さうさ、お前に任じたのだから……處で母上さんが見えたら最早下宿屋は止して一所になつて下さいと言つて見ようぢやないか」

「言つた處で無益で御座いますよ」

「無益といふこともあるまい。熱心に説けば……」

「無益ですよ、却つて氣を悪くなさるばかりですよ」

「それは多少か氣を悪くなさるだらうけれど、言はないで置けばこの後どんなことに成りゆくかも知れないよ」

「さうですねエ……然し兵隊さんと如何とかいふやうなことは被仰らんはうが可う御座いますよ」

「まさか其んなことまで言はれも爲まいけれど」

一時間立たぬうちに升屋の老人は歸つて来て、

「旨く行つたよ」と座に着いた。

「どうも御苦勞様でした」

ハイ確かに百圓渡しましたよ。驗ためて下さい」と紙包を自分の前に。

「今日は日曜で銀行がだめですから貴所の宅に預かつて下さいませんか。私の家は用心が悪う御座いますから」と自分が言ふを老人は笑つて打消し、

「大丈夫だよ、今夜だけだもの、私宅だつて金庫を備へつけて置くほどの酒屋ぢやアなし、ハツハツ、、、。取られる時になりや私の處だつて同じだ。大井様は濟んだとして、後の二軒は誰が行く筈になつて居ます」

「午後私が廻る積りです」

升屋の老人は去り、自分は百圓の紙包を机の抽斗に入れた。

五月九日

自分は五年前の事を書いて居るのである。十月二十五日の事を書いて居るのである。厭になつて了つた。書きたくない。

けれども書く、酒を飲みながら書く。此頃島の若いものと一しよに稽古をして居る義太夫。さうだ「玉三」でも唸りながら書かう。面白い！

晝飯を済まして、自分は外出けようとする處へ母が来た。母が来たら自分の歸るまで待つて貰ふ筈にして置いた處へ。

色の淺黒い、眼に劍のある、一見して一癖あるべき面魂といふのが母の人相。背は自分と異つてすらりと高い方。言葉に力がある。

此母の前へ出ると自分の妻などはみじめな者。妻の一言いふ中に母は三言五言いふ。妻はもじくしながらいふ。母は號令でもするやうに言ふ。母は三言目には喧嘩腰、妻は罵倒されて蒼くなつて小さくなる。女でもこれほど異ふものかと怪しまれる位。

母者びとの御入來。

其處は端近先づ／＼これへとも何とも言はぬ中に母はつか／＼と上つて長火鉢の

向へむづとばかり、

「手紙は届いたかね」との一言で先づ我々の荒膽をひしがれた。

「届きました」と自分は答へた。

「言つて來たことは都合がつくかね？」

「用意して置きました」とお政は小さい聲、母はそろ／＼機嫌を改めて、

「あゝ其は難有う。毎度お氣の毒だと思ふんだけど、ツイね私の方も請取る金が都合よく請取れなかつたりするものだから、此方も困るだらうとは知りつゝ、何處へも言つて行く處がないし、ツイね」と言つて莞爾。

能く見ると母の顔は決して下品な出來ではない。柔和に構へて、チンとすまして居られると、其劍のある眼つきが却つて威を示し、何處の高貴の御部屋様かと受取られるところもある。

「いゝエ如何致しまして」とお政は言つたぎり、伏目になつて助の頭を撫でゝ居る。

母はちよつと助を見たが、お世辭にも孫の機嫌を取つて見る母では無さうで、實はさうで無い。時と場合で其なことは如何にでも。

「助の顔色が如何も可くないね。いつたい病身な兒だから餘程氣をつけないと不可ませんよ」と云ひつゝ、今度は自分の方を向いて、

「學校の方は如何だね」

「如何も多忙しくつて困ります。今日もこれから寄附金のごことで出掛ける處でした」

「さうかね、私にかまはないでお出かけよ、私は今日は日曜だから悠然して居られない」

「さうでしたね、日曜は兵隊が澤山来る日でしたね」と自分は何心なく言つた。すると母は、やはり氣がとがめるかして、少し氣色を更へ、音がカンを帯びて、

「なに私どもの處に下宿して居る方は曹長様ばかりだから、日曜だつて平常だつてそんなに變らないよ。でもね、日曜は兵が遊びに来るし、それに矢張上に立てば酒

位飲まして返すからね、自然と私共も忙がしくなる勘定サ。軍人は如何しても景氣が可いね」

「さうですかね」と自分は氣の無い挨拶をしたので、母は愈々氣色ばみ、

「だつて左うぢやないかお前、今度の戦争だつて日本の軍人が豪いから何時でも勝つぢやないか。軍人あつての日本だアね、私共は軍人が一番すきサ」

この調子だから自分は遂に同居説を持たすことが出来ない。まして品行の噂でも爲て、忠告がましいことでも言はうものなら、母は何と言つて怒鳴るかも知れない。妻が自分を止めたも無理でない。

「學校の先生なんて、私は大嫌ひサ、ぐずぐずして眼ばかりパチつかして居る處は蚊を捕へ損なつた疣蛙見たやうだ」とは曾て自分を罵つた言葉。

疣蛙が出ない中にと、自分は、

「ちよつと出て來ます、御悠寛」とこそく出てしまつた。何と意氣地なき男よ！

思へば母が大意張で自分の金を奪ひ、遂に自分を不幸のドン底まで落したのも無理はない。自分達夫婦は最初から母に呑まれて居たので、母の爲ることを怒り、恨み、罵つては見る者の、自分達の力では母を如何することも出来ないであつた。酒を飲まない奴は飲む者に凹まされると決定つて居るらしい。今の自分であつて見ろ！ 文句がある。

「母上さん、そりやア貴女軍人が一番好きでせうよ」とじろり其横顔を見てやる。母のことだから、

「オヤ異なことを言ふね、も一度言つて御覽」と眼を釣上げて詰寄るだらう。

「御氣に觸つたら御勘辨。一ツ差上げませう」と杯を奉る。「草葉の蔭で父上が……」とそれからさはりで行く處だが、彼の時は如何して彼の時分はあんなに野暮天だつたらう。

濱を誰か唸つて通る。彼の節廻しは吉次だ。彼奴聲は全たく美しいよ。

五〇〇日

外から歸つたのが三時頃であつた。妻は突伏して泣いて居る。

「如何したのだ、如何したの？」と自分は驚いて訊いたが、お政のことゆるゑ、泣くばかりで容易に言ひ得ない。泣くのは此女の持前で、少しの事にも涙をこぼす。然し今度のは餘程のことが有つたと見えて、自分が聞けば聞くほど益々泣入るばかり。かうなると自分は狼狽へざるを得ない。水を持って来てやりなどと漸くのことです。詳しく事情が解つた。

お政の苦心は十分母の満足を得なかつたのである。折角の帯も三圓にしかならず、仕方なしにお政は自分の出て行つた後で此三圓を母に渡すと、母は大立腹。二人の問答は次のやうであつた。

「五圓と言つて來たのだよ」

「でも只今これだけしか無いのですから……」

「だつて先刻用意してあると言つたぢやないか」

「ですから三圓だけ漸々作らへましたから……」

「さう？、漸々作らへてお呉れだつたのか。お氣の毒でしたね、色々御心配をかけた。必定七屋からでも持て来たお金でせう。そんな思のとツ着いた金なんか借りたくないよ。何だね人面白くも無い。可いよ今藏が歸つて来るのを待つて居るから。今藏に言ふから」

「いゝエ主人では知らないのですから……」

「オヤ今藏は知らないの？ 驚いた、それぢやお前さんが内證でお貸なの。嘘を吐きなさんな、嘘を。今藏の奴必定三圓位で追返せとか何とか言つたのだらう。だから自分は私を避けて出て行つたのだらう。可いよ。待つて居るから。晩までだつて待つて居てやるから」

「宅のは全く、全く知らないので……」と妻は泣いて口がきけない。

「泣かないでも可いちやアないか。お前さんは亭主の言ひつけ通り爲たのだから可いちやアないか。フン何ぞと言ふと直ぐ泣くのだ。どうせ私は鬼婆だから私が何か言ふと可怕いだらうよ」

何と言はれても一方は泣くばかり、母は一人で並べて居る。

「だから出来なきや出来ないと云つて寄せせば可いんだ。新町から青山くんだりまで三圓ばかりのお金を取りに来るやうな暇はない身體ですよ。意氣地がないから親一人妹一人養ふことも出来ずさ。下宿屋家業までさして置いて忠孝の道を兒童に教へるなんて、随分變つた先生様もあるものだね。然しお政さんなんぞは幸福さ。いくら親に不孝な男でも女房だけは可愛がるからね。お光などのやうに兵隊の機嫌まで取つて漸々御飯を戴いていく女もあるから、お前さんなんぞ決して不足に思つちやなりませんよ」

皮肉を言ひ盡して、暫らく烟草を吹かしながら坐つて居たが、時計を見上げて、

「どうせ避けた位だからちよつくら歸つて來ないのだう。歸りませう、私も多忙しい身體だからね。お客様に御飯を上げる支度も爲なければならんし」と急に起上がつて、

「紙と筆を借りるよ。置手紙を書くから」と机の傍に行つた。

此時助が劇しく泣きだしたので、妻は抱いて庭に下りて生垣の外を、自分も半分泣きながら、ぶら／＼歩いて子供を寝かしつけようとして居た。暫くすると急に母は大聲で、

「お政さん！ お政さん！」と呼んだ。妻は座敷に上がると母は眼に角を立て睨むやうにして、

「お前さんまで逃げないでも可いよ。人を馬鹿にしてらア。手紙なんぞ書かないから、歸つたら左う言つてお呉れ。此三圓も不用いよ」と投げだして「最早私も決して來ないし、今藏も來ないが可い、親とも思ふな、子とも思はんからと言つてお呉れ！」

非常な劍幕で母は立ち去り、妻は其まゝ泣伏したのであつた。
自分は一々聞き終つて、今の自分なら、

「宜しい！ 不用きや三圓も上げんばかりだ、泣くな、泣くな、可いぢやないか母上さんの方から母でもない子でも無いといふのなら、致かたもないさ。無理も大概にして貰はんとな」

然し彼の時分はさうでなかつた。不孝の子であるやうに言はれて見るとひどく其が氣にかゝる。氣にかゝるといふには種々の意味が含んで居るので、世間體もあるし、教員といふ第一の資格も缺けて居るやうだし、即ち何となく心に安んじないのである。それに三圓といふことは自分も知らなかつたのだ。其點は此方が悪いやうな氣もするので、

「困つたものだ」と腕組して暫く嘆息をして居たが、

「自分で勝手に下宿屋を行つて居ながら、そんなことを言はれて見ると、全然私共が悪いやうに聞える。可いよ、私が今夜行つて来よう。そして三圓だけ渡して来る。」
五月十一日

今日は朝から雨降り風起りて、湖水のやうな海も流石に波音が高い。山は鳴つて居る。

今夜はお露も来ない。先刻まで自分と飲んで居た若者も歸つてしまつた。自分は可い心持に酔うて居る、酔うては居るもの、如何も孤獨の感に堪へない。要するに自分は孤獨である。

人の一生は何の爲だらう。自分は哲學者でも宗教家でもないから深い理窟は知らないが、自分の今、今といふ今感する所は唯だ儂さだけである。

如何も人生は儂いものに違ひない。理窟は抜にして眞實の處は儂いものらしい。若し果敢いものでないならば、たとひ人は如何な境遇に墮ちるとして自分が今感す

るやうな深い深い悲哀は感じない筈だ。

親とか子とか兄弟とか、朋友とか社會とか、人の周圍には人の心を動かすものが出来て居る。まぎらす者が出来て居る。若しこれ等が皆な消え去せて山上に樹つて居る一本松のやうに、たゞ一人、無人島の荒磯に住んで居たらどうだらう。風は急に雨は暗く海は怪しく叫ぶ時、人の生命、此地の上に住む人の一生を楽しいもの、望めるものと感ずることが出来ようか。

だから人情は人の食物だ。米や肉が人に必要物なる如く親子や男女や朋友の情は人の心の食物だ。これは比喩でなく事實である。

だから土地に肥料を施す如く、人は色々な文句を作つて此等の情を培ふのだ。さうして見ると神様は旨く人間を作つて御座る。ではない人間は旨く猿から進化して居る。

オヤ！戸をたたく者がある、此雨に、お露だ。可愛いお露だ。

さうだ。人間は皆く猿から進化して居る。

五月十二日

心細いことを書いてる中にお露が来たので、昨夜は書き續きの本文に取りかゝらなかつた。さて――

若しお政が氣の勝つて居る女ならば、自分が其夜三圓持て母を尋ねると言へば、質屋から持つて来たお金なんか厭だと被仰つたのだから持つて行かなくつたつて可う御座いますよ」と言ひ放つて口惜し涙を流す處だが、お政にはそれが出来ない。母から厭味や皮肉を言はれて泣いたのは唯悲くつて泣いたので、自分が優しく慰むれば心も次第に静まり、別に文句は無いのである。

處で母は百圓盗んで歸つた。自分は今これを冷かに書くが、机の抽斗を開けて見て百圓の紙包が紛失して居るのを知つた時は、「オヤ！」と叫んだきり容易に二の句が出なかつた。

「お前此抽斗を開けや爲なかつたか」

「否」

「だつて先刻入れて置いた寄附金の包みが見えないよ」

「まア！」と言つて妻は眞蒼になつた。自分は狼狽して二の抽斗を抽き放つて中を一驗めたけれど無いものは無い。

「先刻母上さんが置手紙を書くつてお開けになりましたよ！」

「さうだ！」と自分は膝を拍つた時、頭から水を浴びたやう。唾を踏外さうとした刹那の心持。

自分は暫らく茫然として机の抽斗を眺めて居たが、我知らず涙が頬をつたうて流れる。

「餘り酷すぎる」と一語僅に洩し得たばかり、妻は涙の泉も涸れたか唯だ自分の顔を見て血の氣のない唇をわな／＼と戦はして居る。

「ぢやア母上さんが……」と言ひかけるのを自分は手を振つて打消し、

「黙つてお出で、黙つてお出で」と自分は四圍を見廻して「これから新町まで行つて来る」

「だつて貴所……」

「否や、母上さんに會つて取返して来る、餘りだ。餘りだ。親だつて此事だけは黙つて居られるものか。然しどうして其な淺ましい心を起したのだらう……」

自分は涙を止めることが出来ない。妻も遂に泣きだした。夫婦途方に暮れて實に泣くばかり。思へば母が三圓投出したのも、親子の縁を切るなど突飛なことを怒鳴つて歸つたのも皆な其心が見えすく。

「直ぐ行つて来る。親を盗賊に爲ることが出来ない。お前心配しないで待つてお出で、是非取りかへして来るから」と自分は大急ぎで支度し、手箱から亡父の寫眞を取り出して懐中した。

小春日和の日曜とて、青山の通りは人出多く、大空は澄み渡り、風は砂を立てぬほどに吹き、人々行樂に忙がしい時、不幸の男よ、自分は夢地を辿る心地で外を歩いた。自分は今も此時を思ひだすと、東京なる都會を憎む心を起さずには居られないのである。

東宮御所の横手まで来ると突然「大河君、大河君」と呼ぶ者がある。見れば齋藤といふ、これも建築委員の二人。莞爾しながら近づき、

「如何も相濟まん、僕は全然遊んで居て。寄附金は大概集まつたらうか」

寄附金といはれて我知らずどぎまぎしたが「大略集まつた」と僅に答へて直ぐ傍を向いた。

「廻る所があるなら僕廻つても可いよ」

「難有う」と言つたぎり自分が躊躇して居るので齋藤は不審さうに自分を見て居たが、

「イヤ失敬」と言つて去つて終つた。十歩を隔て、彼は振返つて見たに違ひない。自分は思はず頸を縮めた。

母に會つたら、何と切出さう。新町に近づくにつれて、これが心配でならぬ。母から反鳴に怒鳴つけられたら、如何しようなど思ふと、母の劍幕が目先に浮んで来て、足は自と立縮む。「若し如何しても返さなかつたら」の一念が起らうとする時、自分は胸を壓つけられるやうな氣がするので其一念を打消し打消し歩いた。

「大河とみ」の表札。二階建、格子戸、見た處は小官吏の住宅らしく、女姓名だけに金貸でも爲さうに見える。一度は引返して手紙で言はうかとも思つたが、何しろ一大事と、自分は思切つて格子戸を潜つた。

五月十三日

勝手の間に通つて見ると、母は長火鉢の向うに坐つて居て、可怕い顔して自分を迎へた。鐵瓶には徳利が入れてある。二階は兵士どもの飲んで居る最中。然も思つ

たより静で、妹お光の浮いた笑聲と、これに伴ふ男の太い聲は二人か三人。母はじろり自分を見たばかり一言も言はず、大きな聲で、

「お光、お銚子が出来たよ」と二階の上口を向いて呼んだ。「ハイ」とお光は下りて来て自分を見て、

「オヤ兄様」と言つたが笑ひもせず、唯だ意外といふ顔付き、其風は赤いものすくめ、如何見ても居酒屋の酌婦としか受取れない。母の可怕い顔と自分の眞面目な顔とを見比べて居たが、

「それからね母上さん、お鮎を取つて下さいつて」

「さう。幾價ばかり？」

「幾價だか。可い加減で可いでせう。それから母上さんにもお出でなさいつて」

「ああ」と母は言つて妙な眼つきでお光の顔を見たが、お光は其儘自分の方は見向きもしないで二階へ上つて了つた。自分は唯だ坐つたきり、母の何とか言ひだすのを

待つて居た。

「何しに來たの」と母は突慥貪に一言。

「先刻は失禮しました」と自分は出来るだけ氣を沈着けて左あらぬ體に言つた。

「いゝえ如何しました。色々心配をかけて濟まなかつたね。歸る時お政さんに言つて置いたことがあるが聞いてお呉れだつたかね？」と何處までも冷やかに、憎々しげに言ひながら起上がつて、「私はお客様の用で出て來るが、用があるなら待つて居てお呉れ」と臺所口から出て去つて了つた。

自分は腕組みして熟つとして居たが、我母ながら是れ實に惡婆であるつくづく情なく、あゝまで濟まして居る處を見ると、言つたところで、無益だと思ふと寧ろのこと公けの沙汰にして終はうかとの氣も起る。然し現在の母が子の抽斗から盗み出したので、假令公金であれ、子の情として訴へる理由には如何してもゆかない。訴へることは出來ず、母からは取返すことも出來ないなら、竊かに自分で辨償する

より外の手段はない。八千圓ばかりの金高から百圓を帳面で胡魔化すことは、たとひ自分に爲し得ても、直ぐ後で發覺る。又自分には左る不正なことは思つて見るだけでも身が戰へるやうだ。自分が辨償するとして其金を自分は何處から持つて來る？ 思へば思ふほど自分は如何して可いか解らなくなつて來た。これは如何なことでも母から取返す外はと、思ひ定めて居ると母は外から歸つて來て、無言で火鉢の向うに坐つたが、

「如何だね、聞いてお呉れだつたかね？」と言つて長い烟管を取上げた。

「何をですか」と自分は母の顔を見ながら言つた。

「まあ可いサ聞かなかつたのなら。然しお前の用といふのは何だね？」

自分は懷中から三圓出して火鉢の横に置き、
「これは二圓不足して居ますが、折角お政が作へて置いたのですから、取つて下さい。さう爲ませんと……」

「最早不用ないよ。だから私も二度とお前達の厄介にはなるまいし。お前達も私のやうなものは親と思はないが可い。その方がお前達のお徳ぢやアないか」

「母上さん。貴女は何故そんなことを急に仰被るのです」と自分は思はず涙を呑んだ。

「急に言つたのが悪けりや謝まります。さうだつたね、一年前位に言つたらお前達も幸福だつたのに」

何といふ皮肉の言葉ぞ。今の自分ならば決然と、

「さうですか、宜しう御座います、それぢや御言葉に従ひまして親とも思ひますまい、子とも思つて下さいますな。子とお思ひになると飛んだお恨みを受けるやうな事も起るだらうと思ひますから。就いては今日私の机の抽斗に百圓入れて置きました其が、貴女のお歸りになると同時に紛失したので御座いますが、如何がでせう、若しか反古と間違つてお袂へでもお入になりませんでしたらうか、一應お聞申しま

す」と腹から出た聲を使つて、グツと急所へ一本。

「何だと親を捕へて泥棒呼はりは聞き捨てになりませんぞ」と来る所を取つて押へ、片頬に笑味を見せて、

「これは異なこと！ 親子の縁は切れてる筈でせう。イヤお持歸りになりませんなら其れで可う御座います、右の次第を届け出でるばかりですから」と大きく出れば、いかな母でも半分落城する所だけれど、彼の時の自分に何でこんな芝居が打てよう。

悪々しい皮肉を聞かされて、グツと行きづまつて了ひ、手を拱んだまゝ暫時は頭も得あけず、涙をほろ／＼こぼして居たが、

「母上さん、それは餘りで御座います」とやう／＼に一言、母は何處までも上手、「何が餘りだね。それは此方の文句だよ。チョツ泣蟲が揃つてら。面白くもない！」自分は形無し。又も文句に塞つたが、氣を引きたて、父の寫眞を母の前に置きな

から、

「父上さんをお伴れ申してのお願いで御座います。母上さん、何卒……お返しを願ひます、それでないと私が……」と漸との思ひ言ひだした。母は直ぐ血相變へて、
「オヤそれは何の真似だえ。可笑なことをお爲だねえ。父上さんの寫真が何だといふの？」

「どうか左う被仰らずに何卒お返しを。今日お持返りの物を……」

「先刻からお前可笑なことを言ふね、私お前に何を借りたえ？」

「何にも申しませんから、何卒左う被仰らずにお返しを願ひます、それでないと私の立つ瀬がないのですから……」と言はせも果てず母は火鉢の横に膝を進めて、
「怪しからんことを言ふよ、それでは私が今日お前の所から何か持つてども歸つたと言ふのだね、聞き捨てになりませんよ」と聲を高めて乗掛る。
「ま、ま、さう大きな聲で……」と自分はまごご。

「大きな聲が如何したの、いくらでも大きな聲を出すよ。……さア今一度言つて御覽。事とすべに依ればお光も呼んで立合はすよ」といふ劍幕。此時二階の笑聲もびたと止んで、下を覗かひ聞耳をたて、居る様子。自分は狼狽へて言葉が出ない。もぢもぢして居ると臺所口で、「お待遠さま」といふ聲がした。母は、

「お光、お光お鮓が来たよ」と呼んだ。お光は下りて来る。格子が開いたと思ふと、

「今日は」と入つて来たのが一人の軍曹。自分をちよつと尻目につけて、

「御馳走様」とお光が運ぶ鮓の大皿を見ながら、ひよろついて尻餅をついて、長火鉢の横にぶつ坐つた。

「おやまあ可いお色ですこと」と母は今自分を睨みつけて居た眼に媚を浮べて、「何處で」

「ハツハツ……其は軍事上の秘密に屬します」と軍曹酒氣を吐いて、「お茶を一ぱい頂戴」

「今入れて居るぢやありませんか、性急ない兒だ」と母は湯香に充滿注いでやつて自分の居ることは、最早忘れたかのやう。二階から大聲で、

「大塚、大塚！」

「貴所下りてお出でなさいよ」と母が呼ぶ。大塚軍曹は上を向いて、

「お光さん、お光さん！」

外所は豆腐屋の賣聲高く夕暮近い往來の氣勢。とても此様子ではと自分は急に起つて歸らうとすると、母は柔和い聲で、

「最早お歸りかえ。まア可いちやアないか。そんなら又お來でよ」と軍曹の前を作ろつた。

外へ出たが直ぐ歸ることも出來ず、さりとして人に相談すべき事ではなく、身に降りかゝつた災難を今更の如く悲しんで、氣拔けた人のやうに當もなく歩いて溜池の傍まで來た。

全たく思案に暮れたが、然し何とか思案を定めなければならぬ。日は暮れかゝり夕飯時になつたけれど何を食はふとも思はない。

ふと山王臺の森に烏の群れ集まるのを見て、暫く彼所のベンチに倚つて靜かに工夫しようといふ吉橋を渡つた。

哀れ氣の毒な先生！「見すほらしけな後影」と言ひたくなる。酒、酒、何で彼の時、蕎麥屋にでも飛込んで、景氣よく一二本も倒さなかつたのだらう。

五月十四日

寂寥として人氣なき森蔭のベンチに倚つたまゝ、何時間自分は動かなかつたらう。日は全く暮れて四圍は眞暗になつたけれど、少しも氣がつかず、たゞ腕組して折り折り嘆息を洩すばかり、ひたすら物思に沈んで居たのである。

實地に就ての益に立つ考案は出ないで、斯うなると種々な空想を描いては打懐はし、又た描く。空想から空想、枝から枝が生へ、殆んど止度がない。

痴情の果から母とお光が軍曹に殺される。と一つ思ひ浮かべると、其悲劇の有様が目の先に浮んで来て、母やお光が血だらけになつて逃げ廻る様がありくと見える。今藏々と母は逃げながら自分を呼ぶ。自分は飛び込んで母を助けようとする。一人の兵が自分を捉へて動かさない……アツと思ふと此空想が破れる。

自分が百圓持つて銀行に預けに行く途中で、掏兒に取られた體にして届け出よう、さう爲ようと考へた。すると嫌疑が自分にかゝり、自分は拘引される。お政と助は拘引中に病死するなど又々淺ましい方に空想が移る。

校舎落成のこと、其落成式の光景、升屋の老人のよろこぶ顔までが目に浮んで来る。

あゝ百圓あつたらなアと思ふと、これまで金銭のことなど左まで自分を悩ましたことのないのが、今更の如く其怪しい、恐ろしい力を感じて来る。たゞ百圓、その金銭さへあれば、母も盗賊にはなるまいものを。よし母は盗みを爲した處で、自分に

其金銭が有るならば今の場合、自分等夫婦は全く助かるものをなど考へると、金銭といふ者が欲しくもあり、悪くもあり、同時に其金銭のために少しも悩まされないので、長閑かに此世を送つて居る者が羨ましくもなり、又實に憎々しくもなる。總て是等の苦々しい情は、これまで勤勉にして信用厚き小學教員、大河今藏の心には起つたことはないの、あゝ金銭が欲しいなアと思はず口に出して、熟と暗い森の奥を見つめた。

するとがやくと男女打雑じつて、ふさげながら上つて来るものがある。

「淋しいぢや有りませんか、歸りませうよ。最早こんな處つまりませんわ」といふ女の聲は確にお光。自分はぎよつとして起あがらうとしたが、直ぐ其處に近づいて来たので其儘身動きもせず様子を窺がつて居た。人々は全く此處に人あることを氣がつかぬらしい。お光が居れば母もと覗つたが女はお光一人、男は二人。「ねえ最早歸りませうよ、母上さんが待つて居るから」と甘つたるい聲。

「何故母上さんは一所に出なかつたのだらう、君知らんかね」と一人の男が言ふと、一人が、

「頭が痛むとか言つて居たつけ」といふや三人急に何か小さな聲で囁き合つたが、同時にどつと笑ひ、一人が「ヨイショヨ」と叫んで手を拍つた。

面白くない事が到る處、自分に着纏つて来る。三人が行き過ぐるや自分は舌打して起ちあがり、そこくと山を下りて表町に出た。

此上は明日中に何とか處置を着ける積り、一方には手紙で母に今一度十分訴たへて見、一方には愈々といふ最後の處置は如何するか妻とも能く相談しよう、進まぬながらも東宮御所の横手まで来て、土手について右に廻り青山の原に出た。原を横ぎる方が近いのである。

原を横ぎる時、自分は一個の手提鞆を拾つた。

五月十五日。

如何して手提鞆を拾つたか其手續までくはしく書くにも當るまい。たゞ拾つたので、足にぶつかつたから拾つたので、拾つて取上げて見ると手提鞆であつたのである。

拾ふと直ぐ、金錢！といふ一念が自分の頭にひらめいた。占たと思つた、そして何となく夢ではないかとも思つた。といふものは實は山王臺で種々の空想を描いた時、若し千兩も拾つたらなど、恥かしい事だが考へたからで、それが事實となつたらしいからである。鞆は容易く開いた。

紙幣の束が三つ、他に書類などが入つて居る。星光にすかしてこれを見た時、其時自分は全く夢ではないかと思つたゞけで、それを自分が届け出るとか、横奪することが破廉恥の極だとか、さういふことを考へることは出来なかつた。

たゞ手短に天の賜と思つた。

不思議なもので一度、良心の力を失ふと今度は反對に積極的に、不正なこと、思

ひがけぬ大罪を成るべく爲し遂げんと務めるものらしい。

自分はそつと其鞆を私宅の横に積んである材木の間に、而も巧に隠匿して、紙幣の一束を懐中して素知らぬ顔をして宅に入った。

自分の足音を聞いただけで妻は飛起きて迎へた。助を寝かし着けて其まゝ横になつて自分の歸宅を待ちあぐんで居たのである。

「如何でした」と自分の顔を見るや。

「取り返して来た！」と問はれて直ぐ。

この答も我知らず出たので、嘘を吐く氣もなく吐いたのである。

既に斯うなれば自分は全くの孤立。母の秘密を保つ身は自分自身の秘密に立籠らねばならなくなつた。

「まア如何して？」と妻のうれしさうに問ふのを苦笑で受けて、手軽く、

「能く事わけを話したら渡した」とのみ。妻は猶ほ其様子まで詳しく聴きたかつた

らしいが自分の進まぬ風を見て、別に深くも訊ねず、

「どんなに心配しましたらう。若しも渡さなかつたらと思つて取越苦勞ばかり爲てりました」と萬斤の重荷を卸したよろこび。自分は懷に片手を入れて一件を握つて居たが未だ夢の醒めきらぬ心地がして茫然として居る。

「御飯は？」

「食つて来た」

「母上さんの處で？」

「あア」

「大變お顔の色が悪う御座いますよ」と妻は自分の顔を見つめて言ふ。

「餘り心配したせらだらう」

「直ぐお寝みなさいな」

「イヤ帳簿の調査もあるからお前へ寝てお呉れ」と言つて自分は八疊の間に入り

机に向つた。然し妻は容易に寝さうもないので、

「早くお寝みといふに」

自分はこれまで、これほどの角のある言葉すら妻に向つて發したことはないのである。妻は不審さうに自分の方を見て居るやうであつたが、其中床に就いてしまつた。自分は一度特更に火鉢の傍に行つて烟草を吸つて、間の襖を閉め切つて、漸く秘密の左右を得た。

懐からそつと盗むやうにして紙幣の束を出したが、其様子は母が机の抽斗から、紙幣の紙包を出したのと同じであつたらう。

一圓紙幣で百枚！ 全然註文したやう。これを數へる手はふるへ、數へ終つて自分は洋燈の火を熟と見つめた。直ぐこれを明日銀行に預けて帳簿の表を飾らうと決定したのである。

又盗まれてはと、箆笥に納うて錠を卸すや、今度は提鞆の始末、これは妻の寢靜

まつた後ならではと一先素知らぬ顔で床に入つた。

床に入つて眼を閉ぢて居る時、この時には多少か良心の眼は醒めさうなものだが、實際はさうでなかつた。魔が自分に投げ與へた一の目的の爲めに、良心ならぬ猛烈の意志は冷やかに働いて、一に妻の鼻息を覗がつて居る。斯うして二時間経ち、十二時が打つや、蒼い顔のお政は死人のやうに横たはつて居るのを見届けて、前夜は盗賊を疑うて床を脱け出た自分は、今度は自身盗賊のやうに前夜よりも更に靜に、更に巧に、寢間を出て、縁側の戸を一分又た一分に開け、跣足で外面に首尾能く出た。

星は冴えに冴え、風は死し、秋の夜の静けさ、蟲は鳴きしきつて居る。不思議なるは自分が、此時かゝる目的の爲に外面に出ながら、外面に出て二歩三步あるいて暫時佇立んだ時この寥々として靜肅且つ壯嚴なる秋の夜の光景が身の毛もよだつまでに眼に染込んだことである。今も其時の空の美しさを忘れない。そして見ると、

善にせよ惡にせよ人の精神凝つて雑念の無い時は、外物の印象を受ける力も亦強い者と見える。

材木の間から鞆を取り出し、難なく座敷に持運んで見ると、他の二束も同じく百圓束、都合三百圓の金高が入つて居たのである。書類は請取の類。薄い帳面もあり、名刺もある。遺失した人は四谷區何町何番地日向某とて穀類の問屋を業として居る者といふことが解つた。

心の弱い者が惡事を働いた時の常として、何かの言譯を自分が作らねば承知の出來ないが如く、自分は右の遺失した人の住所姓名が解ると直ぐと見事な言譯を自分で作つて、そして殆ど一道の光明を得たかのやうに喜んだ。

一先拜借！ 一先拜借して自分の急場を救つた上で、其中に母から取返すとも、自分で工夫して金を作るとも、何とでもして取つた百圓を再び鞆に入れ、其まゝ人知れず先方に届ける。

天の賜とは實にこの事と、無上によるこび、それから二百圓を入れたまゝの鞆を隠す工夫に取りかゝつた。然し元來狭い家だから別に安全な隠し場の有らう筈がない。思案に盡きて終に自分の書類、學校の帳簿などばかり入れて置く筆筒の抽斗に入れて其上に書類を重ね、そして鍵は晝夜自分の肌身より離さないことに決定して漸つと安心した。

床に就いたと思ふと二時が打ち、がっかりして直ぐ寢入つて終つた。

五月十六日

忘れることの出来ない十月二十五日は過ぎた。翌日から自分は平時の通り授業もし改築事務も執り、表面は以前と少しも變らなかつた、母からも亦た何とも言つて來ず、自分も母に手紙で迫る事すら放棄してしひ、一日一日と無事に過ぎゆいた。然し自分は到底惡人ではない、又度胸のある男でもない。さればこそ母からも附込まれ、遂に母を盜賊にしてしひ、遂に自分までが賊になつてしまつたのである。

であるから賊になつた上で又もや悶き初めるのは當然である。總て自分のやうな男は皆な同じ行き方をするので、運命といへば運命。蛙が何時までも蛙であると同じ意味の運命。別に不思議はない。

良心とかいふ者が次第に頭を擡げて來た。そして何時も身に着けて居る鍵が氣になつて堪らなくなつて來た。

殊に自分は兒童の教員、又た倫理を受持つて居るので常に忠孝仁義を説かねばならず、善惡邪正を説かねばならず、言行一致が大切ちやと眞面目な顔で説かねばならず、其度毎に怪しく心が騒ぐ。生徒の質問の中で、折り／＼胸を刺れるやうなのがある。中には自分の秘密を知つてあんな質問をするのではあるまいかと疑ひ、思はず生徒の面を見て直ぐ我顔を負向けることもある。或日の事、十歳ばかりの兒が來て、

「校長先生、岩崎さんが私の鉛筆を拾つて返しません」と訴へて來た。拾つたとか、

失つたとか、落したとかいふ事は多數の兒童を集めて居ることゆゑ常に有り勝で怪むに足らないのが、今突然此訴へに接して、自分はドキリ胸にこたへた。

「貴所が氣をつけんから落したのだ、待てお居で、今岩崎を呼ぶから」と言つたのは、全然これまでの自分でないことで、兒童は喫驚して自分の顔を見た。

岩崎といふ十二歳になる兒童を呼んで「あなたは鉛筆を拾ひはしなかつたか」と聞くと顔を赤らめてもぢく／＼して居る。

「拾つたでせう。他人の物を拾つたら直ぐ私の所へ持て出るのが當前だのに其を自分の物に爲るといふことは盗んだも同じことで、甚だ善くないことですよ。其鉛筆を直ぐ此人にお返しなさい」と嚴かに命つけた。

そんならば何故自分は他人の靴を自分の筆筒に隠して置くのであるか。

自分は其日校務を了ると直ぐ宅に歸り、一室に蹲居で、悶き苦しんだ。自首して出ようかとも考へ、夫れとも學校の方を辭職して了はうかとも考へた。此の二を撰

ぶ上に就いて更に又苦しんだ。けれどいづれとも決心することが出来ない。自首した後での妻子のことを思ひ、辭職した後での衣食のことを思ひ、衣食のことよりも更に自分を動かしたのは折角これまでに經營して校舎の改築も美々しく落成するものを捨て終ふは如何にも残念に感じたことである。

其處で一日も早く百圓の金を作るが第一と、今度はそのみに心を砕いたが、當もなんにもない。小學教員に百圓の内職は荷が勝ち過ぎる。たゞ空想ばかりに耽つて居る。起きれば金銭、寝ても百圓。或日のことで自分は女生徒の一人を連れて郊外散歩に出た。其以前は能く生徒の三四人を伴うて散歩に出たものである。

美しき秋の日で身も軽く、少女は唱歌を歌ひながら自分より四五歩先を左も愉快さうに跳ねて行く。路は野原の薄を分けてやゝ爪先上の處まで来ると、ちらと自分の眼に映つたは草の間から現はれて居る紙包。自分は駆け寄つて拾ひあけて見ると内に百圓束が一個。自分は狼狽して懐中にねちこんだ。すると生徒が、

「先生何アに？」と寄つて来て問うた。

「何でも宜しい！」

「だつて何に？ 拜見な。よう拜見な」と自分にあまへてぶら下つた。

「可けないと言ふに！」と自分は少女を突飛ばすと、少女は仰向けに倒れかゝつたので、自分は思はずアツと叫んで之を支へようとした時、覺れば夢であつて、自分は晝飯後教員室の椅子に凭れたまゝ轉寢をして居たのであつた。

拾つた金の穴を埋めんと悶いて又夢に金銭を拾ふ。自分は醒めた後で、人間の心の淺ましさを染々と感じた。

五月十七日

妻のお政は自分の様子の變つたのに驚いて居るやうである。自分は心にこれほどの苦悶のあるのを少しも外に見せないなどいふことの出来る男でない。のみならず若し妻が此秘密を知つたなら如何しようと宅に在ては其が亦た苦勞の苦勞の一で、

妻の顔を見ても、感付いては居まいかと其眼色を讀む。絶えずキョト／＼して、そは／＼して安んじないばかりか、心に爛た處が有るから何でもないことで妻に角立つた言葉を使ふことがある。無言で一日暮すこともあり、自分の性質の特色ともいふべき温和な人なつこいところは殆ど消え失せ、自分の性質の裏ともいふべき妙にひねくれた片意地の處ばかり潮の退いた後の岩のやうに、ごつ／＼と現はれ残つたので、妻が内心驚いて居るのも決して不思議ではない。

温和で正直だけが取柄の人間の、其取柄を失なつたほど、不愉快な者はあるまい。澁を抜いた柿の腐敗りかゝつたやうなもので、とても近よることは出来ない。妻が自分を面白からず思ひ氣味悪う思ひ、そして鬱いでばかり居て、折り／＼左も氣の無ささうな嘆息を洩すのも決して無理ではない。

これを見るに就けて自分の心は愈々爛れるばかり。然し運命は永く此不幸な男女を弄ばず、自分が鞆を隠した日より一月日、十一月二十五日の夜を以つて大切と爲

て呉れた。

此夜自分は學校の用で神田までのき九時頃歸宅つて見ると、妻が助を背負つたまま火鉢の前に坐つて蒼い顔といふよりか凄い顔をして居る。そして自分が歸宅つても挨拶も爲ない。眼の邊には泣きたゞらした痕の残つて居るのが明々地と解る。

此の様子を見て自分は驚いたといふよりか懼れた。懼れたといふよりか戦慄した。「オイ如何したの？ お前如何したの？」と急ぎ込んで問うたが、妻は其凄い眼で自分をぢろりと見たばかりで一語も發しない。ふと氣が着いて見ると、箆筒を入れた押込の襖が開け放して、例の秘密の抽斗が半分開いて居た。自分は飛び起つた。「誰が開けたのだ」と叫んで抽斗に手をかけた。

「私が開けました」と妻の沈着き拂つた答。

「何故開けた。如何して開けた」

「委員會から帳簿を貸して呉れろと言つて來ましたから開けて渡しました」とぢろ

り自分の顔を見た。

「何だつて私の居ないのに渡した、え何だつて渡した。怪からんことだ」と喚きつ
つ抽斗の中を見ると鞆が出て居て而も口を開けたまゝである。

「お前これを見たな！」と叫んで「可し私にも覺悟がある、覺悟がある」と怒鳴り
ながら其儘抽斗を閉めて錠を卸し、非常な劍幕で外面に飛び出して了つた。

無我夢中で其處らを歩いて何時か青山の原に出たが矢張當もなく歩いて居る。け
れども結局、妻に秘密を知られたので、別に覺悟も何にも無いのである。たゞ喫驚
した餘りに怒鳴り、狼狽へた餘に喚いたので、外面に飛び出したのは逃げ出したる
に過ぎない。

であるから歩いて居る中に次第に心が静まつて來た。斯うなつては何もかも妻に
打明けて、この先のことも相談しよう、さうすれば却つて妻と自分との間の今の面
白くない有様から逃れ出ることも出來ると、急いで宅に歸つた。

何故そんならば鞆を拾つて歸つた時に相談しなかつた。と問ふを止めよ。大河今
藏の筆法は萬事これなのである。

歸つて見ると妻の姿が見えない。見えないも道理、助を背負つたまゝ裏の井戸の
中に死んで居た。

お政はこれまで決して自分の錠を卸して置いた處を開けるやうなことは爲なかつ
た。然し何時しか自分の舉動で筆筒の中に秘密のあることを推し、帳簿を取りに寄
こされたを幸に無理に開けたに相違ない。錠は用筆筒のを用ゐたらしい。鞆の中を
見て如何なにか驚いたらう。思ふに自分が盗んだものと信じたに違ひない。然し書
置などは見當らなかつた。

何故死んだか。誰一人この秘密を知る者はない。升屋の老人の推測は、お政の天
性憂鬱である上に病身で兎角健康勝れず、其が爲に氣がふれたに違ひないといふこ
とである。自分の秘密を知らぬものゝ推測としては之が最も當つて居るので、お政

の天性の瘦弱なことは確に幾分の原因を爲して居る。若しこれが自分の母の如きであつたなら決して自殺など爲ない。

自分は直ぐ辭表を出した。言ふまでもなく非常に止められたが遂には、此場合無理もない、強て止めるのは却つて氣の毒と、三百圓の慰勞金で放免して呉れた。

實際自分は放免して呉れると否とに關らず、自分には最早何を爲る力も無くなつて了つたのである。人々は死んだ妻よりも生き残つた自分を憐んだ。其處で三百圓

といふ類稀なる慰勞金まで支出したので、升屋の老人などの發起に成つたのである。妻子の葬儀には母と妹も來た。そして人々も當然と思ひ、二人も當然らしく舉動

つた。自分は母を見ても妹を見ても、普通の會葬者を見るのと何の變もなかつた。三百圓を受けた時は嬉しくもなく難有くもなく又厭とも思はず、其中百圓を葬儀

の經費に百圓を靴に返し、残の百圓及び家財家具を賣り拂つて金を旅費として瓢然と東京を離れて了つた。立つ前夜密に例の手提靴を四谷の持主に送り届けた。

何時自分が東京を去つたか、何處を指して出たか、何人も知らない。母にも手紙一つ出さず、建前が濟んで内部の雜作も半ば出來上つた新築校舍にすら一瞥も呉れないで夜竊かに迷ひ出たのである。

大阪に、岡山に、廣島に、西へ西へと流れて遂に此島に漂着したのが去年の春。妻子の水死後全然失神者となつて東京を出てこの方幾度自殺しようと思つたか知れない。衣食のために色々の業に従ひ、種々の人間、種々の事柄に出會ひ、雨にも打たれ風にも揉まれ、往時を想うて泣き今に當つて苦しみ、そして五年の歲月は淀み乍らも絶えず流れて遂に此今の泡の塊のやうな輕石のやうな人間を作り上げたのである。

三年前までは死んだ赤兒の泣聲がやゝもすると耳に着き、蒼白い妻の水を被つた瘻い姿が眼の先にちらついていたが、酒のお蔭で遂に追拂つて了つた。然し今でも眞夜中にふと眼を覺ますと酒も大略醒めて居て、眼の先を兒を背負つたお政がぐるぐ

廻つて遠くなり近くなり遂に暗の中に消えるやうなことが時々ある。然し別に可怖しくもない。お政も今は横顔だけ自分に見せるばかり。思ふに遠からず彼方向いて去つて了ふだらう。不思議なことには真面目にお政のことを想ふ時は決して其淺ましい姿など眼に浮ばないで現はれる時は何時も突然である。

可愛いお露に比べて見るとお政などは何でもない。母などは更に何でもない。

五月十九日

昨夜は六兵衛が来て遅くまで飲んだ。六兵衛の言ひ草が面白いでないか。

「お露を妻に持なせえ」

「持つても可いなあ」

「持つても可えなんチウことは言はさん、あれほど可愛いがつて居つて未だ文句があるのか」

「全く彼の女は可愛いよ、何故斯う可愛いだらう、ハハ、……」

「先方でも其えに言ふてら、如何で斯う先生が、可愛いのか解らんチウて」

「左やうさ、私見たやうな男の何處が可いのかお露は無暗と可愛いがつて呉れるが妙だ。これは私にも解らんよ」

「さうで無えだ、先生のやうな人は誰でも可愛がりますぞ。お露が可愛がるのは無理が無えだ」

「ハハ、何故や、何故や」

「何故チウて問はれると困るが、一口に言ふと先生は苦勞人だ。それで居て面白い處があつて優しいところがあるだ。先生と斯う飲んで居ると私でも四十年も前の情話でも爲て見たくなる、先生なら黙つて聽いて呉れさうに思はれるぜ。島中先生を好かんものは有りましねえで。お露や私を初め」

自分は如何して斯う老人の氣に入るだらう。老人といへば升屋の老人は今頃誰を相手に碁を打つて居ることやら。

六兵衛は又斯う言つた。

「先生は一度妻を持つたことが有るに違ひなからう」

「如何して知れる」

「如何してチウて、それは老人の眼には知れる」

「全く有つたよ、然し餘程以前に死んで了つた」

「ハアそれは氣の毒なことをなされました」

「けれどもね六兵衛さん、死んだ妻はお露ほど可愛くなかつたよ、何でも無かつたよ」

「それは不實だ。先生もなか／＼浮氣だの、新らしいのが可えだ」と言つて老人は笑つた。

自分も唯だ笑つて答へなかつた。不實か浮氣か、そんなことは知らない。お露は可愛い。お政は氣の毒。

笑つた。

酒の上の管ではないが、夫婦といふものは大して難有いものではない。別してお政なんぞ、あれは丹屋の老人が呉れたので、呉れたから貰つたので、貰つたから子が出來たのだ。

母もさうだ、自分を生だから自分の母だ、母だから自分を育てたのだ。そこで親子の情があれば眞實の親子であるが、無ければ他人だ。百圓盗んで置きながら親子の縁を切るなど文句が面白い。初から他人なのだ。

自分には極めて情が薄かつた。

明日は日曜。同勢四五人舟で押出す約束であるが、お露も連れこみたいものだ。

大河今藏の日記は以上にて終りぬ。彼は翌日誤つて舟より落ち遂に水死せるなり。醉に任せ起つて踊り居たるに突然水の面を見入りつ、お政々と連呼して其まゝ顛落せるなりといふ。

……酒中日記……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

*

*

*

*

*

記者去年歸省して舊友の小學校教員に會ふ。此日記は彼の手に秘藏され居たるなり。馬島に哀れなる少女あり、大河の死後四月にして兒を生む。これ大河が片身、少女はお露なりとぞ。

猶ほ友の語る處に依れば、お露は美人ならねども其眼に人を動かす力あふれ、小柄なれども強健なる體格を具へ、島の若者多くは心ひそかに之を得んものと互に争ひ居たるを、一度大河に少女の心移るや、皆大河のためにこれを祝して敢て嫉むもの無かりしといふ。

お露は兒のために生き、兒は島人の何人にも抱かれ、大河は其望む處を達して島の奥、森蔭暗き墓場に眠るを得たり。

記者思ふに不幸なる大河の日記に依りて大河の總を知ること能はず、何となれば日記は則ち大河自身が書き、而して其日記には彼が馬島に於ける生活を多く誌さざればなり。故に余輩は彼を知るに於て、彼の日記を通して彼の過去を知るは勿論、馬島に於ける彼が日常をも推測せざる可らず。

記者は彼を指して不幸なる男よといふのみ、其他を言ふに忍びず、彼も亦た自己を憐れみて、やゝもすれば曰く、あゝ不幸なる男よと。

酒中日記とは大河自から題したるなり。題して酒中日記といふ既に悲惨なり、況んや實際彼の筆を採る必ず酔後に於てせるをや。此日記を讀むに當つて特に記憶すべきは實に又この事實なり。

お政は兒を負うて彼に先ち、お露は彼に残されて兒を負ふ。何れか不幸、何か悲惨。

戀を戀する人

秋の初の空は一片の雲もなく晴れて佳い景色である、青年二人は日光の直射を松の大木の蔭によけて、山芝の上に寝轉んで、一人は遠く相模灘を眺め、一人は讀書して居る。場所は伊豆と相模の國境にある某温泉である。

溪流の音が遠く聞ゆるけれど、二人の耳には入らない、甲の心は書中に奪はれ、乙は何事か深く思考に沈んで居る。

暫くすると、甲は書籍を草の上に投げ出して、伸をして、大欠をして、

「最早宿へ歸らうか。」

「うん」と應へたぎり、乙は見向もしない。すると甲は巻煙草を出して、

「オイ君、燐寸を貸せ。」

「うん」と出してやる、そして自分も煙草を出して、甲乙共、のどかに喫ひだした。

「君は如何思ふ、縁とは何ぞやと言はれたら？」

と思考に沈んで居た乙が靜かに問うた。

「左様サね、僕は忘れて了つた。……何とか言つたツけ。」と甲は書籍を拾ひ上げて、

何氣なく答へる。乙は其を横目で見て、

「まさか水力電氣論の中には説明してあるまいよ。」

「無いとも限らん。」

「あるなら、其内搜して置いて呉れ給へ。」

「よろしい。」

甲乙は無言で煙草を喫つて居る。甲は書籍を拮搦つて故意と何か搜して居る風を見せて居たが、

「有つたよ。」

「ふん。」

「眞實に有つたよ。」

「教へて呉れ給へ。」

「實はやツと思ひ出したのだ。圓とは……何だッたけナ……圓とは無限に多數なる正多角形とか何とか言ッたッけ。」と、眞面目である。

「馬鹿！」

「何で？」

「大馬鹿！」

「君よりは少しばかり利口な積りで居たが。」

「僕の聞いたのは其圓ぢやアないんだ。縁だ。」

「だから圓だらう。」

「イヤこれは僕が悪かつた、君に向つて發すべき問ではなかつたかも知れない。まあ靜に聞き給へ、僕の問うたのは……」

「最も活動する自然力を支配する人間は最も冷靜だから安心し給へ。」

「豪いよ。」

「勿論！　そこで君の謂ふ所のエンとは？」

「歸らうぢやアないか。歸宿つて夕飯の時、ゆるく論ずる事にしよう。」

「サア歸らう！」と甲は水力電氣論を懷中に押こんだ。

かくて仲善き甲乙の青年は、名ばかり公園の丘を下りて温泉宿へ歸る。日は西に傾いて溪の東の山々は目映ゆきばかり輝いて居る。まだ炎熱いので甲乙は閉口しながら溪流に沿うた道を上流の方へのほると、右側の函根細工を賣る店先に一人の男が往來を背にして腰をかけ、品物を手にして店の女主人と談話して居るのを見た。見て行き過ぎると、甲が、

「今あの店に居たのは大友君ぢやアなかつたか？」

「僕も、そんな氣がした。」

「後姿が似て居た、確に大友だ。」

「大友なら宿は大東館だ。」

「何故？」

「僕が大東館を撰んだのは大友君からはなしを聞いたのだもの。」

「それは面白い。」

「きつと面白い。」

と話しながら石の門を入ると、庭樹の間から見える縁先に十四五の少女が立つて居て、甲乙の姿を見るや、

「神崎様！ 朝田様！ 一寸来て御覽なさいよ。面白い物がありますから。早く来て御覽なさいよ！」と呼ぶ。

「又た蛇が蛙を呑むのぢやアありませんか。」と「水力電気論」を懐にして神崎乙彦が笑ひながら庭樹を右に左に避けて縁先の方へ廻る。少女の室の隣室が二人の室なの

である。朝田は立關口へ廻る。

「ほら妙なものでせう。」と少女の指さす方を見ても別に何も見當らない。神崎はきよろきよろしながら、

「春子さん、何物も無いぢやアありませんか。」

「ほら其處に妙な物が。……貴様お眼が悪いのねエ。」

「何物です。」

「百日紅の根の丸い石があるでせう。」

「其れが如何したのです。」

「妙でせう。」

「何故でせう。」といひながら新工學士神崎は石を拾つて不思議さうに眺める。朝田は此時既に座敷から廻つて縁先に來た。

「オイ朝田、春子さんが此石を妙だらうと言ふが君は何と思ふ。」

「頗る妙と思ふねエ。」

「ね朝田様、妙でせう。」と少女はにこ〜。

「さうですとも、大に妙です。神崎工學士、君は昨夕酔拂つて春子様をつかまへて、お得意の講義をして居たが忘れたか。」

「ねエ朝田様！ その時、神崎様が巻煙草の灰を掌にのせて、此灰が貴女には妙と見えませんかと聞くから、私は何でもないといふと、だから貴女は駄目だ、凡そ宇宙の物、森羅万象、妙ならざるはなく、石も木も此灰とても面白からざるはなし、それを左様思はないのは科學の神に歸依しないからだ、とか何とか、難しい事をべら〜何時までも言ふんですもの。私、眠くなつて了つたわ、だからアーメンと言つたら、貴下怒つちやつたぢやアありませんか。ねエ朝田様。」

「さうですとも、だから其石は頗る妙、大に面白しと言ふんですねエ。」

「神崎様、昨夕の敵打ちよ！」

「たしかに打たれました。けれど春子様、朝田は何時も靜肅で酒も何にも呑まないで、少しも理窟を申しませんからお互に幸福ですよ。」

「否、お二人とも随分理窟ばかり言ふわ。毎晩々々、酔つては討論會を初めますわ！」

甲乙は噴飯して、申し合したやうに湯衣に着かへて浴場に逃げだして了つた。

少女は神崎の捨てた石を拾つて、百日紅の樹に寄りかゝつて、西の山の端に沈む夕日を眺めながら小聲で唱歌をうたつて居る。

又た少女の室では父と思しき品格よき四十二三の紳士が、此宿の若主人を相手に圍碁に夢中で、石事件の騒などは一切知らないでパチノ〜やつて御座る。そして神崎、朝田の二人が浴室へ行くと間もなく十八九の愛嬌のある娘が圍碁の室に来て、「兄家さん、小田原の姉様が参りました。」と淑かに通ずる。これを聞いて若主人は顔を上げて、やゝ不安の色で、

「よろしい、今ゆく。」

「急用なら中止しませう。」と紳士は一寸手を休める。

「なに關ひません、急用といふ程の事ぢやアないんです。」と若主人は直ぐ盤を見つめて、石を下しつゝ、

「今の妹の姉にお正といふのが居たのを御存じでせう。」

「さうでした、覚えて居ます。可愛らしい佳い娘さんでした。」と紳士も打ちながら答へる。

「そのお正が此春國府津へ嫁いたのです。」

「それはお目出度い。」

「ところが餘りお目出度くないんでしてな。」

「それは又？」

「どういふものか折合が善くありませんで。」

「それは善くない。」

「それで今日來たのも、又何か持上つたのでせう。」

「それでは早く行く方が可い……」

「なに、どうせ二晩三晩は泊るのですから急がないでも可いのです。」と平氣で盤に向つて居るので、紳士も其氣になり何時しかお正の問題は忘れて了つて居る。

浴室では神崎、朝田の二人が、今夜の討論會は大友が加はるので一倍、春子さんを驚かすだらうと語り合つて楽しんで居た。

二

箱根細工の店では大友が種々の談話の末、漸とお正の事に及んで、

「それぢやア此二月に嫁入したのだね、随分遅い方だね。」

「まア遅いはうでせうね。貴方は何時ごろお正さんを御存知で御座います？」

「左様サ、お正さんが二十位の時だらう、四年前の事だ、だからお正さんは二十四

の春嫁いたといふものだ。」

「全く左様で御座います。」と女主人は言つて、急に聲をひそめて「處が可憐さうに餘り面白く行かないとか大ぶん紛糾があるやうで御座います。お正さんは二十四でも未だ若い盛で御座いますが、旦那は五十幾歳とかで、二度目ださうで御座いますから無理も御座いませんよ。」

大友は心に頗る驚いたが別に顔色も變へず、「それは氣の毒だ」と言ひさま直ぐ起ち上つて、「大きにお邪魔をした。」とばかり、店を出た。

大友の心には此二三年來、何卒此世に於いて今一度、お正さんに會ひたいものだといふ一念が蟠まつて居たのである、此女のことを思ふと、悲しい、懐しい情感に堪へ得ないことがある。そして此情感に耽る時は人間の淺猿しさから我知らず脱れ出づるやうな心持になる。あだかも野邊にさすらひて秋の月のさやかに照るをしみじみと眺め入る心持と或は似通へるか。さりとして矢も楯もたまらずお正の許に飛ん

で行くやうな激越の情は起らないのであつた。

たゞ會ひたい。此世で今一度會ひたい。縁あらば、せめて一度此世で會ひたい。とのみ大友は思ひつゞけて居た。何ぞ其心根の哀しきや。會ひ度くば幾度にも逢へる、又た逢へる筈の情縁あらば如斯な哀しい情感は起らぬものである。別れたる、離れたる親子、兄弟、夫婦朋友、戀人の仲間の逢ひたき情とは全然で異つて居る、「縁あらば此世で今一度會ひたい」との願ひの深い哀は常に大友の心に潜んで居たのである。

或夜大友は二三の友と會食して酒のやゝ廻つた時、斯ういふ事を言つたことがある。

「僕の知つて居る女でお正さんといふのががあるが、容貌は十人並で、たゞ愛嬌のある女といふに過ぎないけれど、如何にも柔和な、どちらかと言へば今少しはハキ／＼してと思はるゝ程の性分、何處までも正直な、同情の深さうな娘である。肉づき

までがふつくりして、温かさうに思はれたが、若し、僕に女房を世話して呉れる者があるなら彼様のが欲しいものだ。」

それならば大友はお正さんに戀ひ焦がれて居たかといふと、全然、左様でない。ただ大友が其時、一寸左様思つた丈けである。

四年前、やはり秋の初めであつた。大友が此温泉場に來て大東館に宿つたのは。避暑の客が大方歸つたので居残の者は我儘放題、女中の手もすいたので或夕、大友は宿の娘のお正を占領して飲んで居たが、初めは戯談のほれたはれた問題が、次第に本物になつて、大友は遂に其時から三年前の失戀談をはじめた。女中なら「御馳走様」位でお止めになるところが、お正は本氣で聞いて居る、大友は無論眞剣に話して居る。

「それほどまでに二人が艱難辛苦してやツと結婚して、一緒になつたかと思ふと間もなく、ボカンと僕を捨て、逃げ出して了つたのです。」

「まア酷いこと！それで貴方は如何なさいました。」とお正の眼は最早潤んで居る。「女に捨てられる男は意氣地なしだとの、今では、人の噂も理會りますか、其時の僕は左まで世にすれて居なかつたのです。たゞ夢中です、身も世もあらぬ悲嘆さを堪へ忍びながら如何にもして前の通りに爲たいと、恥も外聞もかまはず、出来るだけのことをしたものです。」

「それで駄目なんですか。」

「無論です。」

「まア。」とお正は眼に涙を一ぱい含ませて居る。

「僕が夢中になる丈け、先方は益々冷て了ふ。終ひには僕を見るもイヤだといふ風になつたのです。」そして大友は種々と詳細い談話をして、自分が如何ほど其女から侮辱せられたかを語つた。そして彼自身も今更想ひ起して感慨に堪へぬ様であつた。「さぞ憎らしかつたでせうねエ。」

「否、憎らしいと其時思ふことが出来るなら左まで苦しくは無いのです。たゞ悲嘆かつたのです。」

お正の兩頬には何時しか涙が靜かに流れて居る。

「今は如何なに思つてお出で、す。」とお正は聲をふるはして聞いた。

「今ですか、今でも憎いとは思つて居ません。けれどもねお正さん、僕が若し彼様な不幸に會はなかつたら、今の僕では無かつたらうと思ふと、残念で堪らないので

す。今日が日まで三年ばかりの大事の月日が、殆ど煙のやうに過つて了りました。

僕の心は壞れて了つたのですからねエ。」と大友は眼を瞬いた。お正ははんけちを眼にあて、頭を垂れて了つた。

「まア可いサ、酒でも飲みませう。」と大友は酌を促して、黙つて飲んで居ると、隣室に居る川村といふ富豪の子息が、酔つた勢で散歩に出かけやうと誘ふので、大友はお正を連れ、川村は女中三人ばかりを引率して宿を出た。川村の組は勝手にふざ

け散らして先へ行く、大友とお正は相並んで靜かに歩む、夜は冷々として既に膚寒く覺ゆる程の季節ゆる、溪流に沿ふ町はひつそりとして客らしき者の影さへ見えで、月は冴えに冴えて岩に激する流は雪のやうである。

大友とお正は何時しか寄添うて歩みながらも言葉一つ交さないで居たが、川村の連中が遠く離れて森の彼方で聲がする頃になると、

「眞實に貴下はお可愛さうですねエ。」と、突然お正は頭を垂れたまゝ言つた。

「お正さん、お正さん？」

「ハイ」とお正は顔を上げた。双涙を含める蒼ざめた顔を月はまともに照らす。

「僕はね、若し彼女がお正さんのやうに柔和い人であつたら、こんな不幸な男にならなかつたと思ひます。」

「そんな事は、」とお正はうつむいた。そして二人は人家から離れた、礫の多い凸凹道を靜かに歩いて居る。

「否、僕は眞實に左様思ひます、何故彼女がお正さんと同じ人で無かつたかと思ひます。」

お正は、そつと大友の顔を見上げた。大友は月影に霞む流の末を見つめて居た。それから二人は暫く無言で歩いて居ると、先へ行つた川村の連中が、がやくと騒ぎながら歸つて来たので、一緒に連れ立つて宿に歸つた。其後三四日大友は滯留して居たけれど、お正には最早、彼の事に就ては一言も言はず、お給仕ごとに楽しく四方山の話をして、大友は歸京したのである。

爾來、四年、大友の戀の傷は癒え、戀人の姿は彼の心から消え去せて了つたけれども、お正には如何かして今一度、縁あらば會ひたいものだと思つて居たのである。そして来て見ると、兼て期したる事とは言へ、さてお正は既に居ないので、大に失望した上に、お正の身の上の不幸を箱根細工の店で聞かされたので、不快に堪へず、流を沂つて溪の奥まで一人で散歩して見たが少しも面白くない、氣は塞ぐ一方

であるから、宿に歸つて、少し夕飯には時刻が早い、酒を命じた。

三

大友は、「用があるなら呼ぶから。」と女中をしりぞけて獨酌で種々の事を考へながら淋しく飲んで居ると、宿の娘が「これをお客様が」と差出したのは封紙のない手紙である、大友は不審に思ひ、開き見ると、

前略我等兩人當所に於て君を待つこと久しとは申兼候へ共、本日御投宿と聞いて愉快に堪へず、女中に命じて膳部を弊室に御運搬の上、大に語り度く願候

神崎
朝田

大友様

とあるので、驚いた。何時ごろから来て居るのだと聞くと、娘は一週間ばかり前か

らと云ふ。直ぐ次の返事を書いて持たしてやつた。

お手紙を見て驚喜仕候、兩君の室は隣室の客を驚かす恐あり、小生の室は御覽の如く獨立の離島に候間、徹宵快談するもさまたけず、是非此方へ御出向き下され度待上候

すると二人が、やつて來た。

「君は何處を遍歴つて此處へ來た？」と朝田が座に着くや着かぬに聞く。

「イヤ、何處も遍歴らない、東京から直きに來た。」

「そこで此夏は？」

「東京に居た。」

「何をして？」

「遊んで。」

「そいつは下さらなかつたな。」

「全くサ、そして君等は如何だ。」

「伊豆の温泉めぐりを爲た。」

「面白い事が有つたか。」

「随分有つた。然し同伴者が同伴者だからね。」と神崎の方を向く。神崎はたゞ「フン」と笑つたばかり、盃をあけて、ちよつと中の模様を見て、ぐびり飲んだ。朝田もお構なく、

「現に今日も、斯うだ、僕が縁とは何ぞやとの間に何と答へたものだらうと聞くと、先生、この圓と心得て、」と疊の上に指先で○を書き、

「圓の定義を平氣な顔で暗誦したものだ、君、斯ういふ先生と約一ヶ月半も僕は膳を並べて酒を呑んだのだから堪らない。」

「それはお互サ」と神崎少しも驚かない。

「然し相かはらず議論は激しかつたらう。」と大友はにこ／＼して問うた。

「やつたとも。」と朝田。

「朝田の愚論は僕も少々聞き飽きた。」と神崎の一言に朝田は「フ、ン」と笑つたばかり。これだから二人が喧嘩を爲さないで一ヶ月以上も旅行が出来たのだと大友は思つた。

三人とも愉快に談じ酒も相當に利いて十一時に及ぶと、朝田、神崎は自室に引上げた、大友は頭を冷す積で外に出た。月は中天に昇つて居る。恰度前年お正と共に散歩した晩と同じである。然し前年の場所へ行くは却つて思出の種と避けて溪の上へのほりながら、途々「縁」に就て朝田が説いた處を考へた、「縁」は實に「哀」であると染み染み感じた。

そして構造の大きな農家らしき家の前に來ると庭先で「左様なら」と挨拶して此方へ來る女がある、其聲が如何にもお正に似て居るやうに思はれ、つい立どまつて居ると、往來へ出て月の光を正面に受けた顔は確かにお正である。

「お正さん。」大友は思はず呼んだ。

「大友さんでせう。」と意外にもお正は平氣で傍へ來たので、

「貴女は僕が來て居るの知つて居たのですか。」と驚いて問うた。

「も少し上の方へのほりながらお話しませうか。」とお正は小聲にて言ふ。

「貴女さへかまはなければ。」

「私はちつとも、かまひませんの。」

それではと前年の如く寄添うて、溪をのほる。

「眞實に妙な御縁なのですよ、私は今日、身の上に就て兄に相談があるので、突然に參りますと、妹が小聲で大友さんが來宿するといふのでせう、……………」

「それぢやア貴女は僕より一汽車後で來たのだ。」

「さうなの。それで今夜はごたくして居るから明日お目にかゝる積で居ましたの。」

さて大友はお正に會つたけれど、そして忘れ得ぬ前年の夜と全く同じな景色に包まれて同じやうに寄添うて歩るきながらも、別に言ふべき事がない。却てお正は種々の事を話しかける。

「貴下いつかの晩も此様でしたね。」

「貴下彼晩のことを憶えて入らつしやるか？」

「憶えて居ますとも。」

「私はね、何にもかも全然憶えて居て、貴下の被仰つた事も皆な覚えて居ますの。」

「僕もさうです。そして今一度貴女に會ひたいとばかり思つて居ました。今度も實は其積で來たのです。無論何處へ嫁いて居て會へる筈は無からうとは思ひましたが、それでも若しかと思ひましてね……」

「私も今一度で可いから是非お目にかゝりたいと思ひつゞけては、彼晩の事を思ひ出して何度泣いたか知れませんが、……ほんとにお嫁になど行かないで兄さんや姉さん

んを手傳つた方が如何なにか可かつたか今では眞實に後悔して居ますのよ。」

大友は初めてお正が自分を戀ひして居たのを知つた、そして自分がお正に會ひたいと思ふのと、お正が自分に會ひたいと願ふのとは意味が違ふと感じた。自分はお正の戀人であるがお正は自分の戀人でない、たゞ自分の戀に深い同情を寄せて泣いて呉れた柔しさを戀ひしたのだ。そして自分は戀を戀する人に過ぎないと知つた。實に大友はお正の戀を知ると同時に自分のお正に對する情の意味を初めて自覺したのである。

暫時無言で二人は歩いて居たが、大友は斯く感じると、言ひ難き哀情が胸を衝いて來る。

「然しね、お正さん、貴女も一旦嫁いだからには惑はないで一生を送つた方が宜しいと僕は思ひます。凡て女の惑からいろんな混雜や悲嘆が出て來るものです。現に僕の事でも彼女が惑うたからでせう……」

お正はうつ向いたまゝ無言。

「それで今夜は運よくお互に會ふことが出来ましたが、最早二度とは會へませんか
ら言ひます、貴女も身體を大切に於て幾久しく無事でお暮しになるやうに……」

お正は袖を眼に當て、

「何故會へないのでせうか。」

「會へないものと思つた方が可いだらうと思ひます。」

「それでは貴下は最早會ひたいとは思つては下さらないのですか。」

「決して其様ことはありません。僕はこれまでも彼女に會ひたいなど夢にも思はな
くなりませんが、貴女には會ひたいと思つて居ましたから……」

「それではお目にかゝる事が出来る縁を待ちませうね。」

「ほんとに、さうです。貴女も今言つたやうに、くよくよく爲ないで、身體を大切に
お暮しなさい。」

「難有う御座います。」

夜の更くるを恐れて二人は後へ返し、溪流に渡せる小橋の袂まで歸つて來ると橋
の向うから男女の連が來る。そして橋の中程ですれちがつた。男は三十五六の若紳
士、女は底髮の二十二三としか見えざる若づくり、大友は一目見て非常に驚いた。
足早に橋を渡つた。

「お正さんく。彼れです。彼の女です！」

「まア、彼の人ですか！」とお正も吃驚して見送る。

「如何して又、こんな處で會つたらう。彼女も必定僕と氣が着いたに違ひない。お
正さん僕は明日朝立ちますよ。」

「まア如何して？」

「若し彼女が大東館にでも宿泊つて居たら、僕と白晝出會はすかも知れない、僕は
見るのも嫌です。往來で會ふかも知れませんが如斯な狭い所ですから。」

……癪を癪する人……

「會つても知らん顔して居れば可いぢやア御座いませんか。」

「不愉快です。殊に今度貴女に會つた場合、猶ほ不快です。」

翌朝早く大友は大東館を立つた。大友ばかりでなく神崎も朝田も一緒である。見送り人の中にはお正も春子さんも居た。

正直者

見たところ成程私は正直な人物らしく思はれるでせう。たゞ正直なばかりでなく、人並變つた偏物らしくも見えるでせう。

けれども私は決して正直な者ではないのです。なまじ正直者と他から思はれたばかりに容易ならぬ罪を今日まで成し遂げて生涯の半を送つて來たのであります。

鏡に對へば私にも直ぐ私自身の容貌が能く解ります。私の顔には角といふものはありません。冴えた色がありません。眉毛が濃く、頬鬚が多く、鼻が丸く、唇が厚く、そして何處かに間の脱けたところがあります。笑へば皆に深い皺が寄るのです。

それが——淺ましいことには——言ひ知れぬ愛嬌になつて居ます。それに私は随分大きな方ですから、何時も着物は袴の足りないのを着て太い手が武骨に出て居るので一見素朴らしくも見られるのであります。身體の小さい人はチヨコマカと才はじけ

て、身體の重味のないばかりか心の重味までが無いやうに他から推れるものですが、身體の太い男は、馬鹿でも悪黨でも横着者でも先づ他から重く思はれるのが普通で、私も其例には洩れなかつたのであります。

口数多ければ未だしも、私は口無調法でした、けれども滔々と饒舌れないかといふに左様でもないのです。時に由つては随分人並の辯舌は振ふのであります。唯々、

(これが天稟でせう)大概の場合他人の言ふことのみ聞いて、例の皆の皺を見せるばかり。それで居て他人の言ふことは何もかも能く解り、推測もする、邪推もする、裏表も知つて居るのであります。

私のやうな男は世間に随分見受けますが、皆な其身の置かれた境遇、例へば昔でいふ士農工商の境遇に居て、それぐ面白芝居を打つて居ます。たゞ此種の人

(私も其一人)滅多に其境遇から外には飛び出し得ないものであります、其飛び出し得ないところに彼の重味も着いて、其打つ芝居が愈々巧く當るのであります。

……正直者……

……正直者……

……正直者……

ところで私の境遇の低いのと、それから私には或特別の天性があるのとで、私の演じて来た芝居が誠に淺猿しい、醜いものとなつたのであります、或特別の天性といふのは、今こゝで言はないでも、後で段々に解つて来るでせう。

しかし誤解をふせぐ爲めに一言します、私は決して世の中のこと悉く芝居と同じだといふ説を持つて居るのではありません。たゞ前に説きました如き、私共のやうな性質を持つて居る連中は、何處かに冷いところがあつて、身に迫つて来た事柄をも、靜に傍觀することが出来るのです、それですから極く眞面目な、誠實な顔をしてながら、而も克く巧んで物事を處置することが出来ます。既に巧んで處置するといへば、其處に芝居らしい趣があるではありませんか。

さて、これから私の身の上を二ツ二ツお話いたします。

私の父は古い英學者で永年中學校の教師を務めて居ましたが、同窓の友ともいふべき人々は皆其の學び得し新智識を利用して社會樞要の地位を占めましたけれど、

私の父のみは最初語學の教師となつたが、終に其職以外に何事も爲し得ず、私の十二の春まで一教師として此世を送り、變則英語の專賣者になつて生涯を終へました。

父の死と共に私は全くの孤兒となりました、といふものは母の顔を私は少も知りません。父は私の母の亡くなつて後は、始終妾同様なものをおいたばかりで、それも七人八人ではなく、私の記憶に存つて居るばかりでも四人ばかりあり、終に眞の家庭らしいものは作らなかつたのです。

何故父は、さる不倫なことをして居たかといふ理由は知りませんが、けれども父の子なる私の性質から推測しますると、父は唯だ肉慾の満足を得るばかりで女を置くことを知つて、家庭などのことには全然心を動かさなかつたのだらうと思はれます。

私の知つて居る三四人の妾に就いても父は情愛を以てこれに遇した様子は少しもありませんでした。私は少し許り酒を呑みますが父は決して酒杯を手にしたことな

く、又た私よりも更に無口で、家に居てもたゞ茫然と火鉢に對つて烟草を吹かして居るか、それでなくば机に向つて英書を繙いて居るかで家中は常に寂寞として居ました。

それですから女中兼帯の妾が來ても初の中は父や私を對手に饒舌りますが、一月二月と經つ中に何時しかこれも無言の業に堪へ得るやうになつて了ふのです。

冷寒い空氣と暗鬱な影とが常に立單めて居る中に、私も亦た父と同じやうな性質で、別に悲しいとも辛苦いとも思はず生育しました。それですから私は父の在る前から既に孤兒同然であつたのであります。

兄もなく弟もなく、頼にすべき親戚もなく、十二歳の少年は父の死と共に父の友なる某中學校の國語の教師の家に引取られました。教師の姓は加藤。其加藤の言葉に依れば私を引取つたのは父が生前の依頼であつたさうです。

加藤が私を親切にして呉れたか如何だかといふことは別に言ふほどのこともあり

ません。普通の學僕同様なことを仕ながら英語の夜學校に通ひ、國語の方は直接に加藤から少しづつ、學んで居ましたが、孤獨には慣れて居ますから私の心持では加藤の待遇に就いて格別の感じを持ちませんでした。

「お前の父上は至極好人物であつたが、惜いことに活動といふものを仕ないで退居でばかり居なすつたから、折角の利器を懐きながら老朽ちて了はれた。お前は一つウンと世の中に飛び出して大に活動しなければ可かん、學問が如何あつても活動といふことが無ければ今の世に用ゐられんぢや」加藤は其細い眼を光らして自分に向ひ此言葉を聞かしたことは幾度であるか知れませんが、

なるほど左様だ、加藤の叔父さんの言はれる通りだと私も思はぬではないが、天稟は争はれぬもので、重苦しい性質は言葉の彈力や、理想の積料では容易に動きまゐりませんでした。所謂、なるがまゝに移つてゆく其境遇に處して唯だ其日々をじつくりと暮す、それが私の運命であつたのです。

十九の秋、加藤は病んで床に就き、二十日ばかりで遂に此世を去りました。六十
七歳ですから先づ以て長命の方でせう。死ぬ少し前に私を枕許に喚んで、斯ういひ
ました。

「お前の父上から私が受取つた金は四百圓足らずであつた、家財や書籍を賣つて二
百圓ばかり、都合六百圓に三十圓不足する金を私がお前と一しよに預かつたのぢや。
父上の頼みは此金を食料に、金の續く間お前を世話して呉れとのことであつた、そ
れでお前の十二の時から今年までザツと八年の間で、預つた金は大概無くなつて了
つたが未だ百圓ばかり残つて居る勘定になる、それを今お前に此處でお返しするか
ら、お前は私の死んだ後、この金を持つて獨立して見るが可からうと私は思ふのぢ
や」

加藤の言ふことは私に能く飲みこめました。要之、加藤の死んだ後、私は百圓の
金を持つて、加藤の家を出てゆき、如何にもして獨立ちで世の中を渡つて行くこと
になつたのであります。それでも加藤が私に百圓の金を渡すといふのが今から思ふ
と不思議で、實をいふと、あの時加藤から一文なしで直ぐ立退きを命ぜられても私
は文句なしに其言葉に従ひ、文句のないばかりか、當然のこと、考へて立退いたの
であらうと思はれます。ですから百圓受取つた時は、眞實私はうれしう思ひました。
加藤の死んでから一週間経つて、私は住みなれた家を、別に大して悲しいとも思は
ず、出てゆきました。

落着く先は麴町區某小學校の直ぐ近所にある下宿屋の一室です。私は加藤生前の
世話で小學校の英語の教師になりましたので、月給は十圓、下宿料が七圓ですから
差當り食ふには困りませんでした。

其頃の私は今よりも丸顔の、可愛い顔つきをして居ました上に、言葉の少ない、
それで愛嬌もある少年でしたから、校長初め同僚からも可愛がられ、下宿屋のおか
みさんからも「澤村さんく」とちやばやされました。大概のものは斯うなると一

寸得意になる者です。まして年からいふと生意氣盛ですから、つい言はないでも可い悪まれ口をたゞいたり、怒らんでも可いことに顔を赤くして聲を高めて見たり、かりそめにも先生を鼻の先にぶら下けて居る者ですが、私に限つてそれがありません。何時も同じやうな顔をして下宿を出て、同じやうな風で歸つて来る、袴を脱ぐと直ぐ疊んで納ふ、見たところ實體な感心な青年であつたに違ひありません。

下宿屋のかみさんといふのは其ころ四十四五でしたらう、年頃の娘と十四になる男の子と三人暮の後家の内職で、間数は僅に四個、それも立派な部屋は一間もないのです。娘はおかみさんに似て細面の、色の蒼白い、病身らしい子でしたが、眼は黒眼勝のはつきりとしたので、先づ此子の特長とでもいひませうか、其眼で熟と人の顔を見て、暫くして微かにほゝるむのが此娘の癖でした。名はおしんですから、私どもはしんちゃんと呼んで居たのです。

おかみさんは輕薄な御世辭も言ひませんが、下宿人の誰にも親切であつたやうです。別ても私を可愛がつてくれて二月三月居る中には親子かと思はれるまでにしてくれました。けれど私は情ないことに、親子の情といふものを知らない人間ですから、うれしいとは思ひましたが、たいして感動もしなかつたのです。

人の心ほど奇態なものはありません。それほどの親切に對して私が感動もせず、初めて下宿に來た時と少も變らぬ態度を保つて居ましたので、おかみさんの心は益々動き、愈々私に感心して、私をば又とない正直な、温順な謙遜な青年だと全然信仰して了つたのです。

娘のおしんも同じことで、母のやうに口にくそ餘り出して言ひませんが、私を信仰する熱度は母と少も變らぬことが其舉動で私には能く解つて居ました。

今から思ひますと、眞實に正直な、温順な、謙遜な人といふは無論、此私ではなく、此娘でありました。私はおしんをば完全無缺の人間とは思ひませんが、少くとも女として彼の位なのは餘り類がないと今では信じて居るのであります。ひとつは

健康のすぐれないためでもありませんが、おしんの起居振舞から言葉から、こゝろばせまでが如何にも穏かで、おつとりとした中に情深いやうなところがありました。年は二つ違で、先づ同年輩ですが、私は年よりもふけて見える方、おしんは子供らしいところがあつて、二ツも若く思はれるはうでしたから、おしんの私に對する心持は母と同じながら、其うちに何處かあまへるやうな風もあつたのであります。私が一人部屋にすつこんで居ると能く遊びに参りまして色々な話をして事によると夜を更すこともありましたが、そんなこんな例を申せば或晩のことです。

「あなたの親父はどんな方で御座いました」とおしんが訊きましたから、

「どんな人ツて別に言ひやうもないが、大變烟草が好きでした」

「きつと好い方でしたらうねえ」

「何故して？」

「だつて貴方の親父ですもの」

又或時のことです、おしんは私が謝絶のを無理に私の衣服を疊みながら、

「貴方は他から話しかけないと、めつたにお口をきゝませんねえ」

「さうですか、自分ではそんな積りもないのだが」

「でも母もさう申して居ますよ」

「さうですか、それではこれから氣をつけませう」

「あら、別段悪いと申したのでは御座いませんわ」

「イ、エ、そんなことは善くないことです。私の父など始終黙つて居て、碌に私にも口をきかないで死んで了ひました」

「でも必はお心は優しい方でしたらうよ。なんでも宅の父上のやうであつたらうツて、母が申して居ました」

「あなたの父上はどんな方です」

「口数はきゝませんが、何時でもこゝくして居て母でも私でもめつたに吐るなん

ぞいふことは御座いませんでした」

「私の父はにこくしたことは御座いません」

「まあ、それでは可憐い方でしたの」

「別に可憐くありません、たゞ黙つて居るばかりで小言も言ひませんから」

「母上さんは如何でした——さうく貴方は母上さんは御存じないのですねえ」と

言つておしんは暫く黙つて居ましたが、何と考へたか、

「貴方宅の母を如何思つて入らつしやいます？」と訊きました。

「優しい方と思つて居ます。眞實の母のやうに思ひます」

「あら、うれしいこと、母が聞いたら如何なによろこびませう」

先づ斯ういふ風でしたが、おしんは矢張年頃の娘です、母と同じ親切な心ばかり

ではすみません、月日の経つと共に、親切以上の心で私に近づくのが私にも解るや

うになりました。母親も心づいて居たには違ひないですが、如何いふ者か、それを

少しも氣にしないばかりか、娘と一しよになつて益々私を可愛がつてくれました。さ

てそれなら私はおしんを如何思ひましたかと言ふと、おしんの情の十分の一も私に

はありませんでした、そんなら私はおしんを冷かに扱つたかと言ふとさうではあり

ません、おしんの思ふまゝ思はせ、するがまゝにさせて置きました。

そして其の結果は如何でせう！、忘れもしません二月十五日の夜のことです。夜

の十二時過ぎでした。下宿人は勿論、母も男の子も皆な寢て了つて家の内はシンと

して居ましたが、外はドン／＼雪が降りそれに風が出て雨戸をうつ雪の音がサラサ

ラと折節聞えて居ました。おしんは九時ごろから私の部屋に來てゐたのですが、十

二時打つて何分が経ちまして部屋を出てゆく時、

「よう御座いますか、必定二三日中に母上に言つて頂戴よ、母上は二つ返事で承知

しますから、ね、必定言つて頂戴よ」と繰返して言ひました。その時のおしんの顔

は今でも忘れません。

この晩から私とおしんは母親の眼をも忍ぶ仲となりまして、おしんは望を達したといふ満足の様子の外に、深い決心と、かすかながらも言ひ知れぬ恐怖とで、子供のやうに笑ふ時があるかと思へば、蒼い顔をして吐息をついて居る時もあり、そして私の様子は以前と少しも變らぬのであります。たゞ竊かに願つて居た慾望、おしんの身體が自分の身體に近づく毎に愈々つのる慾望、後には機會があつたらとまで熱中して居た慾望が達せられたので大きに満足しましたが、心の平穩なることは以前の通りで自然變つた様子が顔にも舉動にも現れなかつたのであります。

おしんは身も魂も私にゆだねて了ひました。私を愛し私を信じて、少しも疑はなぬのです。それですから、早く母親に打明けて結婚を申込んでくれろと言ひましても、私がかまアく私にまかして置けと申せば、それで安んじて居たのです。

私が前に、自分に特別の天性があると申したのは肉慾のことです。私のやうな物に偏らず、冷やかに、其傍を素通りしてゆくことの出来る男が、男女の慾となると前後を顧ることが出来ませんでした。それですからおしんの操を一度破りました以後は、おしんの好む好まぬに關はらず、母親の目も同宿の者の眼もくらし得るかぎり、此慾を満たしました。それをおしんは私の愛情の猛烈なためだと解して居たのです。

それで私は結婚の積がないかといふに、さうでもないのです。いつそ結婚して了はうかと思つたことも有りましたが、どうもそれをおかみさんに打出していふ決心は起りませんでした。言へばおかみさんは大よろこびで承知することも知つては居ましたけれども、ぐづぐづで二月ばかり經ちました。

ところが四月の末のことです、其日は日曜で私は同僚の一人から是非遊びに來いと招かれまして、宿に歸つたのは夜の八時ごろでした、部屋に入るとおしんが其處に坐つて居ましたが私の顔を見るや直ぐ突伏して了つたので、流石の私も胸がドキリとしました。急いで傍に坐り、

「如何したの、え、如何したの」

見ればおしんは泣いて居るのです。「え、如何したといふに、しんちゃんやコラしんちゃん？」

「だつてね、母上が餘りなことを言ふのですもの」といひながら擧げた顔を見ますとなるほど涙は出て居るけれど泣いて居るのか、笑つて居るのか判らないのです。

これで私も少しは胸が落着きましたから、

「何て言つたの母上さんが」

「何とつて別に判然したことは言ひませんが、何だか二人のことを母上は感付いて居るらしいことよ」

「それで何とか言つて」

「お前どうする氣かとだしぬけに聞きますから、どうするツて何を、と言ひましたら、母上にだけは明亮言つておくれ。お前は澤村さんと約束でも仕たのではないか

と言ひますから、私はたゞ黙つて居たのよ。さうすると母上さんが、女といふものは操が大事だとか何とか色々なことを言ふのですよ。私悲しくなつて泣きだしたの。さうするとね、母上さんが、若しお前が澤村さんの妻になる氣なら私も決して否やは言はない、澤村さんなら私も氣に入つて居るのだからお前の決心さへちやんと打明けて呉れ、ば私から今夜にでも澤村さんと相談するが如何かと申しますのよ。私もそれならさうして頂戴と言はうかと思つたけれど、若しね、だしぬけに母上さんが貴方にそんなことを言ひだしたら、貴方に考へがあつて其とぶつかるといけなと思ひましたから、何と言つて可いかわからなくなつたから黙つて居ました、さうすると母上さんが黙つて了ひましたから、私尙ほ悲くなつて泣いて居ましたのよ。けれどもね、何とか言はないと思ひましたから、それぢやア母上さん何卒か貴女から澤村さんに聞いて見て下さいと頼みましたの。けれども其前に私から一寸澤村さんに言うて見ますから其後にして下さいと言ひましたのよ。それぢやアまあお前

の可いやうになさいと母上さんは何だか機嫌が悪いのよ。だから私も直ぐお部屋へ来て先刻から待つて居ましたの」

斯う言はれて私はすっかり當惑して了つたのです。これが當前の方なら、「ウンよろしい、それなら私から直ぐ母上さんに相談しよう」と決心するところですが、私には其決心が出ないのです。私の性質として、かういふ場合に直ぐ熱することが出来ないのです。

「それは困つた」と口を衝いて出るかといふに、さうでもないのです。

「それでは母上さんが今に何とか相談に来るでせう、其時よく相談すれば可い」と靜かに言つて火鉢にもたれて涙の痕をハンケチで拭いて居るおしんの背を撫でました。すると例の慾情が燃えあがりましたから我知らずおしんに摩寄りました。何と淺猿しい人間ではありませんか。

其途端にすつと障子を開けて入つて來たのが母上さんです。(其頃私はおかみさ

んと呼ばず母上さんと言つて居ました。他の下宿人の一人二人もさう呼んで居たのです)

おしんの來て居る時、母上さんの來ることは此二三ヶ月殆ど無いことですから私は喫驚しておしんの傍を飛退きました。おしんは起つて外へ出てゆきました。其あとに母上さんは坐りましたから、私も其向ふに坐り、二人の仲には小さな長火鉢があるのです。

「私少し御相談があるのですが」と先方は直ぐ切りだしました、そして力めて話を真面目にしようとする様子ですが、やはり言い悪いと見えて笑を含んで居るのです。

「はア」と言つたぎり私は何とも言葉が出ません。

「大概お察しても御座いませうが。それで貴方のお心持は如何でせうか、それを一應承はりませんとね、私も心配でなりませんから」

「イ、え、最早僕には如何といふ意見もないのですから、母上さんのお心持一つで

「それでは私にも別に否應はないので御座います、あんな者でも貴方が生涯連れ添つて下さるといふ事なら、私も貴方の御人物は承知して何時も感心して居ますので、すから何よりだとよろこびます」

「なに僕のやうな男が……」

「それでは急に話を決めませうでは御座いませんか、それでないと、それでないと、まあ貴方に限つて萬々そんな事はありませんけれども、若いもの同志のことですから、世間では又た何と申すか分りませんし、さうすると貴方の學校の方も何ですから……」

「さうです、だから僕も何です、その一應、その校長に丈けは打明けて相談して置かうと思ひますから……」

「それは可いお考です、校長さんにお話になりまして、校長さんが表面仲に立つて

くだされば何よりで御座います」とこれで相談は決つたのです。

母は事の成行きを少しも疑ひませんので、校長に相談すれば萬事好結果と呑みこんで了つたのです。私は校長に相談すると言つたのは一方の血路を開いて置いたのです。私のやうな正直者は何時も波に流されながら波に乗つて居るのです。

母上さんが自分の居間（私は一室しかない二階に居ました）に歸つてゆくや私はごろり寝ころんで二十分ばかり茫然して居ましたが、其間何も考がないのでたゞほんやりと天井を眺めてまじく〜と眼瞼を動かして居たばかりです、けれども今一度おしんが来るだらうと待つて居たのです。來さうもないから床をのべて寝てしまひました。

翌朝おしんが来て部屋を片付けて呉れましたが、すつかり妻といふ舉動です。眼だけで物を言つて、口数は多くき、ません、袴の皺などを直してくれて、私のお出でゆく時ちひさな聲で、

「それでは今日校長さんに相談して下さいな」と言ひました、其聲、其調子、少しも疑はないのです。相談といふのはたゞ一通り話して置く丈けのこと、初から決めて居るのでした。

授業が終むと私は校長に少し相談があるからと、一室に連れ込んで、結婚の一條を話しました。けれど勿論私とおしんの關係は言ひません、たゞ手短に下宿屋の女主人から娘を貰つて呉れると言はれて居るが如何したものだらうと持込んだゞけです。これが他のものなら直ぐ校長に娘との關係を疑はれるのですが、私は信用されて居るから校長は平氣なもので、

「君は結婚する氣かね」と聞きました、先づ。

「私は如何でも可いと思ふのです、だから貴下に御意見を伺ひますので」と私も平氣な顔でいひました。

「まア不賛成だねえ、早いよ、せめて二十五六になればだが君は丁年にすら足りな

いのだからねえ、尤も君は二十五六の者でも及ばぬ確固したところのある人だけけれど、矢張年は年だからねえ」

「兎も角校長に相談してと先方には申して置きましたのですから……」

「宜しい、それぢやア私から謝絶つて上げませう」と校長の言葉は頗る手輕いのです。

「けれど随分先方では熱心なのですから唯だ謝絶るわけにも參らんやうですが」

「おかみさんが全然君にほれこんで居ると聞いたが愈々事が持上がったね。まア待ち給へ妙案があるだらう」と校長は笑味を含んで考へて居ましたが、

「妙案があるく、君今日歸つて斯ういひ給へ、校長に相談したら可からうと賛成したが、然し校長の言ふには下宿屋に居て下宿の娘と結婚するのは不味い、それよりか其處を出て校長の宅に當分厄介になる、そして一月も経つたところで校長からお前さんのところの娘を澤村にくれんかと斯う相談を持ちこむ、さうすれば、人目

もよし、勿論儀式にも適ふし、さうし給へと親切に言つてくれたから其議に従はうと思ふ、斯う言ひ給へ。それならおかみさんも尤もだと思ふに違ひない。其處で君は直ぐ私の宅に移轉し給へ。狭いけれど立關の三疊に弟が居る、當分あれと同居するサ。それで君は今後下宿屋に立寄りやうにする、一月も経つた所で、私から理窟をつけて破談を申込めば先方だつて文句はなし、それなりで君の身の方がつくといふものだ、これだ。此妙案しか外にあるまい」

「私は其意を奉じて下宿屋に歸りました。そして校長の妙案を持出しますと、母上さんは大よろこびです、おしんは鬱いで居ましたが別に否とも言ふことが出来ません、其晩おしんは十二時過ぎまで私の室に居ましたが、其いじらしい風は今も私の目に残つて居ます。繰返して、どうか一月と言はず、一時も早く一緒になつてくれろといひました。そして私が一月の間は遊にも來ないやうにするからと申しましたら、それでは九段の公園あたりで時々會つてくれるといひますから私もそれは承知

したのであります。

校長の宅に移つてから一月経ちました。私は一度も下宿屋には行きませんでした。けれどもおしんとは四度構曳しました。最後のとき、おしんは、

「それでは明日ですよ。きつと明日ですよ。若し明日校長さんが來て呉れないなら貴郎でも可いから來て下さいよ。」と言つて、いそぐして私と別れました。

おしんの望通り、其翌日校長は下宿屋を訪ねました。私は如何なることかと、ないない心配で待つて居たのです。事によるとおしんとの關係が全然ばれて了ひはせんかと、心配はそれのみでした。間もなく校長は歸つて來ました。

「案外話が早く着いた。君、あのおかみさんなかく解つて居るなア」と、これを聞いて私はほつと呼吸を吐きました。

「如何でした、おかみさん何とか申しませんでしたか」

「何、何を言ふものか。私がこれぐで結婚はまだ早いし、それに澤村には未だ勉

強がさせたいからイヤといふ氣はないけれど、先づ當分見合せてもらひたい、縁があれば何年か先のことだが、何時のことかそれも分らぬから娘さんは良縁のあり次第何時でも嫁にやられたら可からうと言つたゞけサ、それでもとは言へないぢやアないか」

「娘が傍に居ましたか」

「イヤ私が入つたら直ぐ二階へ上つて了つた」

「おかみさん何と申しました」

「だから今いつたやうに私が言ふと、顔色を變へて居たが、私ももとは判事の妻です、無理にとは申しません。何卒か澤村さんに宜しく仰有つて下さいだつて。判事の後家さんとは知らなかつた。君あれはなかく、確固ものだけ」

「それから娘を御覽になりましたかお歸りに」

「イ、ヤ見ない。二階で待つて居たのサ。可哀さうに」

その後私も二度とおしんには遇ひません。破談後一週間経つて、私は夜そつと下宿屋の前を通りましたら戸が閉まつて、「かしゃ」の札が闇の中に薄く張つてあるのを見ましたばかりです。

正直者の仕事の一つがこれです。いづれ其中、外のをもお話しいたしませう。

18836

大正六年四月十五日印刷
大正六年四月十八日發行

名家傑作集 第七編
『歸去來』
定價金五拾錢



著者
發行者
印刷者
印刷所

國木田獨步
東京市日本橋區通四丁目五番地
和利彦
東京市京橋區月町二十五番地
高橋郁
東京市京橋區月町二十五番地
三協印刷株式會社

發行所

東京市日本橋區
通四丁目五番地

春陽堂
電話本局五十一番
振替一六一七番

■ 名家傑作集 ■

壹册五拾錢 □ 郵稅六錢

(1)	不言不語	尾崎紅葉著	「不言不語」は美しき妻女の悲劇。「心の闇」は盲人の片戀物語。
(2)	其面影	二葉亭著	不遇の才人が流浪する経路を描き、現實的傾向の先驅を成す。
(3)	照葉狂言	泉鏡花著	可憐の少年と女狂言師との情愛を描ける清純なる浪漫的物語。
(4)	水彩畫家	島崎藤村著	最初の試みになれる記念的作品。印象の鮮情感の新を看よ。
(5)	白露紅露	幸田露伴著	深遠なる宗教的哲學的傾向を高揚す。正に代表的東洋藝術也。
(6)	野の花	田山花袋著	「野の花」は主情的傑作。「重右衛門の最後」は新藝術の第一聲。

……………以下續刊……………春陽堂

□ 正宗白鳥氏傑作選 □

■ 入江の邊

▽縮刷

特製美本
價九十五錢
送料八錢

藝術家としての尊き心靈轉換期に際會せる著者會心の傑作を收む。「牛部屋の臭ひ」は性慾に狂ふやさしき娘菊代を、「催眠藥を呑むまで」は春情發動期に於ける少年と世故にたけたる三十女を、「入江のほとり」は世紀末的憂鬱病に悩む青年を、處女作「寂寞」は天才青年畫家の憧憬と落寞の交錯せる心理、戀の確執を描く。其他數篇悉く現代人の心理赤裸々に描破せる新藝術の獨壇上。眞に著者も許し、編者も亦誇る錦篇玉作。

■ 死者生者

▽縮刷

木版刷表紙
價九十五錢
送料八錢

性格と運命との深刻なる葛藤を描いて、其筆致に決るが如き尖銳を示す我が唯一の作家は正宗白鳥氏である。近來の藝術的境地が愈々圓熟完成の極致に近からんとしつゝある事は、何人も嘆稱を吝まない事實である。本書は氏が最近に發表して文壇の視聽を聳動せしめたる名作「死者生者」を初めとして、傑作六篇を集めたるもの、何れも皆著者が不朽の文名を裏書きして餘りあるものゝみである。日本文壇の主流の那邊に存するかを知らんとするものゝ爲めの絶好の小説集である。

■ 集作全吉重三 ■

(6) 霧の雨 四短種篇	(5) 千鳥 八短種篇	(4) 女 五短種篇	(3) 小貓 五短種篇	(2) 赤い鳥 四短種篇	(1) 瓦 六短種篇	全創作七十餘編を収む。各頁殆ど完膚なき迄に改竄したる腐心慘憺たる新藝術の集成である。装幀善美真に出版界を驚愕せしめし列冊	□ 津田青楓氏装書 高野正哉氏
(13) 小鳥の巢 下卷	(12) 小鳥の巢 上卷	(11) 八の馬鹿 十短種篇	(10) 櫛 五短種篇	(9) 桑の實 長篇	(8) 金魚 十短九種篇		

各册十五錢 春陽堂 郵送料六錢

■ 島崎藤村氏作 ■

藤村文集

和田英作氏装

縮本携帯至便

常に新酒の如く世に迎えられるものは藤村氏の詩文也。本書は『藤村詩集』と同時代の散文集にして詩によつて表白し得ざる著者若き日の自由奔放なる感情思想の結晶なり。されば本書を耽讀する者は『藤村詩集』を愛誦せざるべからざると同時に、詩集を愛吟する人々は又本書を繙かざるべからず。新版成るに際し讀者の便を思ひ、特に『藤村詩集』と同形を選ぶ、之れ真に好個の姉妹篇。

菊半形三頁十箱入 價六十五錢・送料六錢

藤村詩集

價八十錢 送料八錢

わが藤村氏の藝術の根柢は「詩」である。氏の詩を知らずして氏の藝術を談ずる事能はず氏の小説を味ふことは出来ない。氏の詩集の賣行が日毎頻繁になり行く事實はよく此詩集の價値の不朽を立證してゐる。

幸田露伴博士作

心の出廬

金八十錢 送料八錢

理想派の大小説家露伴氏は、我日本に一つの誇るべき國詩なきを嘆じ、自ら進んで筆を韻文に染め本書をなす。その文字の幽麗なるその意の深遠なる實に一大國民詩也。

□ 著 氏 節 塚 長 □

平福百穂氏裝

小 說
土

縮刷特製本

夏目漱石氏序文

暗愚なる農民の魂を描する一大郷土藝術なり。漱石先生の序文の中に「面白いから讀めといふのではな
い……苦しいから讀めといふのだと告げたい……何
も考へずに生長した若い女(男でも)の起す菩提心や
宗教心は皆此暗い影の奥から射してくるのだ……」
と、以て本書が萬人の讀むべき名作たることを證す。

縮刷美裝・定價九錢
四五百頁・送料八錢

平福百穂氏裝幀

炭 燒 の 娘

四六判 四百頁
定價 金 壹圓
郵送料 金 八錢

郷土藝術の處女地を開拓せし不出世の天才の遺稿全部を聚集せるものが本書である。小説紀行文等の廿四篇、總てこれ著者が人生及び藝術に對する信實を表白せる不朽の作品である。亂雑と混濁とに惱む都會人の生活に純粹にして清新なる生命力を貫き自然に見離されたる近代人に心のふるさとの親しみ深き哀歌を叫く。見よ日々に壞されて行く郷土の清純を守る最後の砦は茲にある。

□ 著 氏 石 漱 目 夏 □

縮刷 虞美人草

麻布燒繪 價一圓廿錢
模樣表紙 送料八錢

縮刷 三四郎

カンパス 價九十五錢
表紙美本 送料八錢

縮刷 それから

カンパス 價九十五錢
表紙美裝 送料八錢

縮刷 門

カンパス 價九十五錢
表紙美本 送料八錢

縮刷 草 合 (内容) 野分 坑夫

麻布木版 價一圓卅錢
手刷表紙 送料八錢

縮刷 文學評論

布張更紗 價一圓卅錢
模樣表紙 送料八錢

露西亞現代作家選集

零落者之群

昇曙夢氏新譯

現代露西亞十大作家の 代表的名作選譯集

生の充てる藝術は、活力の横溢せる生活から生れて来る。半迷半醒の未開状態より脱して、近年漸く西歐文明の中心に近づき來りし現代露西亞生活は、實に旺盛なる生活の頂上に立つものと云はねばならない。本書は、實に斯くの如き國土のかくの如き生活より生れたる偉大なる藝術的作品の叢集であつて現代露西亞十六作家の代表的作品を網羅し譯出したるものである。若しそれ卷頭の長篇「零落者之群」に至りては、名戯曲「夜の宿」の姉妹小説としてゴリキイ傑作の双壁と稱せらるゝもの、露西亞デモクラットの結晶的名作である。生の底に徹する藝術を求むる新人の將た熟讀玩味すべきものは本書である。譯者昇氏の露西亞文學に於ける造詣とその譯筆の正鵠圓熟とは、既に世の知悉せるところ、今更茲に驚々するを要しない。

定價 縮價送
刷九料
特十八
製五錢
本錢

クローポトキン原著 田中純氏譯

露西亞文藝の主潮

價六十五錢
送料金六錢

原著者の名とその名著『露西亞文學の理想及び現實』の名とは既に久く吾文壇感激の源泉となつて居た。ツルゲニエフ、トルストイ、ドストエウスキイ、ゴリキイ等を中心とする露西亞文藝主潮の精髓は本書に依て盡されてゐる。露西亞研究の機運勃興せる今日本書の齎らす一般智識上の所得は無限に偉大なものでなければならぬ。

二葉亭四迷氏譯著

片戀

其外 價九拾錢
六篇 送料八錢

收むる處「片戀」「あひびき」「ふさぎの蟲」「二狂人」「奇遇」「露助の妻」等。何も明治壇の中期に當つて全然革命的な影響を與へたる露西亞文學諸名作の翻譯である。

相馬御風氏著

還元錄

價六拾錢
送料六錢

本書は御風氏が不安と懊惱の絶頂に於て、安かるべき樂土をその「心のふるさと」に見出し安んじて自らの過去を懺悔し更に新たな著者が宗教の眞髓を語れる歸去來の辭也。

□ 著氏郎太林森外鷗 □

齋藤松洲氏裝 永原止水氏畫

■ 美奈和集

▼ 縮刷

□ 新型特製美本
□ 價一圓五十錢
□ 送料八錢

文學に多少の趣味を有する人で水沫集の名を知らない人はあるまい。我が文壇の人にして水沫集より異常の興味と幾多の啓發とを受けない人はあるまい。實に本集は文壇唯一の寶典である。收むる處『舞姫』『うたかたの記』『埋木』『折薔薇』等二十篇九百餘頁、鷗外博士の傑作及び諸外國の代表的作家の傑作のみ。何れも優雅なる國文と雄渾なる漢文と精巧なる歐文脈とを融合調和して新文運を開拓せる名什にして藝術の精髓、異國の精華收めて茲にある。

永原止水氏裝幀

■ 即興詩人

▼ 縮刷

□ 新型極美本
□ 定價金一圓
□ 送料八錢

原書は丁抹人アンデルセンが筆に係り、譯者其完成に大約九星霜を費す。簡素質實なる國語と雄渾奇勁なる漢文とを調和し、屈曲自在なる雅言と放膽楚麗なる俚辭とを融合し、茲に些かの罅裂をも見出し能はざる藝術品を形成せり。即興詩人の行動こそまことに眞そのもの美そのものにして、局面の轉化は讀者の端睨を許さず。其言は岩間の清水の如く玲瓏人の肺腑を衝く。實に我文壇不滅の典據といふも、尙辭の足らざるを憾む。

書名